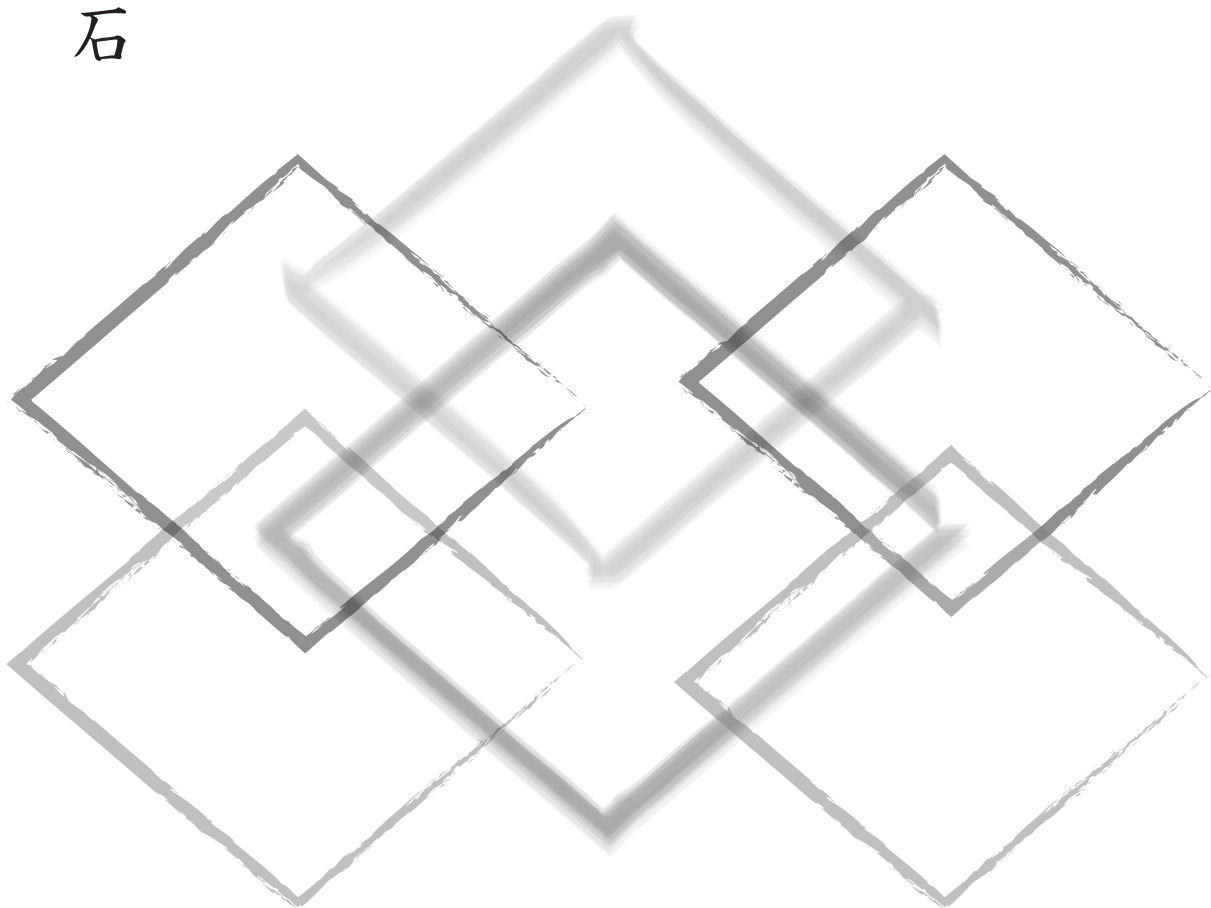


坑夫

夏目漱石



一冊堂青空文庫

坑夫

夏目漱石

さつきから松原を通ってるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いもんだ。いつまで行っても松ばかり生えていていつこ
う要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で発展してくれな
ければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立ったまま松と睨めつ子をし
ている方が増しだ。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ
歩いて来たら草臥れて眠くなった。泊る宿もなし金もないから暗闇の
神楽堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚め

たら、まだ夜は明け離れていなかった。それからべつ平押しひらおにここまでやって来たようなものの、こうやたらに松ばかり並んでいては歩せいく精がない。

足はだいぶ重くなっている。膨ら脛ふくはざに小さい鉄の才槌さいづちを縛り附けたように足搔あがきに骨が折れる。袷あわせの尻は無論端折はしおつてある。その上洋袴ズボンしたさえ穿はいていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじゃ所詮敵しよせんわない。

掛茶屋がある。葭簀よしずの影から見ると粘土ねばつちのへっついに、錆さびた茶釜ちやがまが掛かっている。床几しょうぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、二三足草わら鞋じがぶら下がって、袷天はんてんだか、どてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の裨ちゅう天とどてらの中を行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒くなった齒を、厚くちびるい唇の間から出して笑っている。これはと少し氣味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになった。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の氣もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相に出でつ喰くわしたものと見える。ともかく向うが真面目になったのでようやく安心した。安心したと思う間まもなくまた氣味が悪くなった。男は真面目になった顔を真面目な場所に据すえたまま、白眼しろめの運動が氣に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額ひたいとじりじり頭の上へ登って行く。烏打帽ひさしの廂を跨またいで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降さがって来

た。今度は顔を素通りにして胸から臍へそのあたりまで来るとちよつと留
まった。臍はらの所には墓口がまぐちがある。三十二銭這入はいっている。白い眼は久
留るめがすり米めい絣はりの上からこの墓口ねらを覗のぞったまま、木綿もめんの兵児帯へこおびを乗り越して
やつと股倉またぐらへ出た。股倉から下にあるものは空脛からすねばかりだ。いくら見
たつて、見られるようなものは食くツ附ついちやいない。ただ不断より
少々重たくなっている。白い眼はその重たくなっている所を、わざつ
と、じりじり見て、とうとう親指あとの痕あとが黒くついた俎下駄まないたげたの台まで
降くだつて行つた。

こう書くと、何だか、長く一所ひとところに立っていて、さあ御覧下さいと云
わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼
の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになつたから、すたすた

歩き出したつもりである。にもかかわらず、このつもりが少々覚束な
かったと見えて、自分が親指にまむしを拵えて、俎下駄を振る間際に
は、もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものでは
る。じりじり見るんだから定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間
違い。じりじりには相違ない、どこまでも落ちついている。がそれで
滅法早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持っ
てる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩く
り見られないうちに、早く向き直る工夫はなかったもんだろうか。さ
んざつ腹冷かされて、さあ御帰り、用はないからと云う段になつて、
もう御免蒙りますと立ち上つたようなものだ。こっちは馬鹿氣でい
る。あつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立った。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしまった。と思うとまた足が重くなつた。――この足だもの。何しろ鉄の才槌さいづちを双方の足へ縛りしば附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満更持前まんざらの半間はんまからばかり来たとも云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしてられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家へ戻るうち了簡りようけんはない。東京にさえ居おり切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく気はない。休むと後うしろから追っ掛けられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の中を切つて廻つた日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども

別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか
焼き損そくなつた写真のように曇っている。しかもこの曇ったものが、い
つ晴れると云う的あてもなく、ただ漠然ばくぜんと際限もなく行手に広がってい
る。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら
歩いても走かけても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらな
い。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を
抜出すために歩くのではない。抜け出そうとしたって抜け出せないの
は知れ切っている。

東京を立つた昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き
出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松が厭あきるほど
行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のた

めに歩いているんだか分らなくって、しかも歩かなくっては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多にない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇った世界の中へだんだん深く潜り込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代が違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆が違う。そのくせ暖かな朗かな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭から呼びたくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分はふらふら迷い込むのだから心細い。

この曇った世界が曇ったなりはびこって、定業の尽きるまで行く手

を塞いでいてはたまらない。留まった片足を不安の念に駆られて一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏み込んだ訳になる。不安に追い懸けられ、不安に引つ張られて、やむを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒が明くはずがない。生涯片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とても事に曇ったものが、いつそだんだん暗くなってくればいい。暗くなった所をまた暗い方へと踏み出して行ったら、遠からず世界が闇になって、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなってくれず、と云って暗くもなってくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩めている。これでは生甲斐がない、さればと云って死

に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいた。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。後からぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からどきんともぞつともしない。どきんとでもぞつとでも勝手にするが善いと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がっていたんだらう。その上いつその事を断行するのが今ではないと云う安心がどこにあるらしい。明日あしたになるか明後日あさってになるか、ことに由よつたら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差支さしかえないと高たかを

括くくつていたせいかも知れない。華嚴けごんの瀑たきにしても浅間あさまの噴火口ふんかこうにしても道程みちのりはまだだいぶあるくらいは知らぬ間まに感じていたんだろう。行き着いていよいよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇った世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度において免まぬれる望があると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこのくらの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的めあてに歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責せめてもの慰藉いしやと心得るようになって来る。ただし目指す

死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくっちゃならないと思いながら、雲を攫つかむような料簡りょうけんで歩いて来ると、後うしろからおいおい呼ぶものがある。

どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根しょうねがあるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持たなかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさっきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の袈天はんでんとどてらの合あいの子こが出て、脂やにだらけの齒をあらわに曝さらしながらしきりに自分を呼んでいる。

昨夕^{ゆうべ}東京を立つてから、まだ人間に口を利^きいた事がない。人から言葉^{ことば}を掛けられようなどとは夢にも予期していなかった。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸^かけられたのだから——粗末な齒^は並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然^{はつきり}すると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装^{なり}も動作もあんまり気に入っちゃいない。ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪^{けんお}の念が胸の裡^{うち}に萌^もし掛けたくらいである。それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打つて変つた一

種の温味あたたかみを帯びた心持で後歸りあとがえをしたのはなぜだか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思っていた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反対の見当けんとうに取って返す事になる。暗い所から一歩立ち退ひとあしいた意味になる。ところがこの立退たちのかが何となく嬉うれしかった。その後のちいろいろ経験をして見たが、こんな矛盾は到いたる所に転ころがっている。けっして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらえるのと云って得意がっている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分ったような事を云ってるが、ありや、みんな嘘うそをかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがってるんだろう。本当の事を云うと性格なんて纏まとまったものはありやしない。

本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたって、小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手古^{てこ}ずるくらい纏まらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まらなく出来上つてるから、他人^{ひと}も自分同様締^{しま}りのない人間に違^{ちが}ないと早合^{はやがてん}点^{てん}をしているのかも知れない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉^{めくら}縞^{しま}の傍^{そば}まで行くと、どて^{どて}らはさも馴^なれ馴^なれしい声で

「若い衆^{しゅ}さん」

と云いながら、大きな顎^{あご}を心持襟^{えり}の中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めている。自分は好加減^{いいかげん}なところで、茶色の足を二本立てたま^ま、

「何か用ですか」

と叮嚀^{ていねい}に聞いた。これが平生^{へいぜい}ならこんなどてらから若い衆さんなんて云われて快よく返辞をする自分じゃない。返辞をするにしてもうんとか何だとかで済したろうと思う。ところがこの時に限って、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような氣持がした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けっしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見倣^{みな}したような語氣で、

「御前^{おまえ}さん、働^{りようけん}く了簡はないかね」

と云った。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覺悟していたんだから、藪^{やぶ}から棒^{ぼう}に働^{りようけん}く了簡はないかねと聞かれた時には、何と答えて善^いいか、さっぱり訳^{わけ}が分らずに、空脛^{からすね}を突つ張ったま

ま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺^{なが}めていた。

「御前さん、働^{はたら}く了簡はないかね。どうせ働^{はたら}かなくっちゃならないんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹も、どうか、どうか、受け答の出来るくらいに眼前の事況^{じきよう}を会得^{えとく}するようになった。

「働^{はたら}いても善^いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やっと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通っておる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ

行く気でいた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫然びんぜんな感がある。と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背そむかねばならぬほどに自分は薄弱なものであったと云う事をも証拠立てている。手短てみじかに云うと、自分は暗い所へ行く気でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引っかけが出来れば、得えたり賢かしこしと普通の娑婆しゃばに留まる了簡りょうかんなんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引つかけてくれたんで、何の気なしに足が後向うしろむきに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳

になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にするかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖くなつてぞつとしたに違ひない。それほど娑婆しやば気が、戻り掛ける途端とたんにもう萌きざしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようになどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆気が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末などてらだうまが非常に旨く自分の心理状態を利用した勧誘である。だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚さめて見れば、自

分はいつか娑婆の人間になっている。娑婆の人間である以上は食わなければならぬ。食うには働かなくっちゃ駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと云うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもっともだと首肯した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」

と自分はここで再び聞き直して見た。

「大變儲かるんだが、やって見る気はあるかい。儲かる事は受合なんだ」

どてらは上機嫌の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待つて

いる。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌あいきょうにもなんにもなっちゃいない。元来がんらい笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやって見ましょう」

と受けてしまった。

「やって見る？ そいつあ結構だ。君儲もうかるよ」

「そんなに儲けなくっても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだなんて

云われちゃ困るが。きつとやるだろうね」

ど・て・ら・は・む・や・み・に・念・を・押・す・。自分はそので、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかった。云わばい・き・み・出・し・た・答・である。大抵の事ならやつて退けるが、万一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずにやる気ですと云ったんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だって、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区別はありやしない。すべてがだ・ろ・う・に・変・化・して・しま・う・。無責任だと云われるかも知れないが本当だから仕方がない。こ

れからさきも危^{あや}しいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略^{ほぼ}話^{ましま}が纏^{まと}ったものと呑^のみ込んで

「じゃ、まあ御^お這^{はい}入り。緩^{ゆっ}くり御茶でも呑^のんで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入ってどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神^{かみ}さんが妙な臭^{にお}いのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減って来た。減って来たのか、減っていたのに気がついたのか分らない。墓^{がまぐち}口には三十二銭這入っている、何か食おうかしらと考えていると

「君、煙^{たばこ}草を呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がい。袋の角^{かど}が裂けてるのは仕方がないが、何だか薄^{うす}穢^{ぎた}なく垢^{あか}づいた上

に、びしゃりと押し潰つぶされて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてゐるように思われる。袖そでのないどてらだから、入れ所に窮はらして腹掛がけの隠しへでも振ねじ込んで置くものと見える。

「ありがとうございます、たくさんです」

と断ると、どてらは別に失望ていの体もなく、自分でかたまつたうちの本を、爪垢つめあかのたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺しわだらけになつて、太刀たちのように反そつてゐる。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻から煙けむが出る。際きわどいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年いくつになんなさる」

どてらは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりするようだ

が、何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲^{もう}かるときには君になって、不断の時には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になっているらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向^{うしろむき}になつて盆を拭^ふきながら云つた。後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独^{ひと}り言^{こと}だかどてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なんだか分らなかつた。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくっちゃならないような語気である。自分はだ
ま^{しょうぎ}って床几を離れた。

正面に駄菓子^{だがし}を載^のせる台があつて、縁^{ふち}の毀^とれた菓子箱の傍^{そば}に、大きな皿がある。上に青い布巾^{ふきん}がかかつている下から、丸い揚饅頭^{あげまんじゅう}が食^はみ出している。自分はこの饅頭が喰^くいたくなつたから、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍^{そば}へ来て、つらつら饅頭^{まんじゅう}の皿を覗^{のぞ}き込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留^{とど}まるや否^{いな}や足音にパツと四方に散つたんで、おやと思^{おも}いながら、気を落ちつけて少しく揚饅頭を物色していると、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せたように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色^{きいろ}い油切った皮の上に、黒い^{くろ}ぽちぽち^{でたらめ}が出鱈目にでき

る。手を出そうかなと思う矢先へもって来て、急に黒い斑点が、晴夜
の星宿のごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易してしまつて、
ぼんやり皿を見下していた。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日揚げたばかりだから」

かみさんは、いつの間にか盆を拭いてしまつて、菓子台の向側に
立っている。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは
何と思つたか、いきなり、節太の手を皿の上に翳して、

「まあ、大変な蠅だ事」

と云いながら、翳した手を豎に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸^{はし}で、饅頭をぽんぽんと七つほど挟^{はさ}み込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床几^{しょうぎ}の上へ持つて行った。自分は仕方がないからまたもとの席へ帰って、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺^{なが}めながら、どてらに向って

「一つどうぞです」

と云って見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあったらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴やつを取って頬張ほおばつちまった。唇くちびるの厚い口をもごつかせているところを観察すると、満更まんざらでもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗きれいなのを摘つまみ出して、あんぐりやつた。油の味が舌の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦い餡にがあんが卒然として味覚を冒おかして来た。しかしこの際だから別にしまったとも思わなかった。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑ふへ呑のみ下くだしてしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大変速力が早い。そうして食つてゐる間は口を利きかない。働く事も儲もつかる事もまるで忘れてゐるら

しい。したがって七つの饅頭は呼吸を二三度するうちに無くなってしまった。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬く間にどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡^{しりごみ}をするほどの汚^{きた}ならしいものでも、一度皮切りをやる
と、あとはそれほど神経に障^{さわ}らずに食えるものだ。これはあとで山へ
行ってしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐^{ちんぷ}の真理になって
しまったが、その時は饅頭^{まんじゅう}を食いながら少々呆^{あき}れたくらい後^{あと}が食いた
くなつた。それに腹は減っている。その上相手がどてらである。この
どてらが事もなげに、砂のついた饅頭をぱくつくところを見ると、多
少は競争の気味にもなつて、神経などは有つても役に立たない、起す
だけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのん

で饅頭の御代りおかわを貰もらった。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿しょうぎが床几の上に
乗るや否や、自分の方でまず一つ頬張ほおばった。するとどてらも、「や、
すまない」とも何とも云わずに、だまって一つ頬張った。次に自分が
また一つ頬張る。次にどてらがまた一つ頬張る。互違たがいちがいに頬張りつ子を
して六つ目まで来た時、たった一つ残った。これが幸い自分の番に
当たっているの、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張ってし
まった。それからまた御代りを貰った。

「君だ**いぶ**やるね」

とどてら**が云**った。自分は**だいぶ**やる気も何もなかったが、云われて
見ると**だいぶ**やるに違ない。しかしこれは初手しよてにどてらの方で自分の

食いたくないものを、むしゃむしゃ食って見せて、自分の食慾を誘致した結果が与^{あずか}つて力あるようだ。ところがど^どて^どら^どの方では全然こつちの責任でだいぶやってるような口^{こう}氣^きであつた。だから自分は何だかど^どて^どら^どに對して弁解して見たい氣がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫^{つか}むようにど^どて^どら^どにも責任があるんだろうと思ふだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙っていた。すると

「君、揚饅頭がよつぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日^{おととい}揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌^{きら}だとは無論云われない。だから今度も黙っていた。そこへ茶店の

神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような気がした。そこでますます黙ってしまった。黙って聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云ってる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見当けんとうがつかなかった。とにかく饅頭はどうでも構わないから、肝心かんじんの労働問題を聞糾ききただして見ようと思つて、

「先刻さつきの御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を食わなくっちゃならない身分なんですが、いったいどんな事をやるんですか」

とこつちから口を切って見た。どてらは正面の菓子台を眺めていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりにして、しきりに儲けさせたがっている。こつちへ向き直って、自分を誘い出そうと力める顔つきを見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張っている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形にでき上った皺が深く映っている。この様子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなった。

「僕はそんなに儲けなくっても、いいです。しかし働く事は働くで

す。神聖な労働なら何でもやるです」

ど・て・らの・頬あたりの・辺には、はてなと云う景色けしきがちよつと見えたが、やが

て、かの弓形ゆみなりの皺を左右に開いて、脂やにだらけの齒を遠慮なく剥むき出し

て、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考えるとど・て・らには

神聖な労働と云う意味が通じなかったらしい。いやしくも人間たるも

のが金儲かねもうけの意味さえ知らないで、こむずかしい口巧くちこうしや者な事を云うか

ら、気の毒だと云うのでど・て・らは笑ったのである。自分は今が今まで

死ぬ気でいた。死なないまでも人間のいない所へ行く気でいた。それ

ができ損そこなったから、生きるために働く気になったまでである。儲もうかる

とか儲からないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかり

りじゃない、東京にいて親の厄介やっかいになつてゐる時分からなかった。どこ

ろじやない儲主義は^{もうけしゆぎ}大いに^{けいべつ}輕蔑していた。日本中どこへ行つてもそのくらいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じていた。だからどてらがさつきから儲かる儲かると云うのを聞きたんびに何のためだろうと不思議に思っていた。無論^{しやく}癩には障^{さわ}らない。癩に障るような身分でもなし、境遇でもないから、いっこう平氣ではいたが、これが人間に対する至大の甘言で、勧誘の方法として、も^{ききめ}っとも利目のあるものだとは夢にも想い^{おも}至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいっこう通じなかつた。今考えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、

「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」

と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日^{きのう}自宅を逃

げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃剣げっけんの稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくっちゃあならない身分です」

「そうだろう。働いた事がなくっちゃ……じゃ、君、まだ儲けた事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙つてると、茶店のかみさんが、菓子台うしろの後から、

「働くからにゃ、儲けなくっちゃあね」

と云いながら、立ち上がった。ど・て・ら・が、

「全くだ。儲けようたつて、今時そう儲け口が転がつてるもんじゃ

ない」

と幾分か自分に対して恩に被^きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行つた。このそ^うさ^が妙に氣になつて、ことによると、まだその後^{あと}があるかも知れないと思つたせいか、何気なく後姿^{うしろかげ}を見送っていると、大きな黒松の根方^{ねがた}のところへ行つて、立小便^{たちしょうべん}をし始めたから、急に顔を背^{そむ}けて、ど^てら^らの方を向いた。ど^てら^らはすぐ、

「私^{わたし}だから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨^{うま}い話をするんだ。これがほかのものだったら、受合^{うあ}つてただじゃ話しっこない旨^{うま}い口なんだからね」

とまた恩に被^きせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張って答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、ど・て・ら・が、すぐに云う。自分は黙って聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅^{やま}山へ行って仕事をするんだが、私が周旋さえすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんじゃないか」

自分は何か返事を促^{うなが}されるような気がしたけれども、どうもど・て・らの調子に載^のせられて、そうですとは答える訳に行かなかった。坑夫と云えば鉾山の穴の中で働く労働者に違ない。世の中に労働者の種類は

だいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくって、もっとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合すどころの騒ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種属があると云うのは、大晦日おおみそかのあとにまだたくさん日が余っていると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどてらだまがこんな事を饒舌しゃべるのは、自分を若年じゃくねんと侮あなどつて、好い加減に人を瞞だますのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とっつけからすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なもんさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまちまって、好きな事が出来らあね。な

に銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めっから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向^{むき}を持って行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になって置きやあ四五年立つうちにや、唸^{うな}るほど溜^{うな}るばかりだ。――何しろ十九だ。――働き盛りだ。――今のうち儲けなくっちゃ損だ」

と一句、一句間^{あいだ}を置いて独り言^{ひとごと}のように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占^{くちうら}で、全然どてらと同意見を持っているように思われた。無論それでよろし

い。またそれでなくつてもいっこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであつた。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出^{しで}かした不都合やら義理やら人情やら煩悶^{はんもん}やらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日^{きのう}までの自分の事を考えると、どうしたって、こんなに温和^{おとな}しくなれる訳がないのだが、実際この時は人に逆^{さから}うような気分は薬にしたくつても出て来なかつた。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかつた。おそらく考える余裕がなかつたんだらう。人間のうちで纏^{まと}つたものは身体^{からだ}だけである。身体が纏^{まと}つてゐるもんだから、心も同様に片づいたものだと思つて、昨日と今^{きよ}

日とまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済ましているものがだいぶある。のみならずいったん責任問題が持ち上がって、自分の反覆はんぷくを詰なられた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分ですら、無理と思いがらも、いささか責任を感じようだ。して見ると人間はなかなか重宝ほうに社会の犠牲になるように出来上ったものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した最眞ひいきめ目なしの真相から割り出して考えると、人間ほどのあてにならないものはない。約束とか契ちかいとか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯たて

にとって相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行は野暮の至りである。
大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理を強て圧しかくして、知らぬ顔でやって退けるまでである。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに気がついたなら、むやみに人を恨んだり、悶えたり、苦しまぎれに自宅を飛び出したりしなくっても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変ったところを、他人扱いに落ち着き払って比較するだけの余裕があつたら、少しは悟れたろう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかった。ただ口惜しくって、苦しくって、悲しくって、腹立たし

くって、そうして気の毒で、済すまなくって、世の中が厭いやになって、人間が棄すて切れないで、いても立っても、いたたまれないで、むちゃくちゃに歩いて、どてらに引つ掛つて、揚饅頭あげまんじゅうを喰ったばかりである。

昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫つなぎ続の取れない魂がいとどふわつき出して、實際あるんだか、ないんだかすこぶる明瞭めいりょうでない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、朦朧もうろうと一団の妖氛ようふんとなつて、虚空遥こくうはるかに際限もなく立て罩こめてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲もうける事ばかりを目的

に働く人間じゃないとか、儲けさえすりゃどこがいいんだとか、何とか理窟りくつを捏ねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘弁かんべんしないところを、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する気が出なかったのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強しいて殺してしまうほどの無理を冒おかさない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲かろうが、儲かるまいが、とんと問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、

いかに自分の意見と相容れぬ法螺ほらを吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格に慚すくなからぬ汚点を貽のこす恐れがあつても、まるで氣にならなかつたんだろう。こんな時には複雑な人間が非情に單純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅うちを飛出したのである。それが第二には死なくなつても好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと變化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並なみの働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第

一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返って、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと言う決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかったし、第一と交渉を絶つほど遠くにもいなかったと見える。働きながら、人のいない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶う訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑の中で、日の目を見ない家業である。娑婆にいながら、娑婆から下へ潜り込んで、暗い所で、鉋塊土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごてにいるが、自分ほど坑夫に適し

たものはけっしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。――
――とここまで明瞭には無論考えなかったが、ただ坑夫と聞いた時、何
となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今
思い出して見ると、やっぱりどうあっても他人ひとの事としか受け取れな
い。

そこで自分はどてらに向ってこう云った。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」
するとどてらはなかなか鷹揚おうような態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私わたしが周旋さえす
りやきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙っていると、

茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵ちようぞうさんが口を利ききさえすりゃ、坑夫うけあいは受合だ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。それからいっしょに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男を捕つかえて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん当字あてじである。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張って、思いも寄らない見当けんとうに向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異いな事だ。

さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合うから、自分もなれるんだろうと思って、

「じゃ、どうか何分願います」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺はさつぱり分らなかった。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに黙つていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻を床几しょうぎから立てて、「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支度したくはいいかい。忘れものがないようによく気をつけて」

と云つた。自分はうちを出る時、着のみ着のままで出たのだから、身体からだよりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝心かんじんの揚げ饅頭あげまんじゅうの代を忘れている。長蔵さんは平気な面つらをして、もう半分ほど葎簀よしずの外に出て往来を眺ながめていた。自分は懷中から三十二銭入りの墓口がまぐちを出して饅頭三皿の代を払って、ついだから茶代として五銭やった。饅頭の代はどうとう忘れちまって思い出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫になつて、うんと溜めて歸りにまた御寄おより」

と云つたのを記憶している。その後坑夫のちはやめたが、ついにこの茶店へは寄る機会がなかった。それから長蔵さんに尾ついて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃ほこりを上げて、やって来ると、

さっきの長たらしいのに引き易^かえて今度は存外早く片づいちゃまった。
いつの間^まにやら松がなくなったら、板橋街道のような希^け知^ちな宿^{しゆく}の入口
に出て来た。やッぱり板橋街道のように我^が多^た馬^ば車^{しゃ}が通る。一足先へ出
た長蔵さんが、振り返って、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗っても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくってもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくってもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云ったから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行つてしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通つた馬車の埃が日光にまぶれて、往来が濁つたように黄色く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町並がしだいに立派になる。しまいには牛込の神楽坂くらいな繁昌する所へ出た。ここいらの店付や人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長蔵さんのようなの

はほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかったのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いったい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついぞ一と口も自分くちに聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男しよいの所為としては、少しく無頓着むとんじやく過ぎるようにも思われたが、この男は

全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後あとで分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようにして、ある横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有もつたものの子である。込み入った事情があつて、耐こらえ切れずに生家うちを飛び出したようなものの、あながち親に対する不平や面当つらあてばかりの無分別むふんべつじゃない。何となく世間が厭いや

になった結果として、わが生家まで面白くなかったと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮あせれば焦慮るほど厭になる。揚句あげくの果は踏張はてふんばりの栓せんが一度にどつと抜けて、堪忍かんにんの陣立そうくずが総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまったのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍そばにまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲まわりに親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲まいている。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因縁いんねんで自分も丸くなつたり四角になつたりしなくつちやならなくな

る。しかし自分はそう丸くなったり四角になったりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別わきまえていた。が済まないと思えば思うほど丸くなったり四角になったりする。しまいには形態ばかりじゃない組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨めうらしそうに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲ったりくねったりするところを、どうかして隠そうと力つとめたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終おせる段じゃない。親にも親類にも目めつかってしまった。怪けしからんと云う事になった。怪しかるとは自分でも思っていなかったが、だんだん

聞き糾ただして見ると、怪しからん意味がだいぶ違つてゐる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の少女の傍そばにいたら、この先どうなるか分らない、ことに因よると實際弁解の出来なような怪しからん事が出来しゅつたいするかも知れないと考え出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に対しては氣の毒である、済まん事になつたと云う念が日々烈にちにちほげしくなる。――こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、五色の糸のこんがらかつたように、こつちを引くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるとこつちが釣れると云う安排あんばいで、乱れた頭はどうあつても解ほどけない。いろいろに工夫を積んで自分に愛想あいその尽きるほどひねくつて

見たが、とうてい思うように纏まとまらないと云う一点張いってんばりに落ちて来た時に――やっと気がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいいような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当あてにしていた。つまり往来で人と行き合った時、こっちは突ッ立ったまま、向うが泥濘ぬかるみへ避よけてくれる工面くめんばかりしていたのだ。こっちが動かない今のままのこっちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじゃない。世間の掟おきてという鏡が容易に動かせないとする、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別で

ある。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙けむに
してしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほ
かに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕
掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古けいこをし
ても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に
来なければ自殺するのが好かろうとなつた。しかし自分は前に云う通
り相当の身分のある親を持って朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家うち
にいては自滅しようがない。どうしても逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れ
る事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らない

と考へた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残つた人は自分の逃亡のために助かるに違ひないと考へた。のみならず逃亡をしたつて、いつまでも逃亡かけおちている訳じやない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやつぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅の計はかりごとめぐを廻らしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になつてしまふが、事實を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきごみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと

考える。

それだけでなく、実際その当時の、二人の少女の有様やら、日ごと
に変わる局面の転換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類
の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だい
ぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、
まあやめにして、せっかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔しゅつぽんしたんだから、
固もとより生きながら葬ほうごられる覚悟でもあり、また自ら葬みづかつてしまふ了簡りようけん
でもあつたが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら棄鉢すてばちになつて
も長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべて
の人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえできる

事なら語りたくないほど情ない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言も聞き糺さなかつたのは、変と思ひながらも、内々嬉しかった。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘をつく事をよく練習していなかつたし、ごまかすと云う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたろうと思う。

そこで長蔵さんに尾いて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎になつて、所々は田圃の片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅だけであるなど気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑かな所へ出された。その突当りが停車場であつた。汽車に乘らなくつては坑夫になる手続

きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知った。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つていた。

そこで停車場へ這入る五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云つたのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、
「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場の入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分と

いっしょに汽車へ乗って先方^{さき}まで行く気なんだろうか、それにしては
余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にこう叮嚀^{ていねい}な世話を
焼くのはおかしい。ことによると彼奴^{あいつ}は詐欺師^{かたり}かも知れない。自分
は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭^{いや}に
なつて来た。いっその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今
までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当^{けんどう}に向け易え
た。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかなかったと見えて、茫然^{ぼうぜん}と
して、停車場前の茶屋の赤い暖簾^{のれん}を眺^{なが}めていると、いきなり大きな声
を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その
所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟つた。
振り返ると、長蔵さんは遠方から顔^{はす}だけ斜に出して、しきりにこちら

を見て、首を豎たてに振っている。何でも身体からだは便所の堀へいにかくれているらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔めあを目的てきに歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそもないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた變つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞かたられようにも、名誉も財産もないんだから初手しよてから見込しろものの立たない代物である。昨日きのうの自分と今日の自分とを混同おさへして、長蔵さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給さの差おさへし押おさへを苦にするようなものであつた。長蔵さんは教

育のある男ではあるまいが、自分の風体ふうていを見て一目いちもく騙かたるべからずと看破するには教育も何も要いったものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだろうと思ひ出した。それならそれで構わない。給料のうちを幾分かやれば済む事だなどと考えながら用を足した。——実は自分がこれだけの結論てすうに到着するためには、わずかの時間内だがこれほどの手数と推論とを要したのである。このくらい骨を折ってすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会得えとくする事が出来なかったのは、年が十九だったからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、こうか、漕こぎつけながら、それでも、もしや好意こいずくの世話ずき

から起った親切じゃあるまいかと思つて、飛んだ気兼ねしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方^{さき}まで連れて行つていただいては恐縮ですから、もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろ御世話になつてありがたいです。これから先はもう僕一人でやりますから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省はぶいたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰めんくらつたが、

「今貴方あなたに伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私わたしの名前くらいで、すぐ坑夫になれると思つてるのは大

間違いだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんじゃないよ」

と跳はねつけられちまった。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶あいさつをすると、

「なに遠慮しないでもいい、先方さきまで送ってあげるから心配しないが

いい。――袖摩そですり合うも何とかの因縁いんねんだ。ハハハハハ」

と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けていると、だんだん停ステ車場イシヨウへ人が寄ってくる。大抵は田舎者いなかものである。中には長蔵さんのよう

な裨天兼どてらを着た上に、天秤棒さえ荷いだのがある。そうかと思うと光沢のある前掛を締めて、中折帽を妙に凹ました江戸ツ子流の商人もある。その他の何やらかやらでベンチの四方が足音と人声でざわついて来た時に、切符口の戸がかたりと開いた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がって、みんな鉄網の前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ちつき払ったものであった。例の太刀のごとくそつくりかえった「朝日」を厚い唇の間に啣えながら、あの角張った顔を三が二ほど自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるかい」

と聞いた。また自分の未熟なところを發表するようだが、実を云うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫も上らなかったのである。

汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら金を払うものか、また金を払う必要があるものか、ぐと思ひ至らなかつたのは愚の至である。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢うまでは無賃ただで乗れるかのごとき心持で平氣でいたのは事實である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さんにさえ食つついてさえおれば、どうかしてくれるんだろうと云う依頼心が妙に潜ひそんでいたんだろう。ただし自分じゃけつしてそう思つていなかった。今でもそうだとは自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場ステーションへ来て汽車賃の汽の字も考えずにいられるもんじゃない。その癖こんなに依頼している長蔵さんに対して、もう御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人

で行きますのと平ひらに同行を断つたのは、どう云う了簡りようけんだろう。自分は
こう云う場合にたびたび出逢であつてから、しまいには自分で一つの理論
を立てた。――病気に潜伏期があるごとく、吾々われわれの思想や、感情にも
潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有もちながら、そ
の感情に制せられながら、ちつとも自覚しない。またこの思想や感情
が外界の因縁いんねんで意識の表面へ出て来る機会がないと、生涯しょうがいその思想や
感情の支配を受けながら、自分はけつしてそんな影響こうえいを蒙おぼった覚おぼえがな
いと主張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をし
て見せる。がその行為言動が、傍はたから見ると矛盾になっている。自分
でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみ
を受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたの

も、元はと云えば、やっぱりこの潜伏者を自覚し得なかったからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒おかさない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだろうに。ところがそう思うように行かんののは、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持っていなさるか」と問われた時に、自分ははっと思つて、少からず狼狽うろたえた。三十二銭のうちで饅頭まんじゅうの代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて吞込のみこみ顔に受合つたんだから、自分は少し図迂ずうずうしい人間であつたんだと気がついたら、急に頬辺ほっぺたが熱くなつた。その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今

だったら、たとい電車の中で借金の催促をされようとも、ただ困るだけで、けっして赤面はしない。ましてぽん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥しゅうちの血色を見せるなんてもつたない事は、夢にもやる氣遣きづかいはありやしない。

自分はどうか云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと答えなかった。しかし実際がないんだから嘘うそを吐く訳には行かない。嘘を吐きつ放ばなしにして済ませられるなら、思い切って、嘘を吐く事にしたらうが、とにかく今切符を買うと云う間際まぎわで、吐けばすぐ露現ろけんしてしまうんだから始末がわるい。と云って汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんざらの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣のついた、煩悶はんもんをしている、つまり

ん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかったもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかったが、何しろもつたいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しって、御前さん、いくら持ってるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、恐縮しても、まるで頓着とんじゃくしない。ただいくら持ってるか聞きたい様子であつた。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。

何しろ^{しめ}めて三十二銭のうち、饅頭^{まんじゅう}を三皿食つて、茶代を五銭やつたんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くつても同じくらいなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私^{わたし}が足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一銭銅や二銭銅を勘定するのは、いかにも体裁^{ていさい}がわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭^{いや}だから、懷^{ふところ}から例の墓口^{がまぐち}を取り出して、墓口ごと長蔵さんに渡した。この墓口は鰐^{わに}の皮で拵^{こしら}えたすこぶる上等なもの

で、親父から貰う時も、これは高価な品であると言ふ講釈をとくと聴かされた贅沢物である。^{ぜいたくもの}長蔵さんは墓口を受け取つて、ちよつと眺め^{なが}ていたが、

「ふふん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまつた。中味を改めないところはよかつたが、

「じゃ、私が切符を買つて来て上げるから、ちゃんとここに待っていてなくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行つてしまつた。見ていると人込の中へ這入^{はいつみ}つたなり振り返りもしないで切符を買^{はい}う番のくるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方^{いまさきがた}

までの長蔵さんは始終しじゆう自分の傍そばに食つついていて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れていゝように見受けられた。あんまり人が多くつて、こつちへ眼をつける暇がなかつたんだろう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺ながめていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれっばかりしか持つていないのかと長蔵さんが驚くに違ちがない。どうも氣の毒である。いくら足し前をするんだらうなどと入らざる事を苦くに病やんでいると、やがて長蔵さんは平生へいぜいの顔つきで歸つて來た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わない。きまりが悪かったから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃銭の事は口へ出さなかった。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれっきり云わなかった。したがって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別にこれと云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物できものだらけの、腐爛目ただれめの、痘痕あばたのある男が乗ったので、急に心持が悪くなって向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよっぽどおかし

い。生家^{うち}を逃亡^{かけお}ちて、坑夫^{さか}にまで、なり下る決心^{さか}なんだから、大抵の事に辟易^{へきえき}しそうもないもんだがやっぱ醜^{きた}ないものの傍^{そば}へは寄りつきたくなかった。あの安排^{あんばい}では自殺^{じそく}の一日前でも、腐爛^{ふらん}目の隣を逃げ出したに違^{ちが}ない。それなら万事^{ばんじ}こ^{きち}う^{ようめ}ん^んに段落^{だくらく}をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵^{ちやうざう}さんや茶店^{ちやてん}のかみさんに逢^あった時なんぞは平生^{へいぜい}の自分にも似^にず、ぐうの音^{おと}も出さずに心^{しん}からおとなしくしていた。議論^{ぎろん}も主張^{しやうぢやう}も気概^{きがい}も何もあつたもんじゃありません。もっともこれはだいぶ餓^{ひも}じい時であつたから、少しは差引^{さひき}いて勘定^{かてい}を立^たてるのが至^{いた}当^{たう}だが、けっして空腹^{くうぷ}のためばかりとは思^{おも}えない。どうも矛盾^{まひん}――
――また矛盾^{まひん}が出^でたから廢^よそう。

自分は自分の生活^{しやくわ}中^{ちゆう}もつとも色彩^{しきさい}の多い当時の冒険^{ぼうけん}を暇^{ひま}さえあれば

考え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく厳密なる解剖の刀を揮^{ふる}つて、縦横^{たてよこ}十文字に自分の心緒^{しんしよ}を切りさいなんで見^むるが、その結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔^{むか}しだから忘れちまったなどと云つてはいけない。このくらい切実な経験は自分の生涯^{しょうがい}中に二度とありやしない。二十^{はたち}以下の無分別から出た無茶だから、その筋道が入り乱れて要領を得^めんだと評してはなおいけない。経験の当時こそ入り乱れて滅多^{めった}やたらに盲動するが、その盲動に立ち至るまでの経過は、落ち着^{おち}いた今日の頭脳^{こんにち}の批判を待たなければとても分らないものだ。この鉾山^{ゆき}行^{ゆき}だって、昔の夢の今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたから、あらいざらい書き立てる勇氣があると云うばかりじゃな

い。その時の自分を今の眼の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだつてどうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻下こっかの事情と云うものは、転瞬てんしゅんの客氣かっきに駆られて、どんなでもない誤謬ごびゅうを伝え勝ちのものである。自分の鉱山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、気取つた、偽りの多いものが出来上つたろう。とうてい、こうやって人の前へ御覧下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一むちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかつた。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少から

ず驚嘆した。のみならず、平気な顔で腐爛目と話し出したに至って、
少しく愛想が尽きた。あいそ

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻って、腐爛目は、

「まただいぶん儲もうかるね」

と云った。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液つばきをした。するとその唾液が汽車の風で自分の

顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じている。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからってんで贋銭をやって帰したとするんだ」

「うんそれから」

「後で泥棒が贋銭と気がついて、あすこの亭主は贋銭使だ贋銭使だつて方々振れて歩くんだ。常公の前だが、どっちが罪が重いと思う」

「どっちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねふくなつたから、窓の所へ頭を
持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になる
ものは寝るに限る。死んでもおそろく同じ事だろう。しかし死ぬの
は、やさしいようであかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠
で間に合せて置く方が軽便である。柔道をやる人が、時々朋友ほうゆうに咽喉のど
を締めて貰う事がある。夏の日ひ永ながのだるい時などは、絶息したまま五
分も道場に死んでいて、それから活かつを入れさせると、生れ代るような

好い気分になる——ただし人の話だが。——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治あらりようじを頼んだ事がない。睡眠はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り損そこなう危険も伴ともなっていないから、心配のあるもの、煩悶はんもんの多いもの、苦痛に堪たえぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるもの、取っては、至大なる自然の賚たまものである。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑ひまもないうちに、うつとりとしちまつて、生きている以上は是非共その経過を自覚しなければならぬ時間を、丸潰まるつぶしに潰つぶしていた。ところが眼めが覚さめた。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝込ねこんだもんだから、汽車の留ったために、眠りが調子を失ってどこかへ飛んで行った

のである。自分は眠っていると、時間の経過だけは忘れているが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくっては駄目だ。ただし煩悶がなくなった時分には、また生き返りたくなるにきまつてるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違たがいちがいにするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽軽ひょうきんな冗談じやうだんを云ってるようだが、けっしてそんな浮いた了見りようけんじゃない。本氣に真面目まじめを話してるつもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじゃない。實際汽車が留って、不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿氣ばかげた感じだから滑稽こっけいのように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿氣た感じ

が起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可愛想かわいそうに思うのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目まじめに抱かねばならぬほど、その時の自分は情ない境遇なさけにおつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留っていた。汽車が留まったなど云う考えよりも、自分は汽車に乗っていたんだなど云う考えが第一に起つた。起つたと思うが早いか、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家うちを出奔しゅっぽんしたんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだがむらむらと塊かたまって、頭の底から一度に湧わいて来た。その速い事と云ったら、言語ごんごに絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある

人が、溺れ^{おぼ}かかったその刹那^{せつな}に、自分の過去の一生を、細大漏^{さいだい}らさずありありと、眼の前に見た事があると云う話をその後^{のち}聞いたが、自分のこの時の経験に因^よつて考えると、これはけっして嘘じやなかうと思う。要するにそのくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると同時に、急に厭^{いや}な心持になった。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云って、別に叙述しようもない心持だからただの厭でとめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなど、直勘^{すくかん}づくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けっして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二

三人這入^{はい}つて来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろきよろするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更^かえて窓へ首を出したり、欠伸^{あくび}をしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩^{くず}し始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覺していた。自覺すると共に、自分は普通の人間と違って、みんなが活動する時分でさえ、他^{ひと}に釣り込まれて気分が動いて来ないような仲間外^{はず}れだと考えた。袖^{そで}が触^すれ違って、膝^{ひざ}を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁^{ゆかり}も由緒もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持であつた。今までは、どうか、どうか、人並に調子を取つて来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽気になつて上^{あが}へ騰る。自分は急に陰

気になって下へ降る、とうてい交際はできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゅうと減って、臓腑が薄っ片な一枚の紙のように圧しつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまった。まことに申訳のない、御恥ずかしい心持ちをふらつかせて、凹んでいた。

ところへ長蔵さんが、立って来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」

と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上った。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通ってるうちは、呼ぶと返って来るからおかしなものだ。しかしこれがもう少し烈しくなると、なかなか思うように魂が身体に寄りついてくれない。その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛想を尽かされて、非

常な難義をした事がある。何にでも上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだのと思つて、安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時はこの心持が自分に取つてもっとも新しくて、しかもはなはだ苦い経験であつた。

長蔵さんのどてらの尻を嗅ぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿の通りへ出た。一本筋の通りだが存外広い、ばかりではない、心持の判然するほど真直である。自分はこの広い往還の真中に立つて遙か向うの宿外を見下した。その時一種妙な心持になつた。この心持ちも自分の生涯中にあつて新らしいものであるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人間らしい了簡になつて、宿の中へ顔を出したば

かりであるから、魂が吸く息につれて、やっと胎内に舞い戻っただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場ステーションから出ても、またこの宿の真中に立っても、云わば魂がいよいよながら、義理に働いてくれたようなもので、けっして本気の沙汰さたで、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかったくらい、鈍い意識にぶいの所有者であつた。そこで、ふらついている、氣の遠くなっている、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼まなこを開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間まに、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴したたるほどの山が、自分の眼を遮りさえぎながらも、邪魔にならぬ距離を有たもつ

て、どろんとしたわが眸ひとみを翠みどりの裡うちに吸寄せている。——そこで何んとかく今云ったような心持になっちまったのである。

第一には大道砥だいどうとのごとしと、成語にもなってるくらいで、平たい真直な道は蟠わだかまりのない爽さわやかなものである。もつと分り安く云うと、眼を迷まごつかせない。心配せずにこっちへ御出おいでと誘うようにでき上ってるから、少しも遠慮きがねや気兼ねきがねをする必要がない。ばかりじゃない。御出と云うから一本筋あとの後を喰くツついて行くと、どこまでも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくっては、窮屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上ったものと自分は堅く信じている。それから左右の家並いえなみを見ると、——これは瓦葺かわらぶきも藁葺わらぶきもあるんだが——瓦葺

だろうが、藁葺だろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだいしだいに屋根が低くなって、何百軒とある家が、一本の針金で勾配を纏められるために向うのはずれからこつちまで突き通されてるように、行儀よく、斜に一筋を引つ張つて、どこまでも進んでいる。そうして進めば進むほど、地面に近寄ってくる。自分の立っている左右の二階屋などは――宿屋のように覚えているが――見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒を透して見ると、指の股に這入ると思われるくらい低い。その途中に暖簾が風に動いていたり、腰障子に大きな蛤がかいてあったりして、多少の変化は無論あるけれども、軒並だけを遠くまで追つ掛けて行くと、一里が半秒で眼の中に飛び込んで来る。それほど明瞭である。

前に云った通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体ていたらくで、どこまでもとろんとしていた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこの明瞭な——
盲目めくらにさえ明瞭なこの景色けしきにばったりぶつかったのである。魂の方では驚かなくっちゃならない。また実際驚いた。驚いたには違いないが、今まであやふやに不精不精ふしようふしように徘徊はいかいしていた惰性を一変して屹きつとなるには、多少の時間がかかる。自分の前に云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たないさき、景色がいかに明瞭であるなど心づいたあと、——その際きわどい中間ちゆうかんに起った心持ちである。この景色はかように暢達のびのびして、かように明白で、今までの自分の情緒じようしよとは、まるで似つかない、景氣のいいものであったが、自身の魂がおやと思つて、本氣にこの外界げかいに對むかい出したが最後、いくら明かでも、いくら暢のん

びりしていても、全く実世界の事実となってしまう。実世界の事実となるといかな御光ごこうでもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覚するほど作用が鋭くなかったため——この真直な道、この真直な軒を、事実に等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼はつきりした快感をもつて、他界の幻影まぼろしに接したと同様の心持になったのである。自分は大きな往来の真中に立っている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通っている。歩いて行けばその外はずれまで行かれる。たしかにこの宿しゆくを通り抜ける事はできる。左右の家は触さわれば触る事が出来る。二階へ上のぼれば上る事

が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸ひとみのなかに受けながら立っていた。

自分は学者でないから、こう云う心持は何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないのでついこう長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事と笑われるかも知れないが仕方がない。その後これのちに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾かたむきかけている。初夏しよかの日永ひながの頃だから、日差ひざしから

判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそらく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ているくらいだから悪いとは云われない。自分は斜^{はす}かけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺^{なが}めた時、あれが西の方だと思った。東京を出て北へ北へと走ったつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなっていた。この町を真直に町の通つてるなりに、下^{くだ}ると、突き当りが山で、その山は方角から推^おすと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変わらず、北の方へ行くんだと思った。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さもけっして低くはない。色は真蒼^{まっさお}で、横から日の差す所だけが光るせいか、陰^{あお}の方は蒼い底が黒ずんで見えた。もっともこれは日の加減と云うよ

りも杉檜すぎひのきの多いためかも知れない。ともかくも蒨鬱こんもりとして、奥深い様子であつた。自分は傾かたむきかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なっているとしか思われなかつた。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなか麓ふもとへ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾かたむいて陰の方は蒼い山の上皮うわかわと、蒼い空の下層したがわとが、双方で本分を忘れて、好い加減に他ひとの領分おかを犯し合つてゐるんで、眺める自分の眼にも、山と空

の区劃くかくが判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕ゆうべ東京を出て、千住せんじゅの大橋まで来て、裕あわせの尻はしよを端折はしよったなり、松原へかかっても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗っても、空脛からすねのまままで押し通して来た。それでも暑いくらいであつた。ところがこの町へ這入はいってから何だか空脛では寒い気持がする。寒いと云うよりも淋しいんだろう。長蔵さんと黙って足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になつた。たびたび空腹になつた事ばかりを書くのはいかがわしい事で、か

つこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。実際自分は空腹になつた。家を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに気分がわるくつても、煩悶があつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくっちゃいけないと云い換えるのが適當かも知れない。品の悪い話だが、自分は長蔵さんと並んで往来の真中を歩きながら、左右に眼をくばつて、両側の飲食店を覗き込むようにして長い町を下つて行つた。ところがこの町には飲食店がだいぶんある。旅屋とか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入つてしかるべきや・たい・ち流の・が・あ・す・こ・に・も・こ・こ・に・も・見・え・る。しかし長蔵さんは毫も

支度^{したく}をしそうにない。最前の我多馬車^{がたばしや}の時のように「御前さん夕食^{ゆうめし}を食うかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配って何だか発見したいような気色^{けしき}がありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好^{かつこう}な所を見つけて、晩食^{ばんめし}をしたために自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下って行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひもじくは無かつた。胃の中にはまだ先刻^{さつき}の饅頭^{まんじゅう}が多少残つてゐるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や滅^めり込み^こみそうな精神が、真直^{まっすぐ}な往来の真中に抛^{ほう}り出されて、おやと眼を覺したら、山里の空氣がひやりと、夕日の間から皮膚^{おか}を冒して来たんで、心機一転の結果としてこ

ここに何か食って見たくなつたのである。したがって食わなければ食わないでも済む。長蔵さん何か食わしてくれませんかと云うほど苦しくもなかった。しかし何だか口が淋しいさびと見えて、しきりに縄暖簾なわのれんや、お煮にしめめや、御中食所が気にかかる。相手の長蔵さんがまた申し合せたように右左と覗のぞき込むので、こっちはますます食意地くいじが張ってくる。自分はこの長い町を通りながら、自分らに適當と思う程度の一膳いちぜんめし屋をついに九軒まで勘定した。数えて九軒目に至ったら、さしにも長い宿しゆくはとうとうおしまいになり掛けて、もう一町も行けば宿外れしゆくはずへ出抜ぬけそうである。はなはだ心細かった。時にふと右側を見ると、また酒めしと云う看板に逢着ほうちやくした。すると自分の心のうちにこれが最後だなど云う感じが起つた。それがためか煤すすけた軒の腰障子こししょうじに、肉太したたに認

めた酒めし、御肴と云う文字がもつとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めし・の字でも、御肴おんさかなの字でもありあり見える。この様子では、いくら耄もう碌ろくしてもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強ようの長蔵さんも今度こそ食いに這入はいるに違なかうと思った。ところが這入らない。その代りぴたりと留った。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うかがうと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が

長蔵さんがなぜ立ち留ってこの赤い人間を覗き込むのか、とんと自分には分らなかった。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留っていると、やがて障子の奥から赤毛布が飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、実際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣一枚だけしきや着ていないんだから、つまりしめて見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚でしの凌いでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりであつた。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側そばへつかつかやつて

行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕つかまつた時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆かられながら二人を見物してゐた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆しゅとさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然はんぜんと覺さとつた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どんな人に、幾人逢いくたりあおうとも、版行はんこうで押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考え

ると、よくこんな商売を厭あきもせず、長の歲月としつきやられたものだ。長蔵さんだって、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やっぱり何かの事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう思えば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほかの事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないだと意識して煩悶はんもんする気色けしきもなく、自分でなくっちゃ御前ごぜんさんをやり得る人間は天下広しといえども二人と有るまいと云うほどの平氣な顔で、やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵觀ちようぞうかんがあつたらだいぶ面白かつたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なっている最中だったから、なかなかそんな余裕は出て来なかった。この長蔵觀は当時の自分を他人と見倣みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序じよの節せつに浮かんだの

である。だからやッぱり紙の上だけで消えてなくなるんだろう。しかしその時その砌^{みぎ}りの長蔵観と比較して見るとだいぶ違つてるようだ。

自分は長蔵さんと赤毛^{あかげつと}布^{たちばなし}の立談を聞きながら、自分は長蔵さんから毫^{ごう}も人格を認められていなかったと云う事を見出した。——もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京^{しゅっぽん}を出奔して坑夫にまでなり下がるものが人格^{うんぬん}を云々するのは変挺^{へんてこ}な矛盾である。それは自分も承知している。現に今筆^とを執つて人格と書き出したら、何となく馬鹿^{ばか}氣^げでいて、思わず噴^ふき出しそうになつたくらいである。自分の過去を顧^{かえり}みて噴き出しそうになる今の身分を、昔^{くら}と比べて見ると実に結構の至りであるが、その時はなかなか噴き出すどころの騒ぎではなかつ

た。——長蔵さんは明かに自分の人格を認めていなかった。

と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴おんさかなの裏うちから飛び出した若い男を捕つかまえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もっと立ち入って云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘している。それを自分はなぜだか少々怪けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざっとこんな訳なんだろう。——

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家業かぎようだとは、常識を質に入れた当時の自分にももつとも思ひようがなかった。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不名誉だと心得ていた。自慢にやならないと覺さとっていた。だから坑夫の候補者が自分

ばかりと思のほか突然居酒屋の入口から赤毛布になって、あらわれようと別段神経を悩ますほどの大事件じゃないくらいは分りきつてゐる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般的な人間であると云う気になつちまう。取扱方の同様なのを延^ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してゐる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人^{ひと}が赤毛布を着て立つてゐるようには思われない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情^{なさけ}なく

なっちまった。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れているんだが、自分が赤毛布になって、君儲もうかるんだぜと説得ていさいされている体裁を、自分が傍わきへ立って見た日には方かたなしである。自分
ははたしてこんなものかと、少しく興を醒さまして赤毛布を、つらつら
観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をす
る。被かぶってる赤毛布ばかりじゃない、心底しんそこから、この若い男は自分と
同じ人間だった。そこで自分はつくづくつまらないと感じた。その
上もう一つつまらない事が重なったのは、長蔵さんが、にくにくしい
ほど公平で、自分の方が赤毛布あかげつとよりも坑夫に適していると云うところ
を少しも見せない。全く器械的にやっている。先口せんくちだから、もう少し

こつちを^{ひいき}贖^{ひいき}にしたら好かろうと思うくらいであつた。――これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切^{せつ}齒^ば詰つた時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有^もつていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。――しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覚して、大^{おお}につまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人^{ふたり}の談判は見る間に片^まづいてしまった。これは必ずしも長蔵さんがことほどさように上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がことほどさように馬鹿だったからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あなが

ち、自分に比較して輕蔑^{けいべつ}する気じゃけっしてない。自分の当時は、長蔵さんの話をはいい聞く点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。もし強^しいて違ふところを詮議^{せんぎ}したら赤毛布を被^{かぶ}つてゐると縋^{かすり}を着てゐるとの差違^{ちがひ}くらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく気の毒な人と云う意味で、馬鹿のうち^{ぐう}に少しぐらひは同情の意を寓^{ぐう}したつもりである。

で、馬鹿が二人長蔵さんに尾^ついていっしょに銅山まで引つ張られる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと気がついて見ると、さっきのつまらない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了見^{りようけん}ほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだな

と安心してゐると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後さる温泉場のちで退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得ふかとくなりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟おおげさな法螺ほらだろうが、不可得ふかとくと云うのは、こんな事を云うんじゃないやなかうかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念ねんと云うもので心こころじやないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙つていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかという、世間には大変利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食

わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱らせられる。そうして、そう云う呑気のんきな料簡りょうけんで、人を自由に取り扱うの、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでいるから驚いちまう。水だつて流れりや返つて来やしない。ぐずぐずしていりや蒸発しちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻さつきのつまらない考えが蒸発していたと云う事だけを記憶して置いて貰もらえばいい。——そうして吾われながら驚いたのは、どうも赤毛布あかげつとと並んで歩くのが愉快になつて来た。もつともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋いもの事を芋えもと訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではな

かった。その上顔が人並にできていなかった。この男に比べると角^{かく}張^ばった顎^{あご}の、厚唇^{あつくちびる}の長蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突つ走ったのみで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤い毛布^{けっと}が妙に臭い。それにもかかわらず自分はこの山里で、銅山行きの味方を得たような心持ちがして嬉^{うれ}しかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴^{みちづれ}があつて欲^{ほし}い。一人で零落^{おちぶ}れるのは二人で零落れるのよりも淋しいもんだ。そう明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好いてるところはなかったけれども、ただいっしょに零落れてくれると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつ

てしまった。これから推^おして考えると、川で死ぬ時は、きっと船頭の一人や二人を引き擦^ずり込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいない地獄よりも、必ず鬼のいる地獄を択^{えら}ぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻^{こっ}下^か感^{かん}に乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直^{まつすぐ}な往来を真直に突き当りの山まで見^み下^{おろ}したもんだからようやく正氣づいたのは前^{まえ}申した通りである。それが機縁になつて、今度は食^{くい}氣^けがついて、それから人格を認められていない事を認識して、はな

はだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく頽勢たいせいを挽回ばんかいしたと云うしだいになる。だに困よつてまた空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の一膳飯屋いちぜんめしやはもう通り越している。宿しゆくはすでに尽きかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願は叶かないそうもない。それに赤毛布は今食つたばかりの腹だから、勇ましくどンドン歩く。どうも、降参しちまつた。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さんに話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越しちゃ大変だ。これから左へ切れるんさ」

と云つたなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減ったんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束したように、そこん所とこに芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天佑である。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のように奇麗きれいじゃなかつた。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかは何を売つてゐんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に気を取られ過ぎたせいかと

も思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載^のせて、真黒な家^{うち}から、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食った」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺^{なが}めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くって、黒くって、瘠^やせていて、湿^{しめ}っぽそうで、それで所々皮が剥^はげて、剥げた中から緑^{ろくし}青^{よう}を吹いたような味^みが出ている。どれにぶつかって大^{だい}同小^{しょう}異である。そんなら一目^{いちもく}惨澹^{さんたん}たるこの芋の光景^{へきえき}に辟易^{へきえき}して、手を出さなかつ

たかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中いもちゅうの、とも云わるべきこの御薩おさつを快よく賞翫しょうがんする食欲は十分有ったように思う。しかし「さあ、食った」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損そくなった。これはおおかた「さあ、食った」の云い方が悪かったんだろう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎あごで芋を指さしながら、前へ出した手頸てくびを、食えと云う相図ふさがにちよつと動かした。よく考えて見ると、両手が芋で塞ふさってるんで、自分がかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、

口へ持って行く事ができないのであつた。じれたのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕で、変な曲線を描いて、右の手を芋まで持つて行こうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころろと往来の中へ落ちた。これはすぐさま赤毛布あかげつとが拾つた。拾つたと思つたら、

「この芋えもは好芋えええもだ。おれが貰おう」

と云つた。それでこの男は芋いもを芋えもと発音すると云う事が分つた。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本しめ締めて五本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懷なつかしげに食くいながら、いよいよ宿外しゆくははずれまで来るとまた一事件ひとじけん起つた。

宿しゆくの外はずれには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れている。自

分はもう町が尽きるんだなとは思いつつ、つい芋に心を奪われて、橋の上へ乗っかかるまでは川があるとも気がつかなかった。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出ている。川がある。水が流れている。――何だか馬鹿気た話だが、事実にもっとも近い叙述をやろうとすると、まあ、こう書くのが一番適切だろう、こう書いて置く。けっして小説家の弄ぶもてあそような法螺ほら七分の形容ではない。これが形容でないとするとその時の自分がいかに芋を旨うまがったのかがおのずから分明ぶんめいになる。さて水音に驚いて、欄干らんかんから下を見ると、音のするのはもっともで、川の中に大きな石がだいぶんある。そうしてその形状かっこうがいかにも不作法ぶさほうにでき上って、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝たり、突っ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。し

かもその水には勾配こうばいがついている。山から落ちた勢いをなし崩しくずに持ち越して、追っ懸けかられるように跳おどつて来る。だから川と云うようなものの、実は幅の広い瀑たきを月賦げつぷに引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変烈はげしい。鼻はなっ端ぱしの強い江戸ツ子のようにむやみやたらに突っかかって来る。そうして白い泡あわを噴ふいたり、青い飴あめのようになつたり、曲まつたり、くねつたりして下しもへ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだん暮れてくる。仰向あおむいて見たが、日向ひなたはどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうつと明るくなって、その明かるい空を背負しょつてる山だけが目立あつて蒼黒あおぐろくなつて来た。時は五月だけれども寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入日いりひを背中から浴びて、正面は陰になった山の

色と来たら、——ありや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫でも黒でも蒼でも構わないんだが、あの色の氣持を書こうとする^{むらさき}と駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どつと^お圧つ被さるんじやあるまいかと感じた。それで寒いんだろう。實際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方ことごとく、あの山のような氣味のわるい色になって、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界一色の内に^{いっしき}裏まれてしまふに違ないと云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日^{いりひ}の方^{かた}の局部の色として認めたから、局部から全体を^{そその}唆かされて、今にあの山の色が広がるんだなと、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじやあるまいかと云う

気を起したんだなと——自分は今机の前で解剖して見た。閑ひまがあるのと
とかく余計な事がしたくなつて困る。その時はただ寒いばかりであつ
た。傍そばにいる茨城県の毛布けつと うらやが羨ましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向むたつて突き当りが山で、左右が林だか
ら、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこう突然人家
が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄
らなかつたのである。——その淋さむしい山の方から、小僧が一人やつて
来た。年は十三四くらいで、冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいている。顔は始めのうち
はよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜け
てる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。
どこから、どうして現れたんだか分らない。木下こしたやみ闇の一本路が一二丁

先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隠したりするような仕掛しかけにできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いもを口へ宛あてがつたなり、顎あごを動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上つた小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいるのを、とんと苦にならない様子

で通り抜けようとする。すこぶる平気な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆おくした気色けしきもなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留とどまつた。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になつたものだ。なかなかえらいと感心していると、長蔵さんは、

「芋いもを食くわないかね」

と云いながら、食い残しを、気前よく、二本、小僧の鼻はなの前さきに出し

た。すると小僧はたちまち二本とも引ったくるように受け取って、あ
りがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手っ取
り早い行動を熟視した自分は、なるほど山から一人で下りてくるだけ
あつて自分とは少々訳が違うなど、また感心しちまった。それとも知
らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張った奴を、唾液も
交ぜずに、むやみに呑み下すので、咽喉が、ぐいぐいと鳴るように思
われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわ
らず、当人は、傍で見るほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい
食う。芋だから無論堅いもんじゃない。いくら鶉呑にしたって咽喉に
傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉がいつぱいに塞がつて、芋
が食道を通り越すまでは呼息の詰る恐れがある。それを小僧はいつこ

う苦しめない。今咽喉がぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。後の芋が、前の芋を追っ懸けてぐいぐい胃の腑に落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だったが、これがためたちまち見る間に無くなってしまった。そうして、小僧はついに何らの異状もなかった。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食ってしまうまで、一句も言葉を交わさなかった。自分は腹の中で少しはおかしいと思った。しかし何となく憐れだった。これは単に同情の念ばかりではない。自分が空腹になって、長蔵さんに芋をねだったのは、つい、今しがたで、餓じい記憶は気の毒なほど近くにあるのに、この小僧の食い方は、自分より二三層倍餓じそうに見えたからである。そこへ持って来て、長蔵さんが、

「旨^うまかつたか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食ったあとの小僧は無論何とか云うだろうと思っていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙って立っている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだった。それが分つてからはさほどにも思わなかったが、この時は何だ顔に似合わない無愛嬌^{ぶあいきよう}な奴^{やつ}だなと思つた。しかしその丸い顔を半分傾^{かたむ}けて、高い山の黒ずんで行く天辺^{てっぺん}を妙に眺^{なが}めた時は、また可愛^{かわい}想^{そう}になった。それからまた少し物騒^{ぶつさう}になった。なぜ物騒になったんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿^{しゆく}とが、何か深い因縁^{いんねん}で互に持ち合ってるのか

も知れない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらくこんな因縁に勿体^{もったい}をつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾^なったり、文章にぶつかったりするもんだ。自分はこの永年^{ながねん}方々を流浪^{るろう}してあるいて、折々こんな因縁に出っ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。――しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやっぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損^ばな^{そく}ったところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天辺^{てっぺん}を眺めていた。

すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想ふあいそうである。長蔵さんは平気なもので、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもんで、

「どこへも帰りやしねえ」

と云つてゐる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。この小僧は宿無やじなしに違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸の据すわった宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐あわ

れとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もっとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかったらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向って、

「じゃ、おいらといっしょにおいで。御金を儲け^{もう}さしてやるから」と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布^{あかげつと}と云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏^{まと}まってしまうには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなкаろう。しかしそう云う自分がこの赤毛布にもこの小

僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人であつたんだから妙な
もんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少からず驚くと共に、天下
には自分のように右へでも左へでも誘われしだい、好い加減に、ふわ
つきながら、流れて行くものがだいぶんあるんだと云う事に気がつい
た。東京にいるときは、目眩めまぐるしいほど人が動いていても、動きながら、
みんな根ねが生えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下
広しといえども、自分だけであろくらいで、千住から尻はしよを端折つて
歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、この宿しゆくで、はからず
も赤毛布あかげつとを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たない
うちにまたこの小僧を手に入れた。そうして二人とも自分よりは遙はるかに
根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろう

が、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちゃんとして生活していた。煩悶はんもんも坊ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶の極試きよくみたこの駆落かけおちも、やっぱり坊ちゃんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。生死しょうしの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼で見渡した世の中には、駆落をしたものは一人もない。――たまにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だから、食べたって身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったような

もので、はあ、はあ、と聞いてる分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もつとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたままで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさを悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横に飛び廻って、大いに苦しがつたりまた大いに悲しがつたりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、自分の不経験からして、さほど大袈裟に考えないでも済む事を、さも仰山に買い被って、独りでどぎまぎしていた事実を指すのである。しかるにこのどぎまぎ

が赤毛布に逢い、小僧に逢つて、ふたり兩人の平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄らいだのは、やっぱり経験の賜である。たまもの白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かつたようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、たわいもなく攻め落された事実をそうごう綜合して考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、満更待ち草臥まんざら くだびれの骨折損になる訳でもなかった。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやありませんかと二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折で夜逃をした自分くらいに思っていた。したがって長蔵さんのような気楽な商売は日本にたつた一人あればたくさんで、しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻りめぐ

合せると云う運勢をもつて生れて来なくっちゃ、とても商売にならな
いはずだ。だから大川端^{おおかわばた}で眼の下三尺の鯉^{こい}を釣るよりもよつぽどの根
気仕事だと、始めから腰を据^すえてかかるのが当然なんだが、長蔵さん
はほとんどそんな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間
もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わる
びれずに往来の男を捉^{つか}まえる。するとその捉まえられた男が、不思議
な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつ
とも普通の商売じゃあるまいかと疑念を起すように成功する。これほ
ど成功する商売なら、日本に一人じゃとても間に合わない、幾人^{いくたり}あつ
ても差支^{さしつかえ}ないと云う気になる。——当人は無論そう思ってるんだろ
う。自分もそう思った。

この呑気のんきな長蔵さんと、さらに呑気な小僧に赤毛布あかげつとと、それから見み様見真似ようみまねで、大いに呑気になりかけた自分と、都合四人で橋向うの小こみ路ちを左へ切れた。これから川に沿って登りになるんだから、気をつけるが好いと云う注意を受けた。自分は今芋いもを食ったばかりだから、もう空腹じゃない。足は昨夕ゆうべから歩き続けで草臥くたびれてはいるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布あけとの後つを跟けて行つた。路みちがあまり広くないので四人は一行よつたり いちぎように並べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足後おくれて、自分と摺々すれすれくらいになつて食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのと、口を利きくのが厭いやになつた。長蔵さんも橋を渡ってから以後とんと御前さんを使わなく

なつた。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかったが、どう云うものかここに至つてますます無口となつちまつた。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿はいている冷飯草履ひやめしぞうりがぴちゃぴちゃ鳴るばかりである。

こう、みんな黙つてしまうと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋さびしい。夜と云つたつて、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけではどうか、こうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいか、少しずつ光つて見える。もつともきらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然はつきりと白くなっている。そうしてその声がさあさあと絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細い道が少しずつ、上りになるような気持がしだした。上り
だけならこのくらいな事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹
する。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引つ
込んだりするんだろう。この凸凹に下駄を突っ掛ける。烈しいときは
内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になって来た。長蔵さんと
赤毛布は山路に馴れていると見えて、よくも見えない木下闇を、すた
すた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小
僧は実際物騒である。冷飯草履をぴしゃぴしゃ云わして、暗い凸凹を
平気に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほども
思わないんだが、この際だから、薄暗い中でぴしゃりぴしゃりと草履
の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠といっしょに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸が切れる。凸凹はますます烈しくなる。耳があんと鳴って来た。これが駆落でなくって、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺の仕損いから起った自滅の第一着なんだから、苦しくっても、辛くっても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よいいたって、こだわるだけの勇氣はない。その上先方は相手になってくれないほど平気である。すたすた歩いて行く。口さえ利かない。まるで取附端がない。やむを得ず呼吸を切らして、耳をがぁんと鳴らして、黙って後から神妙に尾いて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟ったのはこの時が始めてである。もっともこれが

悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉢山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬に云うが、たとえ涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙いっさいを出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になった長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は気の毒だったと云ってくれるかも知れない。増長したにしても気の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人

間はこうできてるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶる^{ふる}悸えていろつたつて出来ない相談である。病気で熱の出た時、牛肉を食わなかったから、もう生涯^{しょうがい}ロースの鍋^{なべ}へ箸^{はし}を着けちゃならんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉^{のどもと}元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪^けしからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘^{うそ}である。こう云うと詭弁^{きべん}のように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直^{しょうじき}正銘^{しょうめい}のところを云うのである。いったい人間は、自分を四角張った不変^{ふへん}体のように思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押^{ひらおし}に他人^{ひと}を圧^おしつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟^{りくつ}も立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢^あわせて嬉^{うれ}しがってる

のは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向うがわるいように噪ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪くって、困るもんだ。自分もあの時駆落をしず、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動いているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変っちゃ大変だ、罪悪だなどよくよ思つて、年を取つたら——ただ学問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに

至らなかつたら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見参げんざんしなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流転るてんと、あらゆる漂泊ひようはくと、困憊こんばいと、懊惱おうのうと、得喪とくそうと、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもつとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら——ありがたい事に自分は、この至大なる賚たまものを有っている、——すべてこれらがなかつたならば、自分はこんな思い切った事を云やしない。いくら思い切った事を云つたつて自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神妙しんびようなものが、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙にならんとは限らない。——抜けそうな足を棒のように立てて聞くと、がんと鳴ってる耳の中へ、遠くからさあ

さあ水音が這入^{はい}ってくる。自分はますます神妙になつた。

この状態でだいぶ来た。何里だか見当^{けんとう}のつかないほど来た。夜道^{でこぼこ}だから平生^{へいぜい}よりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹^{でこぼこ}の登りを膨^{ふくら}つ脛^{びき}が腫^はれて、膝頭^{ひざがしら}の骨と骨が擦^すれ合つて、股^{もも}が地面^{じびた}へ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのつて——それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵さんの尻^{しり}を五六間と離れずに、やつて来た。これはただ神妙に自己を没却^{あきらめて}した諦^{あきら}の体^{てい}たらくから生じた結果ではない。五六間以上後^{おく}れると、長蔵さんが、振り返つて五六歩ずつは待合してくるから、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずだらだら、ちびちびに自己を奮^{ふん}興^{こう}させた成行^{なりゆき}に過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後^{うしろ}が見えた

もんだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突っ切つて、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおむいた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御題目おだいもくのように見詰めて覷ねらいをつけて来たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだらう。信心の功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ちがない。自分はこう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至っては、どのくらいあとから自分が跟ついてく

るか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留^とまつてくれる。留まつてくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだった。とうてい素人^{しろうと}にやできない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだと、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。まるで人形のように活動する男であつた。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遙^{はるか}に取り扱いやすかつたに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後^{あと}になるんだらうと思つて、草臥^{くたび}れたら励ましてやる

うくらしいの了簡りようけんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをぴしやりぴしやりと鳴らしながら凸凹路でこぼこを飛び跳ねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かなわないと覚悟をしたのは、よつぽど前の事である。それでもしばらくの間はぴしやりぴしやりが自分の袖そでと擦れ擦れくらいになつて、登つて来たが、今じゃもう自分の近所には影さえなくなつた。並んで歩くうちは、あまり小僧の癖かっばつに活澁かつぱつにあるくんで——活澁だけならいいが、活澁の上に非常に沈黙しんもくなんで——、随分物騒な心持ちだつた。もし笑うなら、極めて小さくつて、非常に活澁で、そうして口を利きかない動物を想像して見ると分る。滅多めったにありやしない。こんな動物といつしよに夜山越やまごえをしたとすると、誰だつて物騒な気持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつ

き蝙蝠こうもりのようだと云ったが、全く蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたった二人限ふたりぎりだったら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋さむしい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異いな感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、お・お・いと人を呼ぶ奴は気味がよくない。山路で、黒闇くらやみで、人っ子一人通らなくつて、御負おまけに蝙蝠なんぞと道伴みちづれになつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さんが事ありげに声を揚げあたんである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじ

き場所でお・お・いと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分と呼んだんなら、何か起ったなとびくんとするだけで済むんだが、五六間後から行く自分の注意を惹くためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違う。こつちを向いた声じゃない。お・お・いと右左りに当ったが、立ち木に遮られて、細い道を向うの方へ遠く逃げのびて、遥の先でお・お・いと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちゃいなかった。自分はこ

の声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よつぽど蝙蝠に崇^{たた}られていたに違ない。この崇は翌朝^{あした}になつて太陽が出たらすすかり消えてしまつて、自分で自分を何^{なん}て馬鹿だろうと思つたくらいだが、実際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈^{はげ}しく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがないもんだから、人魂^{ひとたま}の尻尾^{しっぽ}のように、幽^{かす}かに消えて、その反動か、有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、——何とも返事がない。この反響が心細く継続^{つなが}りながら消えて行く間、消えてから、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇^{くらやみ}に鼻

を突き合せて黙って立っていた。あんまり好い心持じゃなかった。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云った。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意気な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合っちまつた。定めし変な顔をして受合っただろうが、受合ったら急げても、急げないでもむちゃくちゃに急いでした。この間はどこをどんな具合に通ったか、まあ断然知らないと言った方が穏当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留ったんで、ふと気がついた。すると一つ家の前へ出ている。ランプが点^ついている。ランプの灯^ひが往来へ映っている。

はつと嬉しかった。赤毛布あかげつとがありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでゐる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけなかったし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやつて来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入はいつて来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだをつくづく感心した。ランプがこんなにありがたかつた事は今日こんにちまでまだかつてない。後あとから聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛がけをして、そこで自分達を待つてたんだそうだ。お・お・いと云う声も小・僧・や・あ・と云う声も聞えたんだが返事をし

なかつたと云う話した。偉い奴だ。

同勢どうぜいはこれでようやく揃そろったが、この先どうなる事だろうと思ひながら、相変らず神妙しんびょうにしていると、長蔵さんは自分達を路傍みちばたに置きつ放しにして、一人で家うちの中へ這入つて行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じゃもつたない。牛さえいれば牛小屋で馬さえ嘶なけば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかは何にもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉たててある。残る半分は夜つびて明けて置くんじやないかしら。ことによると、敷居みぞの溝に食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁わらふき葺で、その藁が古くなって、雨に腐ふやけたせい、崩くずれかかつて漠然ばくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分

らないほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入って行った。なんだか穴の中へでも潜り込んで行ったような心持だった。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜に差ししてくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫なものである。この男はたとい地震がゆって、梁が落ちて来ても、親の死目に逢うか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違ない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こつちを向いて立った股倉から、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間にか低くなつたと見え

る。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊^{とま}つて行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神妙^{しんびよう}が急に破裂して、身体^{からだ}がぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明^{あか}す事が、それほどの慰藉^{いしや}を自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、とんと気がつかなくなつた。やはり神妙の結果泊る所が見つかつても、泊る気が起らなかったんだらう。こうなると人間ほど御^{ぎよ}しやすいものはない。無理でも何でもはいはい畏^{かしこ}まって聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大に嬉^{おおい}しがる。当時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なま^{ともな}たもつとも励精な人間であつたなと云う自信が伴^{ともな}ってくる。兵隊はあ

あでなくっちゃいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと云う事も悟った。——こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくって解らない。実を云うと、もつとずっとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにもむずかしくなっちゃった。例^{たと}えば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見^み做^なす事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲むものだとかえ気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種の境界^{きょうがい}に馴^ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺^{まひ}させた結果としてでき上るものだから、図に乗ってきゅきゅ押して行

くと、人間がみんな馬鹿になっちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日まで生きていたならば、いかに順良だつて、いかに励精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるからは、たまには怒るおこがいい。反抗するがいい。怒るように、反抗するようにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗させないように、御膳立おぜんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云つて

いたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のよ
うな身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、七日七晩引^{なぬかななばん}つ張りつ
づけに引つ張つたつてちよつとも動きやしない。今の自分にはこの方
が自然だからである。そうしてこゝろ変るのが人間たるところだと思つ
てる。分りやすいように長蔵さんを引合^{ひきあい}に出したが、よく調べて見る
と、人間の性格は一時間ごとに変つてゐる。変るのが当然で、変るう
ちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多い
と云ふ意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつて
も同じ事に帰着する。嘘^{うそ}だと思ふなら、試験して見るがいい。他人^{ひと}を
試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身^{わがみ}で吾身を試験して見るが
いい。坑夫にまで零落^{おちぶ}れないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見

たつて、以上分わツかりこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては済まない。こんな景氣のいいタンタン力を切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うとこう云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦にがい顔をして謝罪あやまっていた。自分ながら、どうも困ったものだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくっちゃ信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して

見た。ところがやつぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減って飯が食いたくなつて、御腹が張ると眠くなつて、窮きゆうして濫らんして、達おこなして道を行つて、惚ほれていっそよになつて、愛想あいそが尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変の沙汰さたである。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の気焰きえんをやめて、再びもとの神妙しんびような態度に復し

て、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立って、往来を向きながら、ここへ泊って行こうと云い出した時、こんな破屋あばらやでも泊る事が出来るんだったと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元来泊るがんらいために建ててあるんだなと、ようやく気がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それでいて身体は蒟蒻からだのように疲れ切つてる。平生いつもなら泊りたい、泊りたいですべての内臓が張切れはちきそうになるはずなのに、没自我ぼつじがの坑夫行こうふゆき、すなわち自滅の前座としての墮落と諦めあきらをつけた上の疲労だから、いくら身体に泊る必要があっても、身体の方から魂へ宛てて宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下ったんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがったか

ら、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、實際この時の心の状態は、こう譬^{たとえ}を借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛^{ゆる}んで、立ち切れない足を引き摺^{ひず}って、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布^{あかげつと}はのそのそ這^{はい}入ってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履^{ぞうり}の尻^{しか}が勢よく踵^{かかと}へあたるんで、ぴしゃぴしゃ云う音が飛ぶように思われた。

這入って見るとふんと臭^{にお}った。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着^{むとんじゃく}であつた。土間から上へあがる段になつ

て、雑巾ぞうきんでもと思ったが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がっちゃった。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺ながめていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がっている。自分は尻だけおろして、障子しょうじ——障子は二枚あった——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立ててあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間まから茶と煙草盆たばこぼんを

持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶる尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大變な誤解をしていたんだねと呆れ返るものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そうして長蔵さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入った時に、残らず聞いてしまったんだろう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑氣屋を銅山へ連れて行くんで、自然

その往き還りにはこの主人の厄介やっかいになりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠いねむりを始めた。いつから始めたか知らない。馬を売損うりそこなつて、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしなくなつて、自然じねんと長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、破屋あばらやまでも消えた時、こくりと眠ねむりが覚さめた。気がつくと頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡もちやげるとはなはだ重い。主人はやっぱり馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてゐるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打遣うちちやつて置くと、忽然こつぜんぱつと眼があいた。薄暗い部屋うちの中に、影のような長蔵さんと亭主が膝ひざを突き合せて

いる。ちようど、借^{かり}がどうかしてハハハハと亭主が笑ったところ
だった。この亭主は額^{ひたい}が長くって、斜^{はす}に頭^{てっぺん}の天辺^{ひっこ}まで引込んでるか
ら、横から見ると切通^{きりとお}しの坂^{さか}くらいな勾配^{こうばい}がある。そうして上になれ
ばなるほど毛^はが生^はえている。その毛^ごは五分^{ごぶ}くらいなのと一寸^{いっすん}くらいな
の^{まじ}が交^{まじ}って、不規則^{まばら}にしかも疎^{まばら}にもじゃもじゃしている。自分^{いね}が居^い
眠^ぶりからはつと驚^{おどろ}いて、急に眼^めを開けると、第一にこの頭^{ひとみ}が眸^{ひとみ}の底^{そこ}に
映^{うつ}った。ランプが煤^{すす}だらけで暗いものだから、この頭^{めいりよう}も煤^{すす}だらけに
な^なって映^{うつ}って来^きた。その癖^{もつろう}距離^{きょり}は近い。だから映^{うつ}った影^{かげ}は明瞭^{めいりよう}であ
る。自分^{いね}はこの明瞭^{めいりよう}でかつ朦朧^{もうろう}なる亭主^{ていしゅ}の頭^{かぶ}を居眠^{いね}りの不知覺^{しじやく}から我^{われ}
に返^{かえ}る咄^{とつさ}嗟^さにふと見た^みたのである。この時はあまり好^{この}い心持^{しんぢ}ではなかつ
た。それがため、居眠^{いね}りもしばらく見合^{みあ}せるような気^きにな^なって、部屋^{へや}

中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布けつとの下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開あいて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯ひがあたるから、よく見ていると、藁わら葺ふきの裏側が震ふるえるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛いっそくとびに正気へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼あだけ開けても氣は判然はつきりしない。ぼんやりと世界に歸つて、またぞろすぐと不覺おちいに陥おちいつちまう。それから例のごとく首が落ちる。微かすかに生きてるような氣になる。

かと思うとまた一切空に這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつたのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覚めた時は、もう居眠りはしていなかつた。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなつていた。そうして涎を垂れている。

——自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金話を聞いて、また居眠りの続を復習しているうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰を聞かなかつたんだから、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返つてるのを見るや否や、眼をあいて涎を垂れて、横になつたまま、じつとしていた。自覚があつて死んでたらこんなだろう。生きてるけれども動く

気にならなかった。昨夜ゆうべの事は一から十までよく覚えている。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくって、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然せつぜんと区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が当あてにならなくなる。要するに人世は夢のようなもんだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、ううんと伸のびをして、寝たまま握り拳を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦こすつて、腕のありたけ出たところで、勢せいがゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、

今度は右の手を下へさげて、凹くぼんだ頬ほつぺたをぼりぼり搔かき出した。起きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やつぱり眼が覚めていないと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太ねだが抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあって、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘ひじの高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたって際限がないから、起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布あかげつとばかりである。これはまた呑気のんきなもんで、依然として毛布けつとから大きな足を出してぐうぐう鼾いびき声こゑをかいて寝ている。それを長蔵さん

が起す。――

「御前さん。^{おまえ}おい御前さん。もう起きないと御午ま^{おひる}までに銅山^{やま}へ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺^ゆり始めたんで、やむを得ず、毛布^{けつと}の方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端^{はんぱ}に立ち上った。これでみんな起きたようなものの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか迷っていると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云つて、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうなると自分も何とか片をつけなくっちゃならないから、一番あとから下駄を突掛^{つつか}けて、長蔵さんと赤毛布^{あかげつと}が草鞋^{わらし}の紐^{ひも}を結ぶのを、不景気な懷手^{ふところ}をして待っていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯^{あさめし}を食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅沢^{ぜいたく}の沙汰^{さた}のように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の結果、必要とまで見做^{みな}されているものが、急に余計な事になつちまうのはおかしいようだが、その後^{のち}この顛倒事件^{てんとうじけん}を布衍^{ふえん}して考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやつてる事が当然になつて、一人だけでやる事

が余計のように思われるんだから、当然になろうと思つたら味方を大勢拵こしらえて、さも当然であるかの容子ようすで不当な事をやるに限る。やつては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布でさえ自分にはこれほどの変化を来たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだろうね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいような根性が幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期に反した起きたなり飯抜きしゅったつの出立に、自然不平の色が出ていたためだろう。それではなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問を呈出しなかつたんで分る。今考えると、ちよつと兩人ふたりにも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無しか、または準宿無しでなくつちやならない。目が醒さめて、夜が明けてるのに、汁の煙けむも、漬物の香におも、いっこう連想に乗つて来ないから

は、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養くようをする呑氣屋のんきやで、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸さいわいな人間である。自分は十九年来始めて、こう云う人間と一つ所ところに泊って、これからまたいっしょに歩き出すんだなと思った。赤毛布と小僧の顔色を伺って見ると少しも朝飯を預期している様子がないんで、双方共朝飯を食い慣なけていない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺ずり落ちていたと云う事が分った。しかし分ったと云うばかりで別に悲しくもなかった。涙は無論出なかった。ただ長蔵さんが、この朝飯の経験に乏とぼしい人間に向って、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかったのを、今では残念に思ってる。

食った事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨励しょうれいされて「食いたい」と答えるか。――つまらん事だがどっちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立って、ちよつと後ろうしを振り返ったが、

「熊さんくま、じゃ行ってくる。いろいろ御世話様」

と軽く力足ちからあしを二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寝ている。覗のぞいて見ると、昨夕ゆうべうつつに気味をわるくした、もじやもじやの頭が布団ふとんの下から出ている。この亭主は敷蒲団しきふとんを上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじやもじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうして熊さんの顔が出た。この顔

は昨夜見たほど妙でもなかった。しかし額がさかに瘡こけて、脳天まで長くなってる事は、今朝でも争われない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構おかまい申さなかった」

と云った。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけている。

「寒かなかったかね」

とも云った。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後うしろから、熊さんが欠伸あくびまじ交りに、

「じゃ、また歸りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足後おくれて、小僧と赤毛布あかげつとの尻を追かつ懸かけて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中には慣なれ切ったものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午ひるまでには銅山やまへ着きかなくっちゃならな
いから急ぐんだそうだ。なぜ午ひるまでに着きかなくっちゃならないんだ
か、訳が分らないが、聞いて見る勇気がなかったから、黙もくって食くつ
て行いった。するとなるほど登のぼりになつて来た。昨夕あれほど登のぼつたつ
もりだのに、まだ登るんだから嘘うそのようでもあるが実際見渡して見る
と四方しほうは山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があ
るんだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這はい入る訳になる。この模様では銅山どうざん
のある所は、定めし淋しいだろう。呼息いきを急せいて登りながらも心細

かつた。ここまで来る以上は、都へ帰るのは大変だと思つと、何の酔すいき興ようで来たんだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出奔しゅつぽんしたんだから、おいそれと帰りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目に懸かからないように、朽果くちはててしまふのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼吸を継つぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すごいほど木を被かぶつている上に、雲がかかつて見る間まに、遠くなつてしまふ。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適當かも知れない。薄くなつた揚句あげくは、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見えなくなる。そうかと思つと、雲の方で山の鼻面はなづらを通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲まき返しているうちに、

薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなって、木の色が明かになる頃は先刻さつきの雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当けんとうがつかなくなる。立ちながら眺めると、木も山も谷もめぢやめぢやになつて浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届く辺あたりまで落ちかかった。長蔵さんは、

「こりゃ、雨だね」

と、歩きながら独言ひとりごとを云った。誰も答えたものはない。四人とも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲まかれるような、また埋めうずめられるような有様で登って行つた。自分にはこの雲が非常に嬉しかった。この

雲のお蔭で自分は世の中から隠したい身体を十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせずにその中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉じ籠められたような窮屈も覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬られると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌が日にも、また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾が身で吾が身が保証出来ないような、また吾が身が吾が身でないような氣持がす

る。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまったり、隔て^{へだ}られたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布^{けつと}が赤くなったり白くなったりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなったり薄くなったりする。そうして誰も口を利^きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後^{あと}になり先になり、殖^{ふえ}もせず減^{へり}もせず、四つのまま、引かれて合うように、弾^{はじ}かれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になつたんだから、世の中は自分共にたつた四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿無^{やどなし}である。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷つて歩く連中である。この連中と道伴^{みちづれ}になつて登り一里、降り二里を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になつた。時計がないんで何時^{なんじ}だか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過^{ひるすぎ}とも云われるし、また夕方と云つても差支^{さしつかえ}ない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微^{かす}かに見える山の色であつた。その色が今までのとは打つて變つてゐる。いつの間にか木が抜けて、空坊主^{からぼうず}になつたり、ところ斑^{まだら}の禿頭^{たま}と化けちまつたんで、丹砂^{たんしゃ}のように赤く見える。今までの雲で自分

と世間を一筆に抹殺して、ここまでふらつきながら、手足だけを急が
して来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分は
はっと雲から醒めた気分になった。色彩の刺激が、自分にこう強く応
えようとは思いがけなかった。——実を云うと自分は色盲じゃないか
と思うくらい、色には無頓着な性質である。——そこでこの赤い山
が、比較的烈しく自分の視神経を冒すと同時に、自分はいよいよ銅山
に近づいたなと思った。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたと云
えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅を連想したんだろう。とにか
く、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云う
のは大概このくらいなものだと思うが——いわゆる直覺的に事実を感
得した時に、長蔵さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言いたいような事を云った。それから十五分ほどしたら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすって視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇いとまもないうちに通り越しちまった。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立って、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくつ

「ちゃ、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちつとも分らなかったから、黙って橋の上へ立って、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家が見える。^{うち}やっぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古ぼけて禿^はげてるの山ばかりだった。何だかまた現実世界に引き摺^ひり込ま^ずれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙って橋の向^{むこう}を覗^{のぞ}き込んでるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭めいりょうに答えたが、内心あまり好くはなかった。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念けねんがある様子であつた。赤毛布あかげつとと小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭からこの両人ふたりは過去の因果いんがで、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色けしきがありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危あぶないかと睨にらまれていたのかも知れない。好い面つらの皮だ。

それから四人揃そろつて、橋を渡つて行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中うちで一番いかめしい奴やつを指さして、あれが所長の家だうちと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシ・キだよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシ・キと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつぽど聞き返そうかと思つたが、大方これがシ・キなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシ・キと云う言葉を明瞭に理解しなければならぬ身分になつたが、やつぱり始めにぼんやり考へていた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れていよいよシ・キの方へ這入る事になつた。鉄軌についてだんだん上つて行くと、そここに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間^{ふたま}で、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定である

から、自分のような一人ものは這入りたくたつて這入れないんだつた。こう云う小屋の間を縫つて、飽きず^あに上^{のぼ}つて行くと、今度は石崖^{いしがけ}の下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下^{がけした}にあるんだから位地にも変りはないが、向^{むき}だけは各々違^{めいめい}つてる。山坂を利用して、けなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢^{ぜいたく}は言つていられない。やつとの思いで、ならした地面へ否応^{いやおう}なしに、方角のお構^{かまい}なく建ててしまったんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてゐる。あの長屋の右を歩いてゐるなと思うと、いつの間^まにかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに

待っていると、急に路が外^それて遠くへ持ってかれてしまう。まるで見^{けん}当^{とう}がつかない。その上この細長い家から顔が出ている。家から顔が出ているのが珍しい事もないんだが、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がまた、尋常でない。青くって、黒くって、しかも茶色で、とうてい都会にいては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りながら、始めてこの顔を見た時は、シ・キ・と云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシ・キ・だなと感じた。しかしいくらシ・キ・でも、こう云う顔はたくさんあるまいと思って、登って行くと、長屋を通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しまいにはシ・キ・とは恐ろしい所だと思ふまで、いやな顔をたくさん

ん見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出て
る顔はきつと自分らを見ていた。一種^{どうあく}癡惡な眼つきで見ていた。——
とうとう午後の一時に飯場^{はんば}へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚^たき出しをするから、そう云う名
をつけたものかも知れない。自分はその後飯場^ごの意味をある坑夫に尋
ねて、篋^{べらぼう}棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云ってるんでえ、とひどく剣^{けん}
突^{つく}を食^{くら}った事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シ・キでも飯
場でもジ・ヤ・ン・ボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用している
んだから、滅^{めった}多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く
閑^{ひま}もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となってるんだから至^{しこ}
極^く簡単でかつ全く實際的なものである。

そう云う訳で飯場の意味は今もって分らないが、とにかく崖の下に散在している長屋を指すものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ひとりぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布あかげつとと小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯めしを食うようになったんだなと後あとから気がついた。二人の消息はその後いつこう聞かなかった。銅山やまのなかでもついぞ顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布けつとと、夕方の山から降くだって来た小僧と落ち合つて、夏の夜よを後になり先に

なつて、崩れ^{くず}そうな藁^{わら}屋根^{やね}の下でいつしよに寝た明日^{あくるひ}は、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏^{まと}まりそうで、纏^{まと}らない、云わばでき損^{そこな}いの小説めいた事がだ**い**ぶある。長い年月を隔^{へだ}てて振り返つて見ると、かえつてこのだらしくなく尾^{そつぎ}を蒼穹^{きゆう}の奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返つて思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懷^{おもむき}の趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧^{あいまい}な点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがつて十分に発展して来て因果^{いんが}の予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密^{うち}の中に流れ込んでただ途中だけが眼の前

に浮んでくる一夜半日の画えの方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくって好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんかみもそうである。もつと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のましるまに記すだけである。小説のように拵こしらえたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいっしょであった。ここで長蔵さんがいよい

よ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極きわめて簡単なものであった。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使ってくれと云ったばかりである。自分の姓名しめづしやうぢも出生地も身元も閱歴も何にも話さなかった。もちろん話したくったって、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手っ取り早く片づける了簡りようけんとは思わなかった。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だって、それ相応の手続がなくっちゃ採用されないもんだとばかり思っていた。大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺おすんだろう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭はんばがしらは——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかった。

眉毛まゆげの太くつて蒼髯あおひげの痕あとの濃い逞たくましい四十恰好がっこうの男だった。――その男が長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作むぞうさに云つちまった。ちやうど炭屋が土釜どがまを台所へ担かつぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々山越はるばるやまごえをして坑夫こうふになりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹うちの中でこの飯場頭いっばんじかんを恨うらんだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直すぐに分る。

飯場頭と云うのは一ひとつの飯場を預かる坑夫りようけんの隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡りょうかんしだいでどうでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間いっぶんじかんに談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云ったなり、赤毛布あかげつとと小僧を連れて出て行つた。また帰ってくる事と思つたが、その後ごいっとう影も形も見せないんで、全く、置去おきざりにされたと云う事が分つた。考えるとひどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなる通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしてもぽん引ぽんひの手数料はいつ何時なんどきどこで取つたものか、これは今もって分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らしい心持がないんで、大いに悄然しやうぜんとしていると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが変っている。人を炭

俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩
であ出逢う、万事を心得た苦勞人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

はんばがかり

飯場掛の言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなつた。さ
んざつばらお前さんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて、もうとうて
い御前さん以上には浮ばれないものと覺悟をしていた矢先に、突然あ
なたの昔に歸つたから、思いがけない所で自己を認められた嬉しさ
と、なつかしさと、それから過去の記憶——自分はずい一昨日おとといまでは
立派にあなたで通つて来た——それやこれやが寄つて、たかつて胸の
中へ込み上げて来た上に、相手の調子がいかに鄭寧ていねいで親切だから——
——つい泣きたくなつた。自分はその後ごいろいろな目に逢あつて、幾度と

なく泣きたくなつた事はあるが、擦れ枯しの今日こんにちから見れば、大抵は泣くに当らない事が多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口くち惜おしい、心細い涙は経験で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他ひとから認識された時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前てまえ勘の強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になつてると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛りの言葉を行はんばがばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかつた。悄然しょうぜんとはしていたが、気は張つてい

る。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思うように口が利^きけないから、黙って向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云った。――

「……まあどうして、こんな所へ御出^{おいで}なすったんだか、今の男が連れて来るくらいだから大概私^{わたし}にも様子は知れてはいるが――どうです、もう一遍考えて見ちゃあ。きっと取^とツ附^{つけ}坑夫になれて、金がうんと儲^{もう}かるてえような旨^{うま}い話でもしたんでしょう。それがさ、實際やって見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に出来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたって勤まりっこありませんよ。……」

はんばがしら

飯場頭はここまで来て、じっと自分の顔を見た。何とか云わなくっちゃやならない。幸いこの時はもう泣きたいところを通り越して、口が利けるようになっていた。そこで自分はこう云った。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲しくないです。何も儲けるためにやって来た訳じゃないんですから、――そりゃ知ってるです、僕だって知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶している。はなはだ穏かならぬ生意気な、ものの云いようだった。若いうちは、たった今まで悄気しよげていても、相手しだいですぐつけ上っちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長蔵さんは、一種の周

旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹きほらふであると云う真相をよく自覺していると云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志願などと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合とくわぬ篤実とくじつな男で、かつ自分の不経験を氣の毒に思ふのあまり、この生意氣を生意氣と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚くにつれて、僕は知しつてるですを思ひ出しては独ひとり赧あかい顔をしてい

た。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もって自分は好い名だと思ってる。

原さんは別に厭いやな顔つきもせず、黙って自分の言訳を聞いていたが、やがて頭あたまを振り出した。その頭は大きな五分刈ごぶがりで額の所が面摺めんずれのように抜き上がっている。

「そりや物数奇ものずきと云うもんでさあ。せつかく来たからは非やるったつて、何も家うちを出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時いちじの出来心なんだからね。やって見りや、すぐ厭になっちまうな眼に見えてるんだから、廃よすが好ようがしよう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したもののあ、有りやしませんぜ。え？ そりや来る。幾人いくたりも来る。来る事は来るが、みんな驚いて逃げ出しちま

いまさあ。全く普通のものなみの出来る業わざじゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくったって、口過くちすぎだけなら骨は折れませんかやあ」

原さんはここに至って、胡坐あぐらを崩くずして尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しそうな按排あんばいである。大いに困った。困った結果、坑夫と云う事から気を離して、自分だけを検査して見ると、――何だか急に寒くなった。裕あわせはさっきの雨で濡ぬれている。洋袴ズボン下は穿はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の気候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは気が張っていたから、好かった。しかし飯場はんばへ来て休息した上に、坑夫になる見込がほとんど切れたとなると、情なさけないの

が寒いのと合併して急に顫え出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪えんほど醜いもんだつたろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置去おきざりにして、挨拶あいさつもしずに出て行った長蔵さんが恋しくなつた。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓口がまぐちを長蔵さんに取りられてから、懷ふと中には一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減つて山の中で行ゆきだ倒おれになるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢あえない事もないだろう。逢つてこれこれだと泣きついたら、今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してく

れまいものでもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑^{ひま}な事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好^{すき}な原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなった長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理^{わけ}由だろう。こんな事はよくあるものだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板行^{はんこう}で押したように考えないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露^{みあら}わしたり、片方^{かたつぽ}づかないように心を自由に活動させなくってはいけな
い。

弱^{じやくはい}輩な自分にはこの機^き合がまだ呑^のみ込めなかったもんだから、原さんの前に立って顫えながら、へどもどしていると、原さんも気の毒に

なつたと見えて、

「あなたさえ帰る気なら、及ばずながら相談になろうじゃありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切って出られた時に、自分ははつとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはつと気がついた。――

自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこの原さんを除いて、ほかにないんだと気がついた。気がつくと同時にまた口が利^きけなくなつた。

是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やっぱり立ちすくんでいた。気がついても何にもならない、ただ右の手で拳骨^{げんこつ}を拵^{こしら}えて寒い鼻の下^{こす}を擦^{こす}つたように記憶している。自分はその前寄席^{よせ}へ行つて、よく噺家^{はなしか}がこんな手真似^{てつき}をするのを見た事が

あるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さんが、今度はこう云った。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ごさんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気は肌に着いていない。のたれ死^{じに}を覚悟の前でも、金は持つての方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の草鞋錢^{わらしせん}でも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地に摺^すりつけても、原さんから旅費を恵んで貰^{ふていさい}ったろう。実際こうなると廉恥^{れんち}も品格もあつたもんじやない。どんな不体裁^{ふていさい}な貰^{ふていさい}い方でもする。——大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。——しかしけつして褒^ほめられ

た始末じゃない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違う。人間の生地はこれだから、これで差支ないなどと主張するのは、練羊羹の生地は小豆だから、羊羹の代りに生小豆を嚙んでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもし料簡になったものかと、吾ながら愛想が尽きる。こう云う下卑た料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分よりも遥に高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らないで、生涯練羊羹ばかり味わつて結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭からわず

かの合力ごうりきを仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意ととので調べてくれる金も、二三日木賃宿にさんちきちんやどで夜露しのを凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもなく流れ出さなければならぬと、冥々めいめいのうちに自覚したからである。自分は屑いさぎよく涙金なみだきんを断つた。断つた表向は律義りちぎにも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索せんさくすると、慾てんびんの天秤てんびんに懸かけた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助ことわを断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやつて見る気なんですから」

「随分酔興すいきようですね」

と原さんは首を傾^{かし}げて、自分を見つめていたが、やがて溜息のような声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」
と云った。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だって……」

「家^{うち}なんかないんです。坑夫になれなければ乞食^{こじき}でもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利^きくのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出^でにくいと知りながら、我慢して使った結果、おのずと拍子^{ひょうし}に乗つて来た勢いに違いないんだか

ら、まあ器械的の变化と見倣みなしても差支さしつかえなからうが、妙なもので、その器械的の变化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌しゃべる。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分はだんだん大胆になって来た。

いや、大胆になったから饒舌あべこべれたんだろう、君の云う事は顛倒あべこべじゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分うなずをもつともと首肯うなずくだろう。

自分は大胆になった。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み

込んでやろうと決心した。また饒舌っておれば必ず坑夫になれるに違
ないと自覚して来た。一昨日おととい家を飛び出す間際までは、夢にも坑夫に
なろうと云う分別は出なかった。ばかりではない、坑夫になるための
駆落かけおちと事がきまっていたならば、何となく恥ずかしくなって、まあ一
週間よく考えた上にと、出奔しゅっぱんの時期を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。
逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない
坑掘あなほりになり下る目的の逃亡とは、何不足なく生育そだった自分の頭には影
さえ射さなかったろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を噛かみしめな
がら、しよう事なしの押問答をしているうちに、自分はどうかあっても
坑夫になるべき運命、否いな天職を帯びてるような気がし出した。この山
とこの雲とこの雨を凌しのいで来たからには、是非共坑夫にならなければ

済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目に書いてるんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、^{まけおし}負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖くって、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説いた。

「……そう云わずに使って下さい。実際僕が不適當なら仕方がないが、まだやって見ない事なんだから——せっかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐に、一日でも二日でも、いいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、どうてい役に立たないと事がきまれ

ば帰ります。きつと帰ります。僕だって、それだけの仕事が出来ないのに、押を強く御厄介ごやつかいになつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神さんかみが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立てた。

後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴する文句ではなかつた。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗くのぞくように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだらう。自分も原さんといつしよに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の

中の空合だ。^{そらあい}この一瞬時に、自分の願が叶^{かな}って、自分はまず山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云った原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻下^{こっか}の志を遂^とげると、すぐ反動が来て、かえって志を遂げた事が急に恨め^{うら}しくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取った時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日^{あした}の朝シキへ這入^{はい}って御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりません。——一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のように思われましょうが、なかなか外で聞いているような生容易^{なまやさし}い業^{わざ}じゃないんで。ま

あ取っつけから坑夫になるなあ」と云って自分の顔を眺めていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませんね。坑夫でなくつても、好^ようがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくっちゃならないと云う事がここで始めて分った。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかになにかあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」

と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山やまにはね、一万人も這入っててね。それが掘子ほりこに、シ・チ・ユウに、山市やまいちに、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこってえな、一人前の坑夫に使えねえ奴になるんで、まあ坑夫の下働したばたらきですね。シ・チ・ユウは早く云うとシ・キなかの内の大工見たようなものかね。それから山市やまいちだが、こいつは、ただ石塊いしつころをこつこつ欠いてるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしょう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんなものですよ。それで坑夫となると請負うけおい仕事だから、間まが好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当で年ねんが年中三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分ぶは親方が取っちゃまって、病氣でしようもんなら手当が半分だから十七銭五厘ですね。それで蒲団ふとんの損料が一枚三銭——寒いときは是非

二枚要るから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜は別ですよ。―――どうです。もし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりますと勢いよく出る元氣はなかつたが、ここまで来れば、今更いまさらどうしたって否いやだと断られた義理のもんじゃない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠我慢やせがまんのつけ景氣げいきのごとく響いたか、その辺は確へんしかと分らないが、何しろこの一言いちごんを聞いた原さんは、機嫌よく、

「じゃまあ、御上おあがんなさい。そうして、あした人をつけて上げるか

ら、まあシキへ這入って御覽なさるがいい。何しろ一万人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かつてると、毎日何だかだつて、うるさい事ばかりでね。せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日いちんちに二三人はきつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思うと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬ともらいばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあやる気なら本氣にやつて御覽なさい。腰を掛けてちや、足が草臥くたびれるだろう。こつちへ御上り」

この逐一ちくいちを聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいちだろうが一生懸命に働かなくっちゃあ、原さんに対して済まない仕儀になつて

来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけつしてしまいときめた。何しろ年が十九だから正直なものだった。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出おいでなさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後あとから尾ついて行つた。小作な婆さんで、後姿の華奢きゃしゃな割合には、ぴんぴん跳はねるように活潑かつぱつな歩き方をする。幅の狭い茶色の帯をちよつきり結むすびにむすんで、なけなしの髪を頸窩ほんのくぼへ片づけてその心棒しんぼうに鉛色かんざしの簪かんざしを刺している。そうして襷掛たすきがけであつた。何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、用事の

真つ最中に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだろう。それとも山育やまそだちだからかしら。いや、飯場はんばだから優長ゆうちようにしちゃいられないせいだろう。して見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だって安閑としちゃいられない。万事この婆さんの型で行かなくっちゃなるまい。――なるまい。――と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充滿して、頭と胸の組織がちよつと變つたような気分になつた。その勢いで広い階子段はしごだんを、案内に應じて、す tons とんと景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避たいしほいだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。畳数たたみかずは何

十枚だか知らないが遥はるかの突き当りまで敷き詰めてあつて、その間には一重ひとえの仕切りさえ見えない。ちようど柔道の道場か、浪花節なにわぶしの席亭せきていのような恰好かっこうで、しかも広さは倍も三倍もある。だから、ただ駄々だだ々々だだ広ひろい感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ出たとしきやあ思えない。それだけでも驚く価値ねうちは十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏いろりが二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人ずつかたまっている。自分の決心が退避ひきようだと云うのは、卑怯ひきような話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩じゃくはいの事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多めったに首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体いけに生い擒どられたんだから、この黒い塊かたまりを見るが早いか、いささか辟易ひるんじまつ

た。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。

——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支さしつかえない。ところが自分の胸

から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合せた

ように、こつちを向いた。その顔が——実はその顔で全く畏縮いしゆくしてし

まった。と云うのはその顔がただの顔じゃない。ただの人間の顔じゃ

ない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがな

い。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見る

より外に致し方がない。それでも是非説明して見ろと云うなら、ざつ

と話すが、——頬骨ほおほねがだんだん高く聳そびえてくる。顎あごが競せり出す。同時

に左右に突つ張る。眼が壺つぼのように引ッ込んで、眼球めだまを遠慮なく、奥

の方へ吸いつけちまう。小鼻が落ちる。——要するに肉と云う肉がみ

んな退却して、骨と云う骨がことごとく呐喊展開とつかんするとても評したら好かろう。顔の骨だか、骨の顔だか分らないくらいに、稜々りようりようたるものである。劇はげしい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取ったって、ああなるもんじゃない。丸味とか、温あたた味とか、優味やさしみとか云うものは薬にしたくつても、探し出せない。まあ一口に云うと犍猛じょうもうだ。不思議にもこの犍猛な相そうが一系列の共有性になつていると見えて、圀いろり裏はたの黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間まに犍猛な顔が十四五揃そろった。向うの圀いろり裏はたを取捲とりまいてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がってくるとき、長屋の窓から自分を見下みおろしていた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでいる総勢一万人の顔はことごとく犍猛なんだろう。自分は全

く退避^{ひる}んだ。

この時婆^{うしろ}さんが後を振り返って、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸^すを据えて、獐^さ猛の方へ近づいて行^はった。ようやく囲炉裏の傍^{はた}まで来ると、婆^{はた}さんが、今度は、

「まあここへ御坐^{おすわ}んなさい」

と差^さしずをしたが、ただ好加減^{いかげん}な所へ坐れと云うだけで、別に設^しけの席も何もないんだから、自分は黒い塊^{かたま}りを避^さけて、たった一人置の上へ坐^しった。この間獐^さ猛な眼は、始終^{しじゅう}自分に喰^くつついている。遠慮^{えんよ}も何もありません。そうして誰も口^{くち}を利くものがない。取附端^{とりつきは}を見出^{みい}すまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、ぽつねんと独^{ひと}りぼツちで

離れているのは、寧猛の目標めじるしとなるばかりだし、大いに困った。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、器械的に「ここへ坐れ」と云ったなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てて階子段はしごだんを降りて行つてしまつた。広い寄席よせの真中にたった一人取り残されて、樂屋の出方でかた一同から、冷かされてるようなものだ、手持無沙汰は無論である。ことさら今の自分に取つては心細い。のみならず拾一枚あわせではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんかん炭を焼たいて寧猛共が囲炉裏いろりへあたつてるんでも分る。自分は仕方がないからてれ隠かくしに襯衣シヤツの釦ボタンをはずして腋わきの下へ手を入れたり、膝ひざを立てて、足の親指を抓つかつて見たり、あるいは腿ももの所を両手で揉もんで見たり、いろいろやつていた。こう云う時に、落ついた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心しんから落ちつい

て、平気で坐つてゐる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではとうてい覺束おぼつかない芸だから、自分はやむを得ず。

前記の通りいろいろ馬鹿な真似まねをしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちょうど下を向いて鳴海絞なるみしぼりの兵児へこお帶びを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣った。見るとさっきの顔揃かおそろいで、眼がみんなこつちを向いて、光つてゐる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も獰猛じょうもうで、よく見るとその獰猛のうちに、輕侮あなどりと、嘲弄あざけりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端とたんに發明した事実で、發明す

るや否や、非常に不愉快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒かかったか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢におったものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云ったものがある。この声はさっきの「おい」よりも少し皺しやが枯れていたから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たちの言葉でないから——字で書くとき普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を倶利伽羅流くりからりゅうに崩くずしたんだから、はなはだ下等である。——それでやっぱり黙ってた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だ

から別として、原さんは思ったよりも町噺ていねいであつた。ところが原さんは飯場頭はんばがしらである。頭かしらですらこれだから、平ひらの坑夫は無論そう野卑ぞんざいじゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくぐちが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退避ひるむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいっその事毒突返どくづきかえしたなら、袋叩ふくろたたきに逢あうか、または平等の交際が出来るか、どつちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかつた。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだらう。それにもかかわらず、兄あにいに類似した言語は無論、尋常の竹篋返しつぺいがえしさえ控えたのは、——相手にならないと先さ方を軽蔑けいべつしたためだらうか——あるいは怖こわくつて何とも云う度胸がなかつたんだらうか。自分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも

後あとの方らしい。とにかくも両方交まじつてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖こわいものが沢山いくらもある。矛盾にやならない。

それはどっちにしたって構わないが、自分がこの惡口あくたいを聞いたなり、おとなしく聞き流りようけんす料簡と見て取った坑夫共は、面白そうにどつと笑った。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸さいわいと嘲弄ちようろうするのである。自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨うらみを、吾身わがみ一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入はいるまでは、自分こそ社会に立てない身体からだだと思い詰めていた。そこで飯場はんばへ上あがって見ると、自

分のような人間は仲間にしてやらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立つて、立派に板挟みいたはさになった。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起った時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持ても無沙汰ちぶさたと云うよりは、情ないなさけほど不人情な奴が揃そろつてると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だって、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否や、畜生奴ちくしょうめと思つた。俗語に云う怒おこつた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離がだいぶん詰つてるか

ら、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使っていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切^{せつ}なかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿に包^{くる}んで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意に充^みちた笑がようやく下火になると、

「御前^{おめえ}はどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐^{でどころ}っていたから、声の出所は判然^{はつきり}分つた。浅黄色^{あさぎいろ}の手拭染^{てぬぐいじ}みた三尺帯を腰骨の上へ引き廻^{うしろむ}して、後向きの胡坐^{あぐら}のまま、斜^{はす}に顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜^{けつまく}が一面

に充血している。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹へこまして、愚弄ぐろうの笑いを洩もらしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎あごでしゃくった。するとこの相図を受けた、願人坊主がんにんぼうずが、入れ替ってこんな事を云った、

「僕だなんて——書生しよせツ坊ぼだな。大方女郎買おおかたでもしてしくじったんだろう。太え奴だ。全体ぜんてえこの頃の書生ツ坊の風儀が悪くつていけねえ。

そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く帰けえれ。そんな瘡やせっこけた腕でできる稼業かぎようじゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張合はりあいが抜けたせい
か、わいわい冷かすのが少し静まった。その時一人の坑夫——これは

尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらいに眼鼻立が調^{ととの}つていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒い塊^{かたまり}を見るたびに、人数^{にんず}やら、着物やら、獐^{じよう}猛^{もう}の度合やらをだんだん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼でできた上に獣慾^{あぶら}の脂が浮いているところばかり眼に着いて、どれも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫^{ひときわ}だけが一際^{ひととき}目立^{くつき}つて見えるようになった。年はまだ三十にはなるまい。体格^{くつき}は倔強^{きやう}である。眉毛^{まみえ}と鼻の根と落ち合う所が、一段奥へ引^しつ込んで、始終^{しじゆう}鼻眼鏡^おで圧^おしつけてるように見える。そこに疳癩^{かんしやく}が拘泥^{こうでい}していそうだが、これがために獐^{じよう}猛^{もう}の度はかえって減ずると云つても好いような特徴であつた。——この坑夫

が始めてこの時口を利いた。^き——

「なぜこんな所へ来た。来たって仕方がないぜ。儲^{もう}かる所じゃない。ここにゐる奴あ、みんな食詰^{くいづめ}ものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰って新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通^{かよ}ったもんだが、放蕩^{ほうとう}の結果とうとう、シキの飯を食うようになっちまった。おれのようになったが最後もう駄目だ。帰ろうたって、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ帰って新聞配達をしろ。書生はとて^{ひと}も一月^{つき}と辛抱は出来ないよ。悪い事は云わねえから帰れ。分つたろう」

これは比較^{まじめ}的眞面目な忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの癡^{どうあくは}悪派もおとなしく交^{まぜ}つ返しもせず^{まぜ}に聞いていた。その惰性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の

勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だった。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの変化はあれ、やっぱり一つ穴でこつこつ鉋塊あらがねを欠いている分の事だろう。そう芸に巧拙こうせつのあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ない。自分は今こんな馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされない人非人にんびとして、多勢たぜいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首を突込つっこんで、獰猛組じようもうぐみの一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちに、この男くらいの勢力を得る事はできるかも知れない。できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つ

ても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。――随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつてゐるようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましょうと云う返事もしなかつた。そのうちいったん静まりかけた愚弄ぐろうの舌したがまた動き出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから吞のみ込んで置かなくっちゃ迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟おきてですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分もあるじゃねえか」
きょうでえぶん

と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙っていようかしら
んとも思ってたけれども、万一掟を破って、あとで苛い目に逢うのが怖
いから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫が、すぐ、返事をした。
ほか

「しよあのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らね
えで、坑夫になろうなんて料簡違えだ。りようけんちげ早く帰れ」
けえ

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲けようたって、そう旨かあ行
かねえ。帰れ」
もう

「儲かるもんか帰るが好い」
けえ

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも実際自分のためを思つて帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うのである。さぞ儲けたいだろうが、そうは問屋で卸さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うのである。したがってどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの囲炉裏の周囲ばかりにやいない。さつきちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になって、黒く塊かたまっている。こつちの

団体だけですら持ち扱っているところへ、あつちの群勢ぐんぜいが加勢したら大事だいじである。自分は愚弄ぐろうされながらも、時々横目を使つて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまふ。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように自分の心が、左右前後と離れ離れになつて、しかも独立ができないものだから、物の後を追掛あと おっかけ、追ん廻めぐわしているほど辛い事つらはない。なんでも敵に逢あつたら敵を吞のむに限る。吞む事ができなければ吞まれてしまふが好い。もし両方共困難ならぷつりと縁を截きつて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持つてく事も出来ず、しかも敵の尻かを嗅かがなければならぬとなると、はなはだしき損となる。したがつて

もつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦しゃかの空説法からぜつぽうである。もし講釈をしないでも知れ切ってる陳説ちんせつなら、なおさら言うだけが野暮やぼになる。どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がつかなくって困る。

自分が四方八方に気を配って、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っている、

「御膳ごぜんを御上がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間にま婆さんが上がって来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなって、萎縮いしゆくした真最中だった

から、御膳おぜんの声が耳に入るまではまるで気がつかなかった。見ると剥はげた御膳の上に縁ふちの欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃めしびつも乗っている。箸はしは赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆うるしが半分ほど落ちて木地きじが全く出ている。御菜には糸蒔いとごんにやく蒔が一皿ついていた。自分は伏目になつてこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝けさから水一滴も口へ入れていない。胃は全く空からである。もし空でなければ、昨日きのう食あつた揚饅頭あげまんじゅうと薩摩芋さつまいもがあるばかりである。飯いの氣けを離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮のどもとしているこの際でも、御櫃おはちの影を見るや否や食慾は猛然として咽喉のどもと元まで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交まぜつ返しも氣に掛ける暇いとまなく、見栄みえも糸瓜へちまも棒に振って、いきなり、お櫃はちからしゃくつて茶碗へ一杯盛り上げ

た。その手数てかずさえ面倒なくらい待ち遠しいほどであつたが、例の剥箸はげばしを取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。ちつともすくえない。指の股またに力を入れて箸をうんと底まで突っ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けっして茶碗の縁ふちを離れようとしな
い。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、はてなと箸はしを休めて考えた。おそろく狐つまに撮まれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どっと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢つやのない飯を一口掻かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿つたと

思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液つばきに和とけて、口いっぱいに広がった時の心持は云うに云われなかった。

「面つらあ見ろ。いい様ざまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの気でいやがらあ。だから帰けえれつて教おせえてやるのに」

と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りっから料簡ようけん違ちがえだ」

とまた一人が云った。

自分は嘲弄ちやうろうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを呑み下した。一口でやめようと思つたが、せつかく盛り込んだものを、食つてしまわないと、また冷かされるから、熊の胆いを呑む氣になつて、茶碗に盛つただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日きのう食つた揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始てである。

茶碗に盛つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛よそう氣にならなかつたから、糸蒟蒻いとごんにやくだけを食つて箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭いやなものを口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄ちやうろうされた。その時は随分つらい事と思つたが、その後日ごに三度ずつは、必ずこの南京米ナンキンまいに對むかわなくつちや

ならない身分となつたんで、さすがの壁土も慣れるに連れて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食つてしかるべき滋味と心得るようになってからは、剥膳はげぜんに向つて逡巡しりごみした当時がかえつて恥ずかしい気持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更無理ではない。今となると、こんな無経験な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病むところに廻り合めぐわせて、現状を目撃したら、ことに因よると、自分でさえ、笑うかも知れない。冷かさないまでも、善意に笑うだけの価値ねうちは十分あると思う。人はいろいろに変化するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金盥かなだらを叩たたき合せるような音が

した。一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃららんと時を句切^{くぎ}つて、拍子^{ひょうし}を取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄^{きやり}の声が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空氣に、じゃん、じゃららが鳴り渡る間を、一種異様に唄^{うた}い囃^{はや}して何物か近づいて来た。

「ジ・ヤン・ボー・だ」

と一人が膝頭^{ひざがしら}を打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジ・ヤン・ボー・だ。ジ・ヤン・ボー・だ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊^{かたまり}がばらばらになって、窓の方へ立つ

て行つた。自分は何がジャン・ボー・なんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達したせい^{のんびり}か、自分もジャン・ボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元氣も出来た。つくづく考えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲^{すもう}をとつて暮らしていると云つても差支^{さしつかえ}なからう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうしてやっぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞^{ふさ}がつている上から背伸^{せえのび}をして見下^{みおろ}すと、斜^{はす}に曲つてゐる向^{むこう}の石垣の角から、紺^{こん}の筒袖^{つつそで}を着た男が二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盥^おを圧^おしつぶして薄^{うす}っ片^{ぺら}にしたようなものを両手に一枚ずつ持っている。ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手を

じゃじゃんと打ち合わした。その不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、後の禿山うしろ はげやまに響いて、まだやまないうちに、じゃららんとまた一組あとが後から鳴らし立てて現れた。たと思うとまた現れる。今度は金盃きんこうを持っていない。その代り木唄——さつきは木唄と云った。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節なにわぶしで咄喊とつかんするような稀代きだいな調子であつた。

「おい金公きんこうはいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴どなった。後向うしろむきだから顔は見えない。すると、

「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覺

悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がいる事かと、自分も後を追っ懸^かけて、首を捻^ねじ向けると、——寝ている。薄い布団^{ふとん}をかけて一人寝ている。

「おい金州^{きんしゅう}」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

と怒鳴^{どなり}つけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎^{むかえ}に出掛けた。被^{かぶ}つてゐる布団^{ふとん}を手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろってば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支えられて立ち上つた。そうしてこっちを向いた。その時、その刹那、その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄ぞつとした。これはただ保養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで起居たちいのできないような重体の病人である。年は五十に近い。髯ひげは幾日も剃そらないと見え、てぼうぼうと延びたままである。いかな寧猛どうもうも、こう憔悴やつれると憐れあわになる。憐れになり過ぎて、逆にまた怖こわくなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れの極きよく全く怖こわかつた。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利きかない足を運ばして、窓の方へ近寄つてくる。この有様を見ていた、窓際の多人数たにんずは、さも面白そうに囁はやし立てる。

「よう、金^{きん}しゅう早く来いよ。今^{いま}ジャン・ボー^{ジャン・ボー}が通るところだ。早く来て見ろよ」

「己^{おら}あジャン・ボー^{ジャン・ボー}なんか見たかねえよ」

と病人は、無体^{むたい}に引き摺^ずられながら、氣のない声で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障子^{しょうじ}の角^{かど}まで圧^おしつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃららんとジャン・ボー^{ジャン・ボー}は知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延^{せい}びをして見下^{みおろ}した時、自分は再び慄とした。金盞^{かなだら}と金盞^{きんさん}の間に、四角な早桶^{はやおけ}が挟^{はさ}まって、山道を宙に釣^つられて行く。上は白金巾^{しろかなきん}で包んで、細い杉丸太を通した両^{りょう}端^{たん}を、水でも一荷^{いっか}頼^{たの}まれたように、容赦^{ようじやう}なく担^{かつ}いでいる。その担いで

いるものまでも、こつちから見ると、例の唄うたを陽氣にうたつてゐるよう
に思われる。——自分はこの時始めてジ・ヤン・ボーの意味を理解した。
生涯しょうがいいかなる事があつても、けつして忘れられないほど痛切に理解し
た。ジ・ヤン・ボーは葬式である。坑夫、シ・チュウ、掘子ほりこ、山市やまいちに限つて
執行される、また執行されなければならない一種の葬式である。御経
の文句を浪花節ななわぶしに唄うたつて、金盃きんづぶの潰つぶれるほどに音楽を入れて、一荷いっかの
水と同じように棺桶かんおけをぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、
無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてま
で見せてやる葬式である。まことに無邪氣きよくの極で、また冷刻の極であ
る。

「金しゅう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云つてゐる。病人は、

「うん、見えたから、床^{とこ}ん所まで連れてつて、寝かしてくれよ。後生^{ごしょう}だから」

と頼んでゐる。さっきの二人は再び病人を中へ挟んで、

「よつしよいよつしよい」

と云いながら、刻^{きざ}み足に、布団^{ふとん}の敷いてある所まで連れて行つた。

この時曇つた空が、粉になつて落ちて来たかと思われるような雨が降り出した。ジャンボ[・]ーはこの雨の中を敲^{たた}き立てて町の方^{くた}へ下つて行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々^{めいめい}囲炉裏^{いろり}の傍^{はた}へ帰る。この混雑^{ごうさく}紛^{ごまぎれ}

に自分もいつの間にか^ま癡^{どうもう}猛の仲間入りをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意の所作^{しよさ}でもあった。と云うものは火の気がなくなつてははなはだ寒い。拾^{あわせ}一枚ではとても^{しの}凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微^{かす}かな粒であるが、四方の禿^{はげ}山^{やま}を罩^こめ尽した上に、筒^{つつ}拔^ぬけの空を塗^ぬり潰^{つぶ}して、しとどと落ちて来るんだから、家^{うち}の中に坐つていてさえ、糠^{ぬか}よりも小さい^{しめ}湿^けり気が、毛穴から腹の底へ沁^しみ込むような心持である。火の気がなくなつてはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも

調戯からかわれずに済んだ。これはこっちから進んで獰猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獰猛として取扱うべき奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻さつきのジャン・ボーで不意に気が変った成行なりゆきとして、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑ひやかしの種が尽きたか、あるいは毒突どくづくのに飽きたんだか、——何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的楽になった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャン・ボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。——

「あのジャン・ボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たって御おジャン・ボーだ」

「ことによると黒市組くろいちぐみかも知れねえ。見当けんとうがそうだ」

「全体ぜんてえジャン・ボーになったらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限てらぎりで留とまりっこねえ訳だ。どつかへ行くに違ちがえねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所ところだろうてえんだ。やっぱしこんな所ところかしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「己おれもそう思つてる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極楽ごくらくだつて、やっぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。それで始めのうちは冗談だと思つた。笑つても差支ないものと心得て、口の端をむずつかせながら、ちよつと様子を見渡したくらいであつた。ところが笑いたいのは自分だけで、囲炉裏を取り捲いてゐる顔はいずれも、彫りつけたように堅くなつてゐる。彼らは真剣の真面目で未来と云う大問題を論じていたのである。実に嘘としか受け取れないほどの熱心が、各々の眉の間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥して、さっきの笑いたかつた念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カン・テ・ラを提げて、シ・キの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡でゐる人間が——人間の器械

で、器械の獣けだものとも云うべきこの寧猛組じょうもうぐみが、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用いりようのはずだ。實際自分が眼を上げて、囲炉裏いろりのぐるりに胡坐あぐらをかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮いしゆくが手伝つて、七分方しちぶがたでき上つた笑いを急に崩くずしたと云う自覚は無論なかつた。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門様びしゃもんさまが大勢いて、これはと威儀を正さなければならぬ気持ちであつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獣半人の前にも嚴格の念を起したんだろう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持っていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんと唸うなり出した。その唸り

声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんのだが、ジ・ャ・ン・ボ・ーの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のよう^{きんこう}に思われたんだろう。みんな眼と眼を見合した。

「金公苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸ってるのか、返事をしているのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなに鼻かかあの事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。

今更唸いまなげったってどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れるなあ当り前だ」

と、やっぱり囲炉裏の傍へ坐ったまま、大きな声で慰めている。慰めてるんだか、悪口を吐いているんだか疑わしいくらいである。坑夫から云うと、どっちも同じ事なんだろう。病人はただうんと挨拶——挨拶にもならない声を微かに出すばかりであった。そこで大勢は懸合にならない慰藉をやめて、囲炉裏の周囲だけで舌の用を弁じていた。しかし話題はまだ金さんを離れない。

「なあに、病氣せえしなけりや、金公だつて鼻を取られずに済むんだあな。元を云やあ、やっぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を抵当に取られちまったんだから、正直のところ文句の附けようがね

え」

と賛成したものがある。

「若干で抵当いくらに入れたんだ」

と聞くと、向側むこうがわから、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市いちの野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハハ」

自分は囲炉裏そばの側に坐ってるのが苦痛であった。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋わきの下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒なおって、鼻かかあを受け出したら好かろう」

「また、市いちと入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼かせいで、もつと価ねに踏める抵当でも取った方が、気が利きいてらあ」

「違ちがねえ」

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑った。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝ひざを並べて畏かしこまっていた。馬鹿らしいと気がついて、胡坐あぐらに組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐ゆうちようをかくほど悠長ではなかった。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天氣の具合と、山が囲んでるせいで早く暗くなる。黙って聞い

いると、雨垂あまたれの音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇やんだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やっぱり降つてると云う方が当るだろう。窓は固もとより締め切つてある。戸外そとの模様は分りようがない。しかし暗くつて湿しめッぽい空氣が障子しょうじの紙を透こして、一面に圀いろり裏の周圍まわりを襲おそつて來た。並んでゐる十四五人の顔がしだいしだいに漠然ぼんやりする。同時に圀まんなか裏の真中に山のようにくべた炭の色が、ほてり返つて、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑あなの底へ滅入めいりこ込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競せり上がつて來る、——ざつと、そんな氣分がした。時にぱつと部屋中が明るくなつた。見ると電氣灯が点ついた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食って、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降ってるのか」

「どうか、表へ出て仰向あおもむいて見な」

などと、口々に罵りながら、立って、階下段はしごだんを下りて行つた。自分は

広い部屋にたった一人残された。自分のほかにいるものは病人の金さきん

んばかりである。この金さんがやつぱり微かすかな声を出して唸うなってるよう

だ。自分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を組みながら、横を向いて、

金さんの方を見た。頭は出ていない。足も引つ込まっている。金さん

の身体からだは一枚の布団ふとんの中で、小さく平ったくなっている。気の毒なほ

ど小さく平ったく見えた。その内唸り声も、うちうなごえ、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向を易えて、むきか、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが気に掛かってたまらないから、また横を向いた。すると金さんはやっぱり一枚の布団の中で、小さく平ったくなっている。そうして、森しんとしている。生きてるのか、死んでるのか、ただ森としている。唸られるのも、あんまり気味の好いもんじゃないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極は怖くなつて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじゃないと、度胸を据すえてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三三人、下からどやどやと階下段を上がつて来た。はしごだんもう飯を済ましたんだろうか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段

の方を眺^{なが}めていると、思も寄らないものが、現れた。――黒か紺^{こん}か色の判^は然^{つきり}しない筒服^{つつぽう}を着ている。足は職人の穿^はくような細い股引^{ももひき}で、色はやはり同じ紺である。それでカンテラ^{かんてら}を提^さげている。のみならず二^{ふた}人が二人とも泥だらけになって、濡^ぬれてる。そうして、口^{くち}を利^きかない。突つ立つたまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラ^{かんてら}を抛^{ほう}り出すと、釦^{ボタン}を外^{はず}して、筒袖^{つつぽう}を脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖^{ひろそで}を、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やっぱり無言のまま、二人しらずしりずしりと降りて行つた。するとまた上がって来た。今度^{こんだ}のも濡れている。泥だらけである。カンテラ^{かんてら}を抛^{ほう}り出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上がって来る。こう云う風に

入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼球めだまを光らして、一遍だけはきつと自分を見た。中には、

「手前てまえは新前しんめえだな」

と云ったものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。さいわ幸い今度はさっきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難ぶなんに済んだ。上がって来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯からかう暇がなかったんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、上がって来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まとま

りようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰ていると、炭の中にそう云う妄想もうぞうがちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣かつきに煽あおられながら、むやみに踊をおどつてるような変な心持になった時に、突然、

「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さつきの婆さんが、立っている。やっぱり襷掛たすきがけのままである。いつの間まに上がって来たものか、ちつとも気がつかなかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻つて、艶子つやこさんになったり、澄江すみえさんになったり、親爺おやじになったり、金さんになったり、――被布ひふやら、

ひさがみ
廂髪やら、赤毛布やら、唸り声やら、揚げまんじゅう
幾多無数の幻影が、まぼろし
囲炉裏の中に躍り狂って、立ち騰る火の気の裏に
追いつ追われつ、日向に浮かぶ塵と思われるまで夥しく出て来た最中
に、はっと気がついたんだから、眼の前にいる婆さんが、不思議なく
らい変であつた。しかし寝ると云う注意だけは明かに耳に聞えたに違
ないから、自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布団は、あすこに這入ってるから、独で出して御掛けなさい。一枚
三銭ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたら、婆さんは、それ限何ぎりにも云わずに、降りて行つた。これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても剣けん突つを食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図さしず通り戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかしいづれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分は一番上に乗つてゐるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地じは浅黄あさぎである。模様は白である。その上に垢あかが一面に塗られてゐるから、六分方色変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗つき立ての伸のし餅もちを、金巾かなきんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわと

はまるで縁故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平く敷いた。^{ひらた}それから残る一枚を平く掛けた。そうして、襯衣^{シャツ}だけになって、その間に潜^{もぐ}り込んだ。湿^{しめ}っぽい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵^{かかと}が畳の上へ出たから、また心持引っ込みました。延ばす時も曲げる時も、不断のように軽くしなやかに
は行かない。みしりと音がするほど、関節が窮屈に硬張^{こわば}って、動きたがらない。じつとして、布団の中に膝頭^{ひざがしら}を横たえていると、倦怠^{だる}のを通り越して重い。腿^{もも}から下を切り取って、その代りに筋金入りの義足をつけられたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくって重たい足を苦^くに病^やんで、頭を布団の中に突っ込んだ。せめて頭だけでも暖^{あつたか}にしたら、足の方でも折れ合ってくれるだろ

うとの、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭いよりも、煩悶はんもんよりも、厭世えんせいよりも――疲れている。実に死ぬ方が楽らくなほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ――畳から足を引っ込めて、頭を布団に入れるだけの所作しよさを仕遂しとげたと思うが早いか、眠ねてしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧あいまいであつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺とげだろうが、頓着とんじやくはなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺ひきずり込んで、夢の中の刺を前後不覚とこの床の下に埋うづめてしま

う分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなと思いながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。

今度は大きな眼を開いた。あところへまたちくりと来た。おやと驚く途端とたんにまたちくりと刺した。これは大変だとううやく気がつきがけに、飛び上るほど劇はげしく股ももの辺あたりをやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に歸つた。そうして身体中至る所がちくちくしているのを發見した。そこでそつと襯衣シャツの間から手を入れて、背中を撫なでて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹かかつたんだと思つた。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないと

たちまち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲炉裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫を見た事がないんだから、はたしてこれがそうだとは断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑た所に直覺の二字を濫用しては濟まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使った。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪らしくなつて来た。囲炉裏の縁へ乗せて、ぴちりと親指の爪で押し潰したら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭い臭氣を嗅ぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜い事を真面目にかかねばならぬほど狂違染みていた。実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨を

霽^はらしたような気がしなかったのである。それだから捕^とつては潰し、捕^とつては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがって嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰^なって来た。今にも涙が出そうになる。非常に情^{なさけ}ない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で大勢が一度にどつと笑う声がした。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなって静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほかにたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかった。向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿^{ほもめん}のようなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか気味が悪かった。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜^{はす}に出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭^{いがぐりあたま}であつた。――広い

部屋には、自分とこの二人を除いて、誰もいない。ただ電気灯がかん点ついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑った。さっきの連中か、または作業を済まして帰って来たものが、大勢寄つてふざけ散らしているに違ない。自分はぼんやりして布団のある所まで帰って来た。そうして裸体はだかになつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮嚀ていねいに畳んで戸棚へ入れた。それから後あとはどうして好いか分らない。時間は何時なんじだか、夜よはどうていまだ明けそうにしない。腕組をして立つて考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪こらえ切れずに、

「えつ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を

擦^{こす}って、左の足の甲で右の上を擦^{こす}って、これでもかと齒^は軋^ぎをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云って、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固^{もと}りない。さつき毒^{どく}突^つかれた事を思い出すと、南京虫よりよっぽど厭^{いや}だ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚^よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずる畳の目を滑^{すべ}ってだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直^{まつすぐ}に立つ。またずるずる滑^{すべ}る。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫^{ナンキンむし}は出て来なかつた。下では時々どつと笑う。いても立つてもと云うのは喩^{たとえ}だが、そのいても立つてもを、実際に

経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方かたのつかない運動をして、中途半端に紛まぎらかしていた。ところがその運動をいつまで根気こんきにやったものか覚えていない。いとど疲れている上に、なお手足を疲らして、いかな南京虫でも応こたえないほど疲れ切ったんで、始めて寝たもんだろう。夜が明けたら、自分が摺ずり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲踞うづくまっていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過たつにつれて、だんだん痛くなくなったのは妙である。その実、一箇月ばかりしたら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ転がってゐるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。もつとも南京虫の方でも日数ひかずを積むに従つて遠慮してくるそうである。その証拠には新来きたてのお

客には、べた一面にたかつて、夜通し苛めるが、少し辛抱している
と、向うから、愛想をつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云
う。毎日食つてゐる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあ
るし、いや肉の方にそれだけの品格が出来て、シキ臭くなるから、虫
も恐れ入るんだとも説明したものがあつた。そうして見るとこの南京虫
と坑夫とは、性質がよく似ている。おそろく坑夫ばかりじゃあるま
い、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配さ
れてゐるんだろう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括するところに
面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の
考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼ねをしたり、贅沢
を云つたりするんじゃないやなくて、食われる人間の方で習慣の結果、無

神経になるんだろうと思う。虫は依然として食ってるが、食われても平気でいるに違いない、もつとも食われて感じないのも、食われなくつて感じないのも、趣おもむきこそ違い、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云っている。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつとも判然はつきりとは降っていない。雲の濃いのが糸になり損そくなつて、なっただけが、細く地へ落ちる気色けしきだ。だからむやみに濛々もうもうとはしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透すいて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏とぼしい、潤うるおいの

ない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑
かろうと思われるほど赤く禿^はげてぐるりと自分を取り捲^まいている。そ
うして残らず雨に濡^ぬれている。潤い気^けのないものが、濡れているんだ
から、土器^{かわらけ}に霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その
癖寒い気持がする。それで自分は首を引つ込めようとしたら、ちよつ
と眼についた。――手拭^{てぬぐい}を被^{かぶ}つて、藁^{わら}を腰に当てて、筒服^{つつぽう}を着た男が
二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちようど昨日^{きのう}ジャンボ一の
通った路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼ
して気の毒なほど憐れである。自分も今朝からあなるんだなと、ふ
と気がついて見ると、人事^{ひつじ}とは思われないほど、向^むへ行く手拭^{てぬぐい}の影――
――雨に濡^ぬれた手拭の影が情^{なさけ}なかった。すると雨の間からまた古帽子が

出て来た。その後あとからまた筒袖姿つつそですがたがあらわれた。何でも朝の番に当た坑夫がシ・キへ這入はいる時間に相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段はしごだんを上あがつて来る。来たなと思ったが仕方がないから懷手ふところをして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとからまた上あがつてくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちゃいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰てもちぶさた過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落つい

ちやいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊って、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子きむすこである。下りて見ると例の婆さんが、襷たすきがけをして、草鞋わらじを一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばつたり出逢であつた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門口かどぐちの方へ行つた。まるで相手にしちやいない。自分にはあつちの見当けんとうがわからなかったが、とにかく婆さんの出て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中

に四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちすが据えてある。あの中に南京米ナンキンまいの炊たいたのがいっぱい詰ってるのかと思つたら、——何しろ自分が三度三度一箇月食つても食い切れないほどの南京米なんだから、食わない前からうんざりしちまつた。——顔を洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立つて、冷たい水で、申し訳のために頬ほっぺた辺なを撫でて置いた。こうなると叮嚀ていねいに顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一歩進むと、顔は洗わなくつても宜いいものと度胸が坐つてくるんだろう。昨日きのうの赤毛布あかげつとや小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ちがない。

顔はようやく自力で洗つた。飯はどうなる事かと、またのそのそ台所あがへ上あつた。ところへ幸さいわい婆さんが表から歸つて来て膳立ぜんだてをしてく

れた。ありがたい事に味噌汁がついていたんで、こいつを南京米の上から、ざっと掛けて、ざくざくと掻き込んだんで、今度は壁土の味を噛み分ないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯が済んだら、初さんがシキへ連れて行くって待ってるから、早くおいでなさい」

と、箸も置かない先から急ぎ立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体が持つまいと思ってたところだが、こう催促されて見ると、無論御代りなんか盛う必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上り口に一人掛けている。自分の顔を見て、

「御前か、シキへ行くなあ」
おめえ

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたら、

「じゃ、いっしょに来ねえ」

と云う。

「この服装でも好いんですか」
なり

と叮嚀に聞き返すと、
ていねい

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這入れるもんか。ここへ親分と
へえ

これから一枚借りて来てやったから、此服を着るがいい」
こいつ

と云いながら、例の筒袖を抛り出した。
つつそで ほう

「そいつが上だ。こいつが股引だ。ももひき。そら」

とまた股引を抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着いている。地は小倉らしい。じこくら。自分もとうとうこの御仕着おしきせを着る始末になったんだなと思ひながら、かすり 紺を脱いで上下とも紺揃こんぞろいになった。ちよつと見ると内閣の小使のようだが、心持から云うと、小使を拝命した時よりも遥はるかに不景気であつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待った」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当ててるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらばつちのような藁布団わらぶとん

に紐ひもをつけた変へんてこ挺なものだ。自分は初さんの云う通り、これを臀部でんぶへ縛しばりつけた。

「それが、ア・テ・シ・コだ。好よしか。それから鑿のみだ。こいつを腰こしん所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあろうと云う鉄の棒で、先が少し尖とがっている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しっかり受け取らねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌つちを差してよく坑あなの中が歩けるもんだと思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提^さげるんだ」

とカン・テラを出しかけたが、

「待ったり。カン・テラの前に一つ草鞋^{わらじ}を穿^はいちまいねえ」

草鞋^{わらじ}の新しいのが、上り口にある。さつき婆^おさんが振^ぶら下^さげてたのは、大方これだろう。自分は素足^{すあし}の上へ草鞋^{わらじ}を穿^はいた。緒^おを踵^{かかと}へ通してぐつと引くと、

「驚癡^{どじ}だなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指^{いび}の股^こを寛^{ゆる}めろい」

と叱られた。叱られながら、どうにか、こうにか穿いてしまう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初さんは饅頭笠とカンテラを渡した。饅頭笠と云うのか筍笠たけのこがさというのか知らないが、何でも懲役人の被かぶるような笠であつた。その笠を神妙ように被る。それからカンテラを提さげる。このカンテラは提げるようにできている。恰好かつこうは二合入りの石油缶せきゆかんとも云うべきもので、そこへ油を注さす口と、心しんを出す孔あなが開あいてる上に、細長い管くだが食くつついて、その管の先がちよつと横へ曲がると、すぐ膨ふくらんだカップになる。このカップへ親指を突っ込んで、その親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を済ますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿はめるんだ」

と初さんが、勝栗かちぐりのような親指を、カンテラの孔の中へ突つっこ込んだ。旨うまい具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振つて見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとって揺うごして見たがやつぱり落ちなかった。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好よござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠かさへあたたつた。仰向あおむいて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぽつぽつとあたたつた。それからあとは、肩へもあたる。足へもあた

る。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸し返される。しかし雨の方が寒いんで、身体のとぼりがだんだん冷めて行くような心持であつたが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を弾き出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。

入口はまず汽車の隧道の大きいものと云つて宜しい。蒲鉾形の天辺は二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧道に似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透かして見た。奥は暗かった。

「どうだここが地獄の入口だ。這入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄の語気を帯びている。さつき飯場を出

て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののっていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込められ

て物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥底にはきつと

愚弄ぐろうの意味がある。これを布衍ふえんして云うと、一つには貴様もとうとう

こんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見ろと云う事にな

る。もう一つは御氣の毒だが来たって駄目だよ。そんな脂やにっこい身体からだ

で何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日きのうのだ」「新来しんき

だ」と騒ぐうちには、自分が彼らと同様の苦痛を嘗なめなければならな

いほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪たえが

たい奴だとの軽蔑けいべつさえ加わっている。彼らは他人ひとを彼らと同程度に引き摺ずり落して喝采かつさいするのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足いっぺんの下まで蹴落けおとして、墮落は同程度だが、墮落に堪たえる力は彼らの方がかえって上だとの自信をほめかして満足するらしい。自分は途上みちみち「昨日のだ」と聞きたんに、懲役笠ちようえきがさで顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄ぐろうしたんだから、自分は少しむつとして、

「這はい入れますとも。電車さえ通かよつてるじゃありませんか」

と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？ 豪義ごうぎな事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と

直すこなされるにきまつてる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シ・キの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入って見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおっかなくなり出したには降参した。雨が降っていても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかつている。それなのに初さんは中ちゅう腹ぱらでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。

「シ・キの中でおとなしくしねえと、すすののの中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくっちゃあいけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留どまった。初さんの腰には鑿のみがある。五斤の槌つちがある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」

と返事をした。

「よしか、分ったか。生きて出る料簡りようけんなら生意気にシ・キ・な・ん・かへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになって、初さんが歩き出した時に、半分は独り言のように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑あなの中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんわんと自分の耳へ跳ねは返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入ったもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になろうと云う気も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖い商売こわなら——殺されるんなら——すのこの中へ抛なげ込まれるなら——すのことは全体どんなもん

だろうと思い出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後^{うしろ}を振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。――^{あらがね}鉋^{ほう}を抛り込んで、^{まと}纏めて下へ降^さげる穴だ。鉋といっしよに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切ってまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留った。振り返ると、入口が小さい月のように

見える。這入るときは、これがシキ・ならと思つた。聞いたほどでもないと思つた。ところが初さんに威嚇おどかされてから、いかな平凡な隧道トンネルも、大いに容子ようすが變つて來た。懲役笠ちようえきかさをたたく冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて氣がついた。いくら曇つていてもやつぱり外が懷なつかしい。真黒な天井てんじようが上から抑おさえつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて來るように感ぜられる。と思つと、軌道レールを横へ切れて、右へ曲つた。だらだら坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしゃりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして

壁へ触^{さわ}つて見ると、雨が降ったように濡^ぬれている。

「どうだ、尾^ついて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云ったなり、また二人とも無言になった。この時行く手^{かた}の方に一点の灯^{あかり}が見えた。暗闇^{くらやみ}の中の黒猫の片眼のように光ってる。カン・テ・ラの灯^ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。

方角も真直^{まっすぐ}じゃないが、とにかく見える。もし坑^{あな}の中が一本道だとすれば、この灯を目懸^{めが}けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分

は何にも聞かなかったが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯ひが点ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦すれ々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑あなが四五畳ほどの大おおきに広がつて、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電氣灯が点いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対むかい合あひに洋卓テーブルを隔へてて腰を掛けていた。表には第一見張所とあつた。これは坑夫の出入でいりだの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだ

が、その当時には何のための設備だか知らなかったもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃そろえて無言のまま、見張所の前に立っているのを不審に思った。これは時間を待ち合あわして交替するためである。自分は腰に鑿のみと槌つちを差してカンテラさえ提さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合あわす必要もないものと見えて、すぐこの溜たまりを通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突っ込んで、ちよいと役人に断ことわったが、役人は別に自分の方を見向もしなかった。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚はばかってだろう、全く一言も口を利きいたものはなかった。

溜あなを出るや否や坑の様子が突然変った。今までは立ってあるいて

も、背延^{せい}びをしても届きそうにもしなかった天井が急に落ちて来て、真直^{まつすぐ}に歩くと時々頭^{さわ}へ触るような気持がする。これがものの二寸も低からうものなら、岩へぶつかって眉間^{みけん}から血が出るに違ないと思うと、松原をあるくように、ありったけの背で、野風^{のふう}雑^{ぞう}にややって行けない。おつかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食つついて行つた。もつともカンテラはさつき点^つけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四^よん這^ばいになつた。おや、滑^{すべ}つて転んだ。と思つて、後^{うしろ}から突つ掛かりそうなところを、ぐつと足を踏ん張つた。このくらいにして喰い留めない、と、坂だから、前へのめる恐^{おそれ}がある。心持腰から上を反^そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合^あわしていると、初さんはなかなか起きない。やつぱり這^はつ

ている。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。――はてな――怪我でもしやしないかしら――もう一遍聞いて見ようか――すると初さんはこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまう。その声で自分是不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離か

ら出るのに、急に潜^{もぐ}つてしまふ。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖^{あい}昧^{まい}になる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透^{すか}して見るとようやく分^{わか}つた。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭^{せま}くなつて、這わなくなつちや抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四つん這いにならなくつちや仕方がないと諦^{あきら}めをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけっして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカン・テラ^さを提^さげている。左の手の平^{ひら}だけを惜^{おし}気^げもなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突い

た時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような氣持がした。それでカン・テ・ラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになって、はなはだ不便である。どうしたもんだろうと、この姿勢のままじっとしていた。そうして、右の手で宙に釣っているカン・テ・ラを見た。ところへぼたりと天井からしずくが垂れた。カン・テ・ラの灯がじいと鳴った。油煙が顎から頬へかかる。眼へも這入った。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当にあたるんだか、いっこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ち

てカン・テ・ラのじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行つてしまつた。頼はカン・テ・ラ一つである。そのカン・テ・ラがじいと鳴つて水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかったと安心する時分に、またぽたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終垂れていたんだが、灯が腰から下にあるんで、いっこう気がつかなかつたんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちやいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云った。

自分は這はいながら、咽喉のどぼとけ仏の角かどを尖とがらすほどに顎あごを突き出して、初さんの方を見た。すると一いつけん間ばかり向うに熊の穴見たようなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出ている。自分あまり手間取るんで、初さんが屈こつこんでこつちを覗のぞき込んでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じゃ善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引ッ込まして穴の外に立っている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉うれしやと狭い所を潜くぐり抜けた。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちゃ、シキへは一足だつて踏ん込めっこはねえ。陸の
ように地面はねえ所ところだくらいは、どんな頓珍漢とんちんかんだつて知つてゐるはず
だ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云つた。こ
の人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにとただし書がきを
つけて、その確実な事を保証して置くのである。自分は何か云い訳を
するたんびに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙つ
ていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつ
けて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好きから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚^{びっくり}して稀有^{けう}な顔をしていた。

「冗談^{じょうだん}じゃねえ。何が這入^{へっ}てると思う。種油^{たねあぶら}だよ、しずくぐらいで消^{けえ}てたまるもんか」

自分はこれでやっと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑^{あな}の中がみんな響き

出す。その響が収まると前よりも倍静かになる。ところへかあん、か
あんとどこかで鑿のみと槌つちを使つてゐる音が伝わって来る。

「聞えるか」

と、初さんが顚あごで相図をした。

「聞えます」

と耳を峙そばだててゐると、たちまち催促を受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌がいい。これは自分が一も二もなく初さんに
やられているせいだろうと思つた。いくら手苛てひどくきめつけられても、
初さんの機嫌がいうちは結構であつた。こうなると得になる事がす
なわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落して、おめおめ初

さんの尻を嗅^かいで行ったら、路が左の方に曲り込んでまた峻^{けわ}しい坂になった。

「おい下りるよ」

と初さんが、後^{うしろ}も向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかった。が初さんはそれとも気がつかず下^おり出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になっている。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕^{あたごさま}様の高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になつて、いつしよに降りた。降りた時にほっと息を吐^つくと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑^{あな}のなかで、空気の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体^{からだ}も冒^{おか}されていたのである。この苦しい息で二三

十間来るとまた模様が変った。

今度は初さんが仰向けあおむに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまつて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云ったと思ったら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなった。さすが熟練の功はえらいもんだと思いながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に浮いてるようで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がっくり落おちか、それだけでなく、よほど勾配こうばいの急な坂に違ないと見当けんとうをつけた。だから頭から先へ突っ込めばのめって怪我をするばかり、また足をむやみに出せ

ば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後へ手うしろを突いた。ところがこの所作しよさがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべったり突いてしまった。ぴちやりと云った。ア・テ・シ・コを伝わって臀部でんぶへ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分はしまつたと思ひながらも直すぐ両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ぶら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗った。自分は念のためこの堅いものをぴちゃぴちゃ足の裏で敲たたいて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡りようけんであつた。

「何で足ばかり、ばたばたやってるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張って立ちねえな。意久地のねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立った。

「まるで傘の化物からかさばけもののようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかったから、別に笑う気にもならなかった。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かったと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が変わって、前よりは幾分いくぶんか親切になった。偶然の事がどんな拍子ひょうしで他の気ひとに

入らないとも限らない。かえって、気に入ってやろうと思つて仕出^しか
す芸術は大抵駄目なようだ。天巧^{てんこう}を奪うような御世辞使はいまだかつ
て見た事がない。自分も我が身が可愛^{うま}さに、その後^ごいろいろ人の御機
嫌を取つて見たが、どうも旨^{うま}い結果が出て来ない。相手がいくら馬鹿
でも、いつか露見するから怖^{こわ}いもんだ。用意をして置いた挨拶^{あいさつ}で、こ
の傘の化物に対する返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を
折つて失敗するのは愚^ぐだと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地か
ら人と交際をしている。ただ困るのは演舌^{えんぜつ}と文章である。あいつは骨
を折つて準備をしないと失敗する。その代りいくら骨を折つてもやつ
ぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折つた失敗は、人の氣
に入らないでも、自分の弱点^{ぼろ}が出ないから、まあ準備をしてからやる

事にしている。いつかは初さんの氣に入つたような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向つて、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短えや
な」

と云つた。坑あなの中でカンテラを点つけた、初さんはたしかに日は短えや
なと云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所まで行くと、初
さんは、右へ曲つた。また段々が四五間続いている。それを降り切る

と、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何町降なんちようりたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切って、だいぶ浮世とは縁が遠くなったと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすばまって、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これは作事場さくじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉋脈があるとなると、そこを掘り拡ひろげて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負うけおい仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五

日くらいと踏んだ作事に半月以上食い込む事もある。こう云う訳で、シ・キのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御構なくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシ・キの入口こそ、平らでもあり、また一条でもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも条路えだみちができて、方々に作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シ・キの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちょうど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書蠹のむしが本を食うと見立てても差し支さない。つまり人間が土の中で、銅を食あかって、食い尽すと、また銅を探し出して食いにゆくんでもやみに路がたくさんできてしまつたのである。だから、いくらシ・キの中を通つても、ただ通るだけで作

事場へ出なければ坑夫には逢^あわない。かあんかあんという音はするが、音だけでは極^{きわ}めて淋^{さみ}しいものである。自分は初さんに連れられて、シ・キへ這^{はい}入ったが、ただシ・キの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。――稲妻^{いなずま}形に段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢^あわないものだから、はなはだ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかつた。

見ると丸太^{まるた}の上に腰をかけている。数は三人だつた。丸太は四つや丸太^{まるた}で、軌道^{レール}の枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうし

て、ここまで運んで来たかとうてい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シ・チュ・ウが必要な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰ふたありを掛けて、残る一人が屈しゃがんで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺つぼがある。伏せてある。一人がこの壺を上から抑おさえている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙あげた。下から賽さいが出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カ・ン・テ・ラが土の壁に突き刺してある。暗い灯ひが、ぎろりと光る三人の眼球めだまを照らした。光ったものは実際眼球だけである。坑は固もとより暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙けぶりを吹いている所は、

濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そうして動いている。

カン・テ・ラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集つていたから、なおさら変であつたが、自分が這入るや否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺つぼが見えたのである。壺の下から賽さいが見えたのである。壺と、賽と、三人の異な叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たんである。よくはわからない顔であつた。一人の男は頬骨ほおぼねの一点と、小鼻の片傍かたわきだけが、灯ひに映つた。次の男は額と眉まゆの半分に

光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持っていた、カンテラを四五尺手前から真向に浴びただけである。——三人はこの姿勢で、ぎろりと眼を据えた。自分の方に。

ようやく人間に逢って、やれ嬉しやと思った自分は、この三対の眼球を見るや否や、思わずぴたりと立ち留った。

「手前は……」

と云い掛けて、一人が言葉を切った。残る二人はまだ口を開かない。自分も立ち留まったなり、答えなかった。——答えられなかった。すると

「新めえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状す

ると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍そばにいる事も忘れて、ただおやつと思った。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬かたくこわ張り掛けたところへ「新めえだ」と云う声がした。この声が自分の左の耳の、つい後うしろから出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついてたなと思い出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもとへ引き返した。自分は一步傍わきへ退のいた。初さんに前へ出てもらうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてゐるな」

とカン・テラを提さげたまま、上から三人の真中に転がつてゐる、壺と賽を眺ながめた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合わなかった。やがて、四つや丸太まるたの上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉しくなつて元気が出て来た。初さんの側そばへ腰をおろす。ア・テ・シ・コききめの利目は、ここで始めて分つた。旨い具合うまに尻うしが乗つて、柔らかに局部こたへ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩くららんだか、眩くららんだか、眩くららまないんだか、坑あなの中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかったが、こう尻を掛けて落ちつくとき、大きに楽らく

になる。四人がいろいろな話をしている。

「広本へは新らしい玉が来たが知ってるか」

「うん、知ってる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前は」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑った。これは這入って来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑っても笑わなくっても、顔の輪廓がほとんど同じである。

「随分手廻しいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シ・キ・へ這入ると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだって、そうだろう」

と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。その語調には妙に咏嘆の意が寓してあつた。自分はあまり突然のように感じた。

そうしているうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前はどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他の^{ほか}が、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場^{はんば}へ着くが早いのか、今度は反対に、儲からない儲からないで立てつづけに責められるので、大いに辟易^{へきえき}した。しかし地の底ではよもやそんな話も出まいと思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多^{めった}な事を云えば擲^はりつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云つて返事をしなければまたやりつけられる。そこで、こう云つた。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山^{やま}には神様がいます。いくら金を蓄^ためて出ようとしたって駄目

だ。金は必ず戻ってくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だ」
だるま

と云つて、四人よつたりながら面白そうに笑つた。自分は黙っていた。すると

四人は自分を措おいてしきりに達磨の話が始めた。約十分余りも続いた

ろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考えたうちに一

番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑あなのなかに

屈しゃがんでるところを、艶子つやこさんと澄江すみえさんに見せたらばと云う問題で

あつた。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさましいと

云つて愛想あいそを尽かすだろうかと疑つて見たが、これは難なく気の毒

がつて、泣くに違ないと結論してしまつた。それでひとめ
姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜囲炉裏の傍でさん
ざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考
えた。ところが今度は正反对で、二人共傍にいてくれないで仕合せだ
と思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意気地のない、大いに
苛められている自分の風体と、ハイカラの女を二人描き出したら、は
なはだ気恥ずかしくなつて腋の下から汗が出そうになつた。これで見
ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみか、
少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅の利かないところだけ
を、女に見せたくなかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、
誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自分を頼るほどの弱

いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々芝居しばいぎ気を出す。自分がア・テ・シ・コしりを臀しりに敷いて、深い坑のなかで、カン・テ・ラひつさを提ひげたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がっていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらい大きな音がした。その音は自分の足の下で起ったのか、頭の上で起ったのか、尻かを懸かけた丸太まるたも、黒い天井てんじょうも一度に躍おどり上ったから、分からない。自分の頸くび

と手と足が一度に動いた。縁側えんがわに脛はぎをぶらさげて、膝頭ひざがしらを丁ちようと叩たたくと、膝から下がぴくんと跳はねる事がある。この時自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に來たような氣がした。身体ばかりじゃない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打って、たちまち我れに歸った。音はまだつづいている。落雷どくげんを、土中どちゆうに埋うずめて、自由の響おききを束縛そくばくしたように、渋しぶつて、焦いらつて、陰いんに籠こもつて、抑おさえられて、岩にあたつて、包まれて、激して、跳はね返されて、出端でを失つて、ごうと吼ほえている。

「驚いちゃいけねえ」

と初さんが云った。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やっちまうかな」

と、鑿^{のみ}を取り上げた。初さんと自分は作事場^{さくじば}を出る。ところへ煙^{けむ}が来た。煙硝^{えんしょう}の臭^{におい}が、眼^めへも鼻^{はな}へも口^{くち}へも這^{はい}入^いった。噎^むせつぽくって苦し
いから、後^{うしろ}を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始め
だした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳^{こた}に応^{こた}えた
時、こりや坑内で大破裂が起ったに違^{ちが}いから、逃^にげないと生命^{いのち}が危
ないとまで思い詰^しめたくらいなのに、初さんはますます深く這^{はい}入^いる気^け
色^きだから、気味が悪^{わる}いとは思^{おも}ったが、何しろ自由行動のとれる身体で
はなし、精神は無論独立の気象^{きしょう}を具^{そな}えていないんだから、いかに先輩

だって逃げていい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後をつ
けて出ると、むっとするほどの煙けむが向うから吹いて来たんで、こりや
迂濶うっかり深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後うしろを向く途端とたんに、
さっきの連中がもう、煙の中かあん、かあん、鉋あらがねを叩たたいているのが
聞えたんで、それじゃやっぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問
を起して見たのである。すると初さんは、煙の中で、咳せきを二つ三つし
ながら、

「驚かなくつてもいい。ダ・イ・ナ・マ・イトだ」
と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シ・キ・ヘ這入はいった以上、仕方がねえ。

ダイナ・マイトが恐ろしくつちや一日だって、シキへは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜くぐって行く。満まんざら更苦しくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思った。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切って、陸おかの上なら、大抵晴れ渡った時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這はってるように感じたり噎むせつぽく思ったのかも知れない。そうすると自分の方が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾ついて行つた。また胎内たいたい潜りくぐのような穴を抜けて、三四間ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股ふたまたになっている。その条路えだみちの突き当りで、カラカラランと云う音

がした。深い井戸へ石片を抛なげ込んだ時と調子は似ているが、普通の井戸よりも、遙はるかに深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間まに、側がわへ当って鳴る音が、冴さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間てまがかかる。けれども一本道を、真直まっすぐに上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微かすかな遠くであつても、洩もらすところなく上まで送り出す。――ざつとこんな音である。カラララン。カカラアン。……

初さんが留とまった。

「聞えるか」

「聞えます」

「ス・ノ・コへ鉋を落してる」

「はああ……」

「ついでだからス・ノ・コを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達そぼがその傍そばまで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後うしろへ抜く拍子ひょうしに、大き

な箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラランと云う音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳敷にじようじきぐらいはあるだろう。箕に入れたばらの鉋あらがねを、掘子ほりこが抛げ込んだばかりである。突き当りの壁は突立つったっている。微かすかなカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡ぬれて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗のぞいて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。自分は板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もつと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇ちゆうちよした。これでさえ踏板はすが外れ

れば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退く手間が一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地の十間にも当る。自分は何分にも躊躇した。

「出ろやい。客な野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだろう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかった。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這入るんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちゃ大変だと神経を

起すと、後から背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち^{こた}応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退^どきな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支^{ささ}えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体^{てい}を見て、すぐ傍^{わき}へ避^よけた。そうして比較的安全な、板が折れても差支^{さしつかえ}なく地面へ飛び退けるほどの距離まで退^{しりぞ}いた。掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣^{けん}呑^{のん}がるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁^{ふち}から二尺ばかり手前まで出て、足を揃^{そろ}えたから、もう留まるだろうと見ている

と、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端とたんに、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突っ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰おとさたもない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切ったと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入ってた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ

入ってた。その時初さんがこんな事を云って聞かした。

「何になつても修業は要^いるもんだ。やって見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前^{めえ}が掘子になるにしたつて、おっかながつて、手先ばかりで抛^なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心^{かんじん}の穴へは這^は入りやしねえ。そうして、鉋^{あらがね}の重みで引っ張り込まれるから、かえつて剣呑^{けんのん}だ。ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハハハハ」

と笑つた。

あともどり

後戻^{あと}をして元の路^{みち}へ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初

さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫う

ように突き当った所で、初さんが留まった。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降参こうさんしたら、落第するにきまつてるから、我慢に我慢を重ねて、ここまで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだろうくらいの目算はあった。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留まつて、一段落いちだんらくつけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程みちのりはけつして一丁や二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ごめんこうむろうかしらと考えた。こう云う時の出処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよ

りも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩れる場合のうちでもっとも顕著なる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前申す通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りようじやないかと云う親密な情合も見えない。下りなくっちゃ御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇もあらわれていない。下りたかろうと焦らす気色は無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱の色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題が潜んでいる。この場合にお

ける落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穩かに同意の意を表した。^{ひよう}なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切つ立つた、屏風^{びやうぶ}のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子^{はしご}が懸^かつてゐる。勾配^{こうばい}も何にもない。こちらの壁にぴつたり食つついて、棒を空^{くう}にぶら下げたように、覗^{のぞ}くと端^{さき}が見えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛^{しば}りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己^{おれ}が先へ下りるからね。氣をつけて来たまえ」

と初さんが云った。初さんがこれほど叮嚀^{ていねい}な言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おおかた神妙^{しんぴよう}に下りましようと思つたので、幾分^{いくぶん}か憐愍^{れんみん}の念を起したんだらう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈^{しゃが}んだ。と思うと、足からだんだん這入^{はい}つて行く。しまいには顔だけが残つた。やがてその顔も消えた。顔が出ている間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまつた時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくつて、足をつま立てるようになして、上から見下^{みおろ}した。初さんは下りて行く。黒い頭とカンテラの灯^ひだけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわないと、下り損^{そこ}なうかも知れない。面目ない事が出来^{しゅつたい}

する。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんのように、膝ひざを地じにつけて、手で摺ずり下さがりながら、草鞋わらじの底で段々を探つた。

両手で第一段目を握つて、足を好加減いいかげんな所へ掛けると、背中が海老えびのように曲つた。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真直まっすぐに立つと、カンテラの灯ひが胸の所へ来る。じつとしていると燻えふされてしまふ。仕方がないから、片足下げる。手もこれに応じて握り更かえなくつちやならない。おろそうとすると、指で提さげてるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅多めったに振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかつて灯が揉もみ潰つぶされそうになる。親指へカ・ツ・プを差し込んで、振子のように動かした時は、はなはだ軽便な

器械だと思つたが、こうなると非常に邪魔になる。その上梯子はしごの幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて来て恐怖が手伝う。そうして握り直したんびに、段木だんぎがぬらぬらする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透すかして見ると、へな土が一面に粘ついている。上り下りのぼさがの草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗のぞいた。よせば善かつたが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻つて、かたく握つた手がゆるんで来た。これは死ぬかも知れない。死んじや大変だと、噛かじりついたなり、いきなり眼を閉ねむつた。石鹼球シャボンだまの大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本当を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶつ

た眼の前に湧^わいて出る石鹼球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいます。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目舞^{めまい}のする前に、ちらりと初さんを見たに違いないだが、ぐらぐらと咄癡^{とつち}て、死ぬ方が怖^{こわ}くなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛^かりついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑^{あな}は暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立つた壁の向う側を降り

ているようだ。今度は二度目のせい、落ちるほど眩暈めまいもしなかった
んで、よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はて
なと思った。ところへカン・テ・ラがまたじいと鳴った。保証つきの灯火あかり
だが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分も
ここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬる
ぬるする段木だんぎを握り更かえ、握り更えてようやく三間ばかり下がると、
足が土の上へ落ちた。踏んで見たがヤッぱり土だ。念のため、手を離
さずに足元の様子を見ると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も
幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の
梯子がついている。手を延ばすと届くように懸かけてある。仕方がない
から、自分はまたこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降り

た。長さは前と同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸けてある。どうも是非に及ばない。また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸っている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠^{だる}くなって、足が悸^{ふる}え出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇^{まつくら}だ。自分のカンテラへはじいじいと点滴^{しずく}が垂れる。草鞋^{わらじ}の中へは清水^{しみず}がしみ込んで来る。しばらく休んでいたら、手が抜けそうになった。下り出すと足を踏^はみ外^{はず}しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめって逆^{さか}さに頭を割るばかりだと思つと、どうか、どうか、段々を下り切る力が、どっかから出て来る。あの力の出所^{でどころ}はどうてい分らない。しかしこの

時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染み出すように来たから、自分でも、ちゃんと自覚していた。ちょうど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくいが、何しろ降りた事はたしかである。下読をする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えているごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちょうど十五あった。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸い一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちゃ、どうだ」

と奨励^{しょうれい}した。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的^{えみ}の笑^もを洩^もらした。そこで自分も我慢のしついでだと観念して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに

従つて路へ水が溜つて来た。ぴちやぴちやと云う音がする。カンテラ
の灯^ひで照らして見ると、下谷^{したや}辺の溝渠^{どぶ}が溢^{あふ}れたように、薄鼠^{うすねずみ}になつて
だぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷たい。指の股が切られる
ようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、ま
た無惨^{むざん}にも水の中へ落さなくっちゃならない。片足を揚げると、五位^{ごいさ}
鷺^ぎのようにそのまま立っていたくなる。それでも仕方なしに草鞋^{わらじ}の
裏を着けるとぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭^{ひれ}のような波
が立つ。その片側がカンテラの灯できらきらと光るかと思うと、すぐ
落ちついてもとに帰る。せつかく平^{たいら}になつた上をまたぴちやりと踏み
荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這^{はい}入つて
行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜^{くぐ}り抜けたら、乾いた所へ出

られる事かと、受け合われない行先をあてにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつてた水が急に脛^{すね}まで来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がっくり落ちがして膝^{ひざ}まで漬^つかつちまう。こうなると、動きたんびにぎぶぎぶ云う。膝で切る波が渦^{うず}を捲^まいて流れる。その渦がだんだん股^{もも}の方へ押し寄せてくる。全く危険だと思った。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑^{あな}のなかで、いっばいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなって来た。しかるに初さんは辟^{へきえき}易^{てい}した体もなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後^{うしろ}から聞いて見たが、初さんは別に返事もしずに、依然として、ざ

ぶりざぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬^つかっているのは、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、または廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒^{おか}されながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思ってるうち、水はとうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後^{うしろ}から初さん呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾^{わがみ}身を思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云^{まぎわ}う間際には単音^{たんいん}の叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前^{まへ}を憚^{はば}るだけの余裕があ

るから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留まったなり、振り返った。カ・ン・テ・ラを高く差し上げる。眸ひとみを据すえると初さんの眉まゆの間に八の字が寄って来た。しかも口元は笑っている。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰あたりの辺を、物凄ものすごそうに眺ながめた。初さんは毫ごうも感心しない。やっぱりにこにこしている。出水でみずの往来を、通行人が尻でみずをまくって面白わたそうに渉わたる時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしようか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだったが、やがて真面目^{まじめ}になつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなあ^{あたりめえ}当前だ。そんなに、おっかながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股^{また}まで濡^ぬらしてついて行つた。たださえ暗い坑^{あな}の中だから、思い切つた喩^{たとえ}を云えば、頭^{くちやみ}から暗闇

に濡れてると形容しても差支^{さしかえ}ない。その上本当の水、しかも坑と同じ

色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝^{くるぶし}からだんだん競^せり上がつて来る。今では腰まで漬^つかっている。しか

も動きたんびに、波が立つから、実際の水際以上までが濡れてくる。

そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よ

りも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体が腹まで冷えてくる。
坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切つて、不知案内
の所を海鼠なまこのようについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞
のように深く開いてる中から、水が流れて来る。そうしてその中でか
あんかあんと云う音がする。作事場さくじばに違いない。初さんは、穴の前に
立つたまま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」
と聞いた。自分は、胸が水に浸るまで、屈ひたんで洞の中を覗のぞき込んだ。
すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取
り留めのつかない、微かすかな灯を無理に広い間まへ使つて、引っ張り足りない
いから、せつかくの光が暗闇くらやみに压倒されて、茫然ぼうぜんと濁ていっている体で

あった。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついている辺^{あたり}から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返^はったものが、纏^{まと}まつて穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這^へ入^えって見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じゃ止^やめにして置^きこう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但^{ただ}し書^{がき}をつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案^{あん}の定^{じょう}釣り出された。

「明日^{あした}っから、ここで働くんでしょうか。働くとするれば、何時間水に

漬かつてる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になったんだろう。

「だって八時間は働かなくっちゃならないんでしょ」

「そりゃきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切ってらあ。だが

心配しなくってもいい」

「どうしてですか」

「^{いい}好いてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙って歩き出した。二三歩水をざぶざぶ云わせた時、初さんは急に振り返った。

「新前は大抵二番坑か三番坑で働くん^{しんめえ}だ。よっぽど様子が分らなくっちゃ、ここまで下りちゃ来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑った。自分もにやにやと笑った。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝くるぶしまで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉うれしかった。それから先は、とんとん拍子びょうしに嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のス・ノ・コから落ちて来た鉋あらがねを聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシ・キの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうぶつた。いくら面白く運転する器械でも、明日あすの自分に用のない所は見る気にならなかつた。器械を見ないとするところで、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さん

が帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬かるのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡れないで済む路を通ってくれた。それでも十間ほどは腫ら脛まで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来たなど感づいて、往きに臍の近所が氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鵜の嘴と善い方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしょうか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉快だったが、しばらくすると、例の梯子の下へ出た。水は胸までくらい我慢

するがこの梯子には、――せめて帰り路だけでも好いから、遁れた
かったが、やっぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀しよくの栈道さんどうと云
う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、栈道を逆さかに釣かるして、
未練なく傾斜の角度を抜きにしたものである。自分はそこへ来ると急
に足が出なくなった。突然脚氣かっけに罹かかったような心持になると、思わ
ず、腰うしろを後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られた
のかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分
が起ったんで、強いて形容すれば、疝氣せんきに引つ張られたとでも叙じよした
ら善かろう。何しろ腰が伸のせない。もっともこれは逆栈道さかさんどうの崇たりだと
一概に断言する気でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ
御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上って、奮発たかの箍ががしだ

いしだいに緩ゆるんだのもたしかな事実である。何しろ歩けなくなつた。

この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁へつぱり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云つたぎり、暗い所を潜くぐつて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。ア・テ・シ・コはこう云うときに非常に便利になる。御蔭おかげで、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚よごれたりする憂いがないだけ、惨憺みじめなうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬く曲つた背中を壁へ倚もたせた。これより以上は横のものを豎たてにする気もなかつた。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。身体からだが動かないから、心

も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方相^{あい}び合^あって、生死^{せいし}の間に彷徨^{ほうこう}していたと見えて、しばらくは万事が不明瞭^{ふめいりょう}であつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸って見たいような気がしたが、だんだん心が昏^{くら}くなる。と坑^{あな}のなかの暗いのも忘れてしまふ。どっちがどっちだか分らなくなつて朦朧^{もうろう}のうちに合体稠^{がったいちゆうわ}和して来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆^{しゃば}氣^{つき}であるから、いくら不透明でも正氣は失わない。ちやうど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈^{はげ}し過ぎて困る自分には——

東京にも田舎いなかにもおり終おせない自分には——煩悶はんもんの解熱劑げねつざいを頓服とんぷくしなければならぬ自分には——神經纖維しんけいせんいの端はじの端まで寄つて来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もし驅落かけおちが自滅の第一着なら、この境界きょうがいは自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停車場ステーションである。自分は初さんに置いて行かれた少時しばしの休憩時間内に、図はからずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正氣の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆氣と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄

である。けれど自覚はたしかにあった。正気を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動を恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が減却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の差である。その最も淡い生涯の中に、淡い喜びがあった。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していたらう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったらう。ところが——ここでまた新しい心の活作用に現参した。

というのはあいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留っていて

くれなかつた。動いて来た。油の尽きかかつたラン・プの灯ひのように動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいぜい十のものが、今は五になつて留まっていた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなければならない。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれしさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚していた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違ない。だから理窟りくつから云うと、意識がどこまで降さつて行こうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するよりほかに道はなはずである。ところがだんだんと競せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗あん中から躍おどり出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじゃ大変だと云う考えが躍

り出した。自分は同時に、かつと眼を開いた^あ。

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通^{かよ}つて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじゃ大変だ」までが順々につながつて来て、そこで、ぷつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作^{しよさ}になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向転換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証拠^{しやうこ}には、眼を開いて、身の周囲^{まわり}を見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残っていた。たしかに残っていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころで

はない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたときや受け取れなかった。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神は大嫌だ。だいきらひ やつぱり自分が自分の心に、あわてて思ひ浮べたままであらうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようとは夢にも思ひ浮べなかった。これだから自殺などはできないはずである。こう云う時は、魂の段取が平生と違だんどりうから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。氣をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身かげみにつき添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救つたんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかつたのは、己惚うぬぼれの強い割には感心

である。自分は生れつきそれほど詩的でなかったんだろう。

そこへ初さんがひょつくり帰って来た。初さんを見るが早いか、自分の意識はいよいよ明瞭めいりようになった。これから例の逆棧道さかさんどうを登らなくっちゃならない事も、明日あしたから、鑿のみと槌つちでかあんかあんやらなくっちゃならない事も、南京米ナンキンまいも、南京虫ナンキンむしも、ジャ・ン・ボーだるまも達磨も一時に残らず分ってしまい、そうして最後に自分の墮落がもつとも明かに分つた。

「ちったあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登ってやろう」

と云うから、礼を云って立っていると、初さんは景気よく段木だんぎを捕えつかま

て片足踏ん掛けながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾いて来ねえ」

と振り返って、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になって、下から見上げると、初さんは登って行く。猿のように登って行く。そろそろ登ってくれる様子も何もありやしない。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切って登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。

初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子に託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体が後へ反れる。反れた重みは、両手で持ち応えなけ

ればならないから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平と五本の指で、この^{ひら}高を握らなければならない。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇に逆落しになる。^{まっくらやみ}離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰^{かえん}のような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになつた。

二三度上^{うわまぶた}瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼうつとしている。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。手の甲で擦^{こす}ろうと思うが、あやにく両方とも塞^{ふさ}がつている。自分は口惜^{くやし}くなつ

た。なぜこんな猿の真似をするように零落おちぶれたのかと思った。倒れそうになる身体からだを、できるだけ前の方にのめらして、梯子もたに倚れるだけ倚れて考えた。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まったと云い切ってもよろしい。何しろ動かなくなった。また動けなくなった。じっとして立っていた。カン・テ・ラのじいと鳴るのも、足の底へ清水しみずが沁み込むのも、全く気がつかなかった。したがって何分なんぶん過たったのかとんと感じに乘らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかであるのに、眼だけが霞かすんでくる。いくら瞬まばたきをしても駄目だ。湯の中に眸ひとみを漬けてるようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。癩かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食い締しばって、両手で握った段木を二三度揺り動

かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。——梯子の下では、死んじゃ大変だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生涯しょうがいにおける心理推移の現象のうちで、もつとも記憶すべき事実である。自分は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえって、実際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にしたい。

ア・テ・シ・コを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ

寄りかかっていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づくけいろ。徑路を取るのが普通である。ところがその普通の徑路を行き尽くして、もうこれがどん詰づまりだと云う間際まぎわになると、魂が割れて二様の所作しよさをする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切きりの手前まで行って、急に反対の方角に飛び出して来る。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確実になる。自分が梯子はしごの下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行つ

たものが、順路をてくてく引き返す手数てすうを省はぶいて、急に、娑婆しやばの真中に出現したのである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢あった。自分は初さんの後あとを追っ懸けて登らなければならない。その初さんは、とつくに見えなくなってしまった。心は焦あせる、気は揉もめる、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——万事が痛切である。自覚の強度がしだいに劇はげしくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向って登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興ふんこうの極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはそ

の一つ、——すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打って、魂が消極の末端にひょっくり現われる奇特きどくである。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切った途端とたんに、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上かつじょうより死に入る作用と名なづけている。この作用は矛盾のごとく思われるが実際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証拠しやうこ發奮して死ぬものは奇麗きれいに死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨うまく死に切れなようだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々いまいましい、死んじまえと思った時は、手を離すのが怖こわくも何ともなかった。無論例のごとくどきんなどとはけっしてしなかった。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙

な精神作用を承当した。しやうとう

自分は元來が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かったから、今まで浮氣に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやって見せたいと云う念があつた。短銃ピストルでも九寸五分くすんごぶでも立派に——つまり人が賞めてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴けごんの瀑たきまでも出向きたいなどと思つた事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊くるのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目まじめであつたにしても、さほど差し逼せまつてはいなかつたんだろう。しかしこのくらい断乎だんことして、現に梯子段はしごだんから手を離しかけ

た、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張って
いたに違ない。もっともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した
懸隔けんかくもあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思
わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅沢ぜいたく過ぎたようだ。しかし
この贅沢心のために、自分は発作性ほっさせいの急往生を思いとまつて、不束ふつつかな
がら今日まで生きている。全く今は際きわにも弱点を引張っていた御蔭
である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思って、体を心持後あとへ
引いて、手の握にぎりをゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死ん
だつて冴さえない。待て待て、出てから華嚴けごんの瀑たきへ行けと云う号令——
号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡った。ゆるめ

かけた手が自然と緊しまつた。曇った眼が、急に明かるくなつた。カン・テ・
ラが燃えている。仰向あおもむくと、泥で濡ぬれた梯子段が、暗い中まで続いて
いる。是非共登らなければならない。もし途中で挫折ざせつすれば犬死にな
る。暗い坑あなで、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鉋あらがねと同じよ
うにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさ
え忘れられるのは——よし見つかつても半獸半人の坑夫共に輕蔑けいべつされ
るのは無念である。是非共登り切つちまわなければならない。カン・テ・
ラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。
坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野
と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければ
ならない。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕のつくほど強く握った。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カ・ン・テ・ラの灯は暗い中を豎に動いて行く。坑は層一層と明かるくなる。踏み棄てて去る段々はしだいに暗い中に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカ・ン・テ・ラを翻えすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかかって、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻えす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉って、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が

動いている。動く手も動く足も見えない。手障足障^{てざわりあしざわり}だけで生きて行

く。生きて登って行く。生きると云うのは登る事で、登ると云うのは生きる事であつた。それでも——梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登ったのか、天佑^{てんゆう}で登ったのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚^{さと}つた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じゃ気味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。えらいや」

と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子^{はしご}の上でよつぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪^わるかったから途中で休んでいました」と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困^こつたろう。途中つて、梯子の途中か」

「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日^{あす}は作業もできめえ」

この一言^{いちごん}を聞いた時、自分は糞^{くそ}でも食^{くら}えと思った。誰^もが土竜^{どりゅう}の真似^{まね}なんかするものかと思った。これでも美しい女^{おんな}に惚^ほれたんだと思った。坑^{あな}を出れば、すぐ華厳^{けごん}の瀑^{たき}まで行くんだと思った。そうして立派に死ぬんだと思った。最後に半時もこんな獣^{けだもの}を相手にしていられるものかと思った。そこで、自分は初さんに向って、簡単に、

「よければ上がりましょう」

と云った。初さんは怪訝けげんな顔をした。

「上がる？ 元氣だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲目めあきめくら。人を見損みそくなやがつて」と云いたかった。しかし口だけは叮嚀ていねいに、一言ひとこと、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やっぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じょうだんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましょう」

と自分はむっとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行っちゃいけねえ、後あとから尾ついて来ね

え」

「そうですか」

「あたりめえ当前だあな。人つけ。誰が案内を置き去おざりにして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退のけないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折ったり、四つに這はったり、背中を横よこつ丁ちよにしたり、頭だけ曲げたり、坑あなの恰好かつこうしだいでいろいろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようなのである。畜生中ちゆうつ腹はらで急ぎやがるなど、こっちも負けない気で歩き出したが、そこへ行くと、いくら気ばかり張っていても駄目だ。五つ六つ角を曲って、下りたり上あがったり、がたつかせてい

るうちに、初さんは見えなくなつた。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄う。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠つたように打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見ていろと云う勢で、根限り這つたり屈んだりしたが、残念な事には初さんの歌がだんだん遠くへ行つてしまふ。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのてててててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見当がついたが、しまいにはそのてててても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすがに茫然とした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力で日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒した坑だから、

まるで土蜘蛛^{つちぐも}の根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開^あいている。滅多^{めった}な穴へ這入^{はい}るとまた腰きり水に漬^{つか}る所か、でなければ、例^{れい}の逆さ^{さか}の栈道^{さんどう}へ出そう^で容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留^{とど}って、カンテラの灯^ひを見詰めながら考^{かんが}えた。往きには八番坑まで下りて行^いったんだから帰りには是非共電車^{でんしゃ}の通る所まで登^{のぼ}らなければならぬ。どんな穴でも上^{のぼ}りならば好いと^うする。その代り下りなら引返^{ひきかえ}して、また出直^{でちく}す事にする。そうして迂^う路^ろついていたら、どこかの作事場^{さくじば}へ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。こう決心^{けっしん}をして、東西南北の判然^{はんぜん}しない所を好い加減^{まじ}に迷^{まよ}っていた。非常に氣が急^せいて息が切れたが、めっちゃめっちゃに歩いたために足の冷たいのだけは癒^{なお}った。しかしなかなか出られない。何だか

同じ路を往ったり来たりするような案排あんばいで、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶつけて割っちまいたくなつた。どっちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疔癢かんしゃくが起つた。どうも歩けば歩くほど天井てんじょうが邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋わらじの底で踏む段々が邪魔になる。坑総ひび体が自分を閉じ込めて、いつまで立っても出してくれないのがもつとも邪魔になる。この邪魔ものの一局部へ頭を擲たきつけて、せめて罅ひびでも入らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華嚴けごんの瀑たきへ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向うから一人の掘子ほりこが来た。ばらの銅あかがねをスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕みを抱だいてよちよちカン・テ・ラを揺ゆりながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくって胸がどき

りと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄って行くと、近寄るがも
のはない、向うでもこつちへ歩いて来る。二つのカンテラが一間ばか
りの距離に近寄った時、待ち受けたように、自分は掘子の顔を見た。
するとその顔が非常な蒼ん蔵であつた。この坑のなかですら、只事と
は受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見た
ら、大変な蒼ん蔵に違ちがない。それで口を利きくのが厭いやになった。こんな
奴の癖に人に調戯からったり、𦵏なぶったり、辱はずめたりするのかと思つた
ら、なおなお道を聞くのが厭いやになった。死んだって一人で出て見せる
と云う氣になつた。手前共に口を聞くような安っぽい男じゃないと、
腹の中でたしかに申し渡して擦すれ違つた。向うは何にも知らないか
ら、これは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カンテラ

は一つになった。気はますます焦慮^{いら}つて来た。けれどもなかなか出ない。ただ道はどこまでもある。右にも左にもある。自分は右にも這入った、また左にも這入った、また真直にも歩いて見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少しく途方に暮れている鼻の先で、かあんかあんと鳴り出した。五六歩で突き当って、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫がしきりに槌^{つち}を振り上げて鑿^{のみ}を敲^{たた}いている。敲くたんびに鉋^{あらがね}が壁から落ちて来る。その傍^{そば}に俵がある。これはさつきスノコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰っている。掘子^{ほりこ}が来て担^{かつ}いで行くばかりだ。自分は今度こそこいつに聞いてやろうと思った。が肝心^{かんじん}の本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休ん

で行こうと云う気が起った。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持って来いの腰掛になる。自分はどさつとア・テ・シ・コを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんでい」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳には敲たたき込まれるように響いた。高い影は大股に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張った、体格の逞たくましい男であつた。顔は背の割に小さい。その輪廓りんかくがやや判然する所まで来て、男は留まつた。そうして自分を見下みおろした。口を結んでいる。一二重瞼ふたえまぶたの大きな眼を見張っている。鼻筋が真直まっすぐに通っている。色が赭黒あかぐろい。ただの坑夫では

ない。突然として云った。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生のように軽蔑けいべつしていたのに、――誓って死んでしまおうと覚悟をしていたのに、――大股に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしくなった。しかし、

「何でこんな所を迷子まごついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意に俵の上へ腰をおろしたんでないと見極みきわめた語調である。

「実は昨夕飯場ゆうべはんばへ着いて、様子を見に坑あなへ這入はいったばかりです」

「一人でか」

「いいえ、飯場頭はんばがしらから人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちまいしました」

「先へ出た？ 手前てまえを置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太え野郎ふてだ。よしよし今に己おれが送り出してやるから待ってろ」

と云ったなり、また鑿のみと槌つちをかあんかあん鳴らし始めた。自分は命令の通り待っていた。この男に逢あったら、もう一人で出る気がなくなつた。死んでも一人で出て見せると威張った決心が、急にどこへか行つてしまった。自分はこの変化に気がついていた。それでも別に恥かし

いとも思わなかった。人に公言した事でないから構わないと思った。その後人に公言したために、やらないでも済む事、やってはならない事を毎度やった。人に公言すると、しないのとは大變な違があるものだ。その内かあんかあんがやんだ。坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐をかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さっていた。坑夫は旨そうに腹の底まで吸った煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅字の中途を、煙草入の筒でぽんと払いた。小さい火球が雁首から勢いよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落ちてじゅうと消えた。坑夫は殻に

なつた煙管をふつと吹く。羅宇の中に籠こもつた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利きいた。

「御前おめえはどこだ。こんな所へ全体何しに來た。身体からだつきは、すらりとしているようだが。今まで働いた事はねえんだろう。どうして來た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。：
：」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹なかの内うちで畜生あつかいにして、口先ばかり叮嚀ていねいにしていたのとはだいぶん趣おもむきが違ちがう。自分はただ洗せんい攪ざらい自分の思おもわくを話してしまわなだけで、話しただけは真面目に話したのである。すこしも裏

表はない。腹から叮嚀^{ていねい}に答えた。坑夫はしばらくの間黙って雁首^{なが}を眺めていた。それからまた煙草を詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開いた^{ひら}。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使った漢語である。——彼^かれは坑夫などの夢にも知りようはすがない漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日^{きのう}まで常住^{じょうじゅう}坐臥^{ざが}使っていたかのごとく、使った。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張ったなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸^{くび}を前の方に出して、胡坐^{ひざ}の膝^{ひざ}へ片手^{ぎやく}を逆に突いて、左の肩を少し聳^{そびやか}して、右の指で煙管を握って、薄^{くちびる}い唇の間から奇^{きれ}

麗な齒を時々あらわして、——こんな事を云った。句の順序や、単語の使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。——

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤しい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがいい。青年は情の時代だ。おれも覚がある。情の時代には失敗するもんだ。君もそうだろう。己もそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己の事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察している。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだろう。聞いて相談になれる身体なら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが当人の云うごとくシ・キを出られないためか、または今云い掛けたおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、懷かいき旧ゆうと云うのか、沈吟ちんぎんと云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑あなの中で、人氣ひとけはこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球めだまに吸いつけられた。そうして彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれものを二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。と

ころが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はしないが、それが基^{もと}で容易ならん罪を犯した。罪を犯して気がついて見ると、もう社会に容^いれられない身体^{からだ}になつていた。もとより酔興^{すいきよう}でした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃^{みのが}さない。おれは正しい人間だ、曲つた事が嫌^{きら}いだから、つまりは罪を犯すようにもなつたんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄^すてなければならぬ。功名も抛^{なげう}たなければならぬ。万事が駄目だ。口惜^{くや}しいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕^{とら}えられなければならない。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用した。）しかし自分が悪い覚^{おぼえ}がないのに、むやみ

に罪を着るなあ、どうしても己おれの性質としてできない。そこで突つ走った。逃げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシ・キの中へ潜り込んだ。それから六年というもの、ついに日光ひのめを見た事がない。毎日毎日坑の中でかんかんたた敲いているばかりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシ・キを出たって構わない、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕つかまらないが、出ない。こういうりや出たって仕方がない。娑婆しゃばへ帰れたって、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪やぶから棒ぼうの質問に、用意の返事を持ち合せなかったから、

はつと思つた。自分の腹ん中にあるのは、昔^{むかし}どころではない。一二年前から一昨日^{おととい}まで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮^{さえぎ}るごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは、大抵^{みつく}見悉した。でも出る気にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐^{おうと}を催^{もよお}しそうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗くつて狭^{せば}い所だと思えばそれで済む。身体も今じや銅臭^{あかがねくさ}くなつて、一日もカンテラの油を嗅^かがなくなつちやいられなくなつた。しかし——

しかしそりゃおれの事だ。君の事じゃない。君がそうなっちゃ大変だ。生きてる人間が銅臭くなっちゃ大変だ。いや、どんな決心でどんな目的を持って来ても駄目だ。決心も目的もたった二三日で突ツつき殺されてしまう。それが気の毒だ。いかにも可哀想だ。理想も何にもない鑿のみと槌つちよりほかに使う術すべを知らない野郎なら、それで結構だが。

しかし君のような——君は学校へ行つたろう。——どこへ行つた。——

——ええ？ まあどこでもいい。それに若いよ。シ・キ・へ抛ほうり込まれるには若過ぎるよ。ここは人間の屑くずが抛り込まれる所だ。全く人間の墓所はかしよだ。生きて葬ほうごられる所だ。一度踏ふん込んだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陷葬おとしあなだ。そんな事とは知らずに、大方ポン引びきの言いなりしだいになって、引張られて来たんだらう。それを君のた

めに悲しむんだ。人一人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をする。他人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人だ。^{いちにん}が、こうなっちゃ墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたって、悔^{くや}んだって墮落しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親があるか……」

自分はただ一言^{ひとこと}あると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業にいたらよかろう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよかろ

う。東京なら東京へ帰るさ。そうして正当な——君に適當な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云つてもここはいけない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたろう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安さんやすと聞きゃあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉はこれで終つた。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理非人情りひにんじようを解しない畜類の發達した化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢つたあのは全くの小説である。夏の土用に雪が降つたよりも、坑あなの中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟きせのように思われた。大晦日おおみそかを越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺ことわざも記憶していたが、窮きわまれれば通ずという熟

語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだからに思つて、芝居気を起しては困っていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違う。真から一万人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿つうふんの焰ほのおで、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻えひるがし得るほどの力をもつて、自分の耳に応こたえた。

しばらくは二人して黙っていた。安さんは一応云うだけの事を云つてしまつたんだから、口を利きかないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいては安さんに済まない。心底しんぞこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらい

たいのは山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも強^しいて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇の両端^{りようはじ}がむずむずして、小鼻がぴくついて来る。やがて鼻と口を塞^せかれた感動が、出端^でを失つて、眼の中にたまつて来た。睫^{まつげ}が重くなる。瞼^{まぶた}が熱くなる。大に困^{おおい}つた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐^{あぐら}をかいたまま、黙つていた。その時次の作事場^{さくじば}で鉦^{あらがね}を敲^{たた}く音がかあんかあん鳴^{もくねん}つた。今考えると、自分と安さんが默然と顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだか、それを正確に知つて置きたかつた。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山^{やま}の中では有ろうはずがない。日の照らない坑^{あな}の底で、世から、人から、歴史から、太陽から

も、忘れられた二人が、ありがたい誨おしえを垂れて、尊たつとい涙を流した舞台があるとは、胡坐をかいて、默然と互に顔を見守っていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草たばこを呑み出した。ふかりふかりと煙けむが出た。その煙が濃く出ては暗がり消え、濃く出ては暗がり消える間に、自分はどうやく声が自由になった。

「ありがたいです。なるほどあなたのおつしやる通り人間のいる所じゃないでしょう。僕もあなたに逢あうまでは、今日きょう限り銅山やまを出ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切ったら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやつぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが拵こしらえてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解き釈うしていたが、さればと云つて毫ごうも貰もらう気は起おりなかつた。昨日飯場きのうはんばが頭の合力しらすごうりよくを断つた時の料簡りようけんと同じかと云うと、それとも違ちがう。昨日は是非貰もらいたかつた、地平じびたへ手を突ついてまで貰もらいたかつた。しかし草鞋わらじ銭せんを貰もらうよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂いただきたいところを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰もらいたくない。好意むなを空くしくすると云う点から見れば、貰もらわなければ済す

まないし、坑夫をやめるとすれば貰う方が便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかった。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰っては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるという念から萌したものらしい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、自分の体面を損う虞がある。向うの好意を享けて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらも悦ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫りに自己の利得のみを標準に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗なものである。自分は

「旅費は頂きません」

と断った。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸^{ふか}して、煙管^{きせる}を筒^{つつ}へ入れかけていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云ったんで、自分は非常に気の毒になった。もしやるから貰^{もら}って置けどでも強いられたならきつと受けたに違^{ちが}ない。その後^ご氣^きをつけて、

人が金を貰^{もら}うところを見てみると、始めは一応辞退^{ふところ}して、後では大抵

懐^{ふところ}へ入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないんだろうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりや失敬した」

と云ってくれたんで、自分はこの形式に陥^{おちい}らずに済んだのはありがた

かった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍にぶった際だから、ことによれば、旅費だけでも溜めた上、帰る事にしようと言ふ腹もあつたんで、「よく考えて見ましょう。いずれその中うちまた御相談に参りますから」と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送つてやろう」

と煙草入たばこ入れを股引ももひきへ差し込んで、上から筒服つつつぽうの胴かぶを被かぶせた。自分はカン・テラカン・テラを提さげて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑あなは存外あな登り安ばかつた。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん這ばいになったら、

かなり天井てんじょうの高い、真直まっすぐに立って歩けるような路へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える所で留った。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついで上がると、軌道レールの敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくっちゃあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があつたら来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這入はいった。振り向いて、一口礼ひとくちを云った時は、もうカンテラが角を曲っていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰って来る。途中でいろいろ考えた。あ

の安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行ったら、今頃は何に成っているか知らないが、どうしたって坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪いんでなくって、社会が悪いのかも知れない。自分は若年じゃくねんであつたから、社会とはどんなものか、その当時明瞭めいりように分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌ろくなもんじゃなろうと考えた。安さんを贖ひいきにするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと

思っていた。その人間がなぜ安さんのような好人を殺したのかなおさら分らなかった。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっ
こう社会が憎らしくならなかった。ただ安さんが可哀想であつた。で
きるなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺
しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差支さしつかえない。安さんは
人間から殺されて、仕方なしにここに生きているのである。帰ろう
たつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が気の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつた
んだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮
落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味しているようだから痛まし
い。安さんも達磨だるまに金を注ぎ込むのかしら、坑あなの中で一六勝負いちろくしょうぶをやる

のかしら、ジャンボーを病人に見せて調戲^{からか}うのかしら、女房を抵当に——まさか、そんな事もあるまい。昨日^{きのう}着き立ての自分を見て愚弄^{ぐろう}しないもののないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心^{しん}までの坑夫じゃない。それでも墮落したと云った。しかもこの墮落から生涯^{しょうがい}出る事ができないと云った。墮落の底に死んで活^いきてるんだと云った。それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてか^{たた}んかん^{たた}敲いている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になった上として、できるだけ急ぎ足で帰って来ると、長屋の半丁ばかり手前に初

さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇やんだ。空はまだ曇っているが、濡ぬれる氣遣きづかいはない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しいうれい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦すりながら、いそいそ近づいてくると、初さんは奇怪けげんな顔をして、

「やあ出て来たな。よく路みちが分ったな」

と云った。自分が案内につけられながら、他ひとを置き去りにして、何とかして何とか、ててててと云う唄うたをうたって、大いに焦じらして置いて、他が大迷おおまごつきに、迷まごついて、穴の角かどへ頭をぶつつけて割って見ようともで思ったあげく、やっとの事で安さんの御情おなさけで出て来れば、「よく路が分ったな」と空とぼけている。その癖親方が怖こわいものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算もくろみである。

自分は石へ腰を掛けて薄笑いをしているこの案内の頭の上へ唾液つばきを吐きかけてやろうかと思った。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留とどまらなくっちゃならない身体からだである。唾液を吐きかければ、喧嘩けんかになるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にス・ノ・コの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐かいがない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、こうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨うまくやったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけで、それよ

り以外に賞める価値のある所作じゃないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者だくせものと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉のどの先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡りようけんであつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍そばまで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまつている。責任のある自分が、責任を抛ほうり出して、先へ坑あなを飛び出してしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭めいりように証しょう拠うだてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵かたきを打つだろう。無責任が露ば見れるのは痛快だが――

——自分はけっして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。——そこまでは痛快だが、敵打は大に迷惑する。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取つて平した地面の上に二階建がある。家はさ

ほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変らず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭が顔を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着たままである。

「帰ったか。御苦労だった。まああっちへ行つて休みねえ」

と云うが早いか初さんは消えてなくなった。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立ったまま、談話をした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりゃ大変だ。随分ひどかったでしょう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭いやでたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時に

は、さすがに情なかつた。こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体も魂も塩を懸けた海鼠のようにたわいなくなった。その時飯場頭はようやく口を利いた。奇麗さっぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰つてね。

健康の証明書を持って来なくっちゃいけない。——今日と——今日
は、もう遅いから、明日の朝、行つて見て貰つたらよからう。——診
察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたら
う。あの青いペンキ塗りの家だ。じゃ今日は疲れたらうから、飯場へ
歸つて緩くり御休み」

と云つて窓を閉てた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯

場へ引返した。緩ゆっくり御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、緩ゆっくり寝られるくらいなら、こんなに苦しみはしない。起きていれば獰猛組どうもうぐみ、寝れば南京虫ナンキンむしに責められるばかりだ。たまたま飯ふたの蓋を取れば咽喉のどへ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた以上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちにいる。シ・キの人間がみんな南京虫になっても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えである。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場はんばへ帰つて、二階へ上がった。上がると案のじよう大勢圀いろり裏そばの傍に待ち構えている。自分はいさくさした方が、できるだけ何喰くわぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐つた。すると始まつた。皮肉だか、冷評だか、罵詈ばりだか、滑稽こっけいだか、のべつに始まつた。

一々覚えていゐる。生涯しょうがい忘れられないほどに、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覚えていゐる。しかし一々繰返す必要はない。まず大体きのう昨日と同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢あいたくなつた。例の夕食ゆうめしを我慢して二杯食つて、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャン・ボーの通つた石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際ぎわを、右へ上ると斜のぼに頭の上に被かぶさつてゐる大きな槐えんじゅの奥にある。夕暮の門口かどぐちを覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒服つつぽうの掃除をしてゐた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」
と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向

いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待ってたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ^{あが}上れ」

見ると安さんは唐棧^{とうざん}の着物に豆絞^{まめしぼり}か何にかの三尺を締めて立っている。まるで東京の馬丁^{べっとう}のような服装^{なり}である。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺^{なが}めて首を傾^{かし}げて、

「なるほど東京を走ったまんまの服装^{なり}だね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあったつけ。今じゃこれだ」

と両袖^{りょうそで}の裾^{ゆき}を引っ張って見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑っていた。安さんは、

「ハハハ根性はこれよりまだ墮落しているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑って立っていた。この時分は手持無沙汰でさえあればにやにやして済ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙か世馴れている。この体を見て、

「さつきから来るだろうと思って待っていた。さあ上れ」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救ける方の側だと感心した。こいつを逆にして馬鹿に

されつけていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上って見た。部屋はやつぱり広いが、自分の泊った所ほどでもない。電気灯は点^ついている。囲^{いろり}炉裏もある。ただ人数^{にんず}が少い、しめて五六人しかない。しかも、それが向うに塊^{かたま}ってるから、こっちはたった二人である。そこでまた話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆^{あき}れている。

「あなたのおっしゃった事は、よく分っています。しかし僕だって、酔^{すいきよう}興にここまで来た訳じゃないんですから、帰るつたって帰る所はありません」

「じゃやつぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」

と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」

と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に噴き出した。

「冗談云っちゃいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅沢^{ぜいたく}じゃねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れれば代つて上げたいと思います」

と至極^{しごく}真面目に云うと、安さんは、また噴き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシ・キ・へ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責いじめられました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責ふてた。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵を打かたきってやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留とどまる気になった。あんな獯猛じゅうもうもこっちさえ強くなりやちつとも恐ろしくないんだ、十把一束じっばひとかに罵倒するくらいの勇気がだんだん出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取ってくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置い

て貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、気の毒そうな顔をして、呆れ返っていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのって、そりゃ君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、いにくいですから」

「せっかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけな
い」

自分は謹んで安さんの旨を領した。実際自分もその考えでいたんだから、これはけっして御交際の挨拶ではなかった。それからいろいろ話をしたがシキの中の述懐と大した変りはなかった。ただ安さんの兄さんが高等官になって長崎にいと云う事を聞いて、大いに感動し

た。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだろうと思うにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さんが出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出ている。

路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襯衣シャツを通して、蒲かま

鉾形ぼこなりの月の光が肌まで浸しみ込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せ

て、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩ある行き出

した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになつ

た。何の当分のうちだ。馴なれればそう苦にする事はない。何しろ一万

余人もかたまつて、毎日毎日いっしょに働いて、いっしょに飯を食つ

て、いっしょに寝ているんだから、自分だって七日も練習すれば、一人前にんまえに墮落する事はできるに違ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧わいて出たまでで、墮落の内容を明かに代表していなかったから、別に恐ろしいとも思わなかった。それで、比較的元氣づいて飯場はんばへ帰って来た。五六間手前まで来ると、何だかわいおい云っている。外は淋さびしい月である。自分は家の騒うぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入はいるのが厭いやになった。月を浴びて外に立っているのも、つらくなつた。安さんの所へ行って泊めてもらいたくなつた。一步引き返して見たが、あんまりだと氣を取り直して、のそのそ長屋へ這入まつた。横手に広い間があつ

て、上り口からは障子しょうじで立て切つてある。電気灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中うちから出る。自分は下駄げたを脱いで、足音のしないように、障子の傍そばを通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほっと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金さんきんが平たく煎餅せんべいのようになって寝ている。それから例の帆ほ木綿もめんにくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方とも極めて静かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然ばくぜんとしてただ広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみ着のまま、ごろりと横になるか、または昨ゆう夕べの通り柱もたへ倚よれて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱かかへ倚より懸かるのは

苦しい。どうかして布団ふとんを敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てて
いるから、南京虫ナンキンむしがいても寝られるかも知れない。それに蒲団ふとんの奇麗きれ
なを選よつたらよかろう。ことさら日によつて、南京虫の数が違わな
いとも限るまい。いろいろな理窟りくつをつけて布団を出して、そうつと
潜もぐり込んだ。

この晩の、経験を記憶のまま、ここに書きつけては、自分がお話し
にならない馬鹿ふいぢやうだと吹聴ふいぢやうする事になるばかりで、ほかに何の利益も興
味もないからやめる。一口ひとくちに云うと、昨夜ゆうべと同じような苦しみを、昨
夜以上に受けて、寝るが早いかな、すぐ飛び起きちまつた。起きた後
で、あれほど南京虫に螫さされながら、なぜ性懲しやうちやうもなくまた布団ふとんを引つ
張り出して寝たもんだらうと後悔した。考えると、全くの自業自得じごうじとく

で、しかも常識のあるものなら誰でも避けられる、また避けなければならぬ自業自得だから、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭いやになって、布団の上へ胡坐あぐらをかけたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫しりされた。臀ももと股と膝頭ひざがしらが一時に飛び上がった。自分は五位鷺ごいさぎのように布団の上に立った。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折って、裸の身体中所嫌わず、ぴしゃぴしゃ敲たたき始めた。それから着物を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚よりかかった。家が恋うちしくなった。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなった。戸棚に這入はいってる更紗さらさの布団と、黒天鷲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かった中形の搔捲かいまきが恋しくなった。三十分でも好

いから、あの布団を敷いて、あの搔捲を懸^かけて、暖^{あつ}たかにして楽々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後は、机を据^すえたまんま、空^{から}ん胴^{どう}にしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲も、畳んだなり戸棚にしまつてあるに違^{ちが}ない。もつたいないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京虫に食^くわれないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。羨^{うらや}ましい。

——それとも寝られないで、のつそつしているかしらん。父は寝られないと疳癪^{かんしゃく}を起して、夜中に灰吹をぽんぽん敲^{たた}くのが癖だ。煙草^{たばこ}を吞^のむんだと云うが、煙草は仮託^{かこつけ}で、実は、腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦^{にが}々しい倅^{せがれ}だと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の余り眼を覚まして敲い

てるか。どっちにしても気の毒だ。しかしこつちじゃそれほどにも思っていないから、先方さきでもそう苦にしちやまい。母は寝られないと手水ちようずに起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗って、棧さんをおろすのを忘れて、翌朝あくるあさよく父に叱られている。昨夜も今夜もきつと叱られるに違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている——どうしても寝ている。自分のいる前では、丸くなったり、四角になったりいろいろな芸をして、人を釣ってるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生へいぜいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけっして出て来ないから、始めは不思議に思ったが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなればならないのは、よッぽどの因果いんがだ。随分憎らしいと思うが、憎らし

いと思ひながらもやッぱり惚れ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちらちらする。怪しからぬ顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ氣の毒だ。しかしこつちで惚れた覺もなければ、また惚れられるような悪戯をした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくれても仕方がない。氣の毒がる事は、いくらでも氣の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と樂寢がさせて貰いたい。不斷の白い飯も虫唾が走るように食いたい、それよりか南京虫のいない床へ這入りたい。三十分でも好いからぐっすり寝て見たい。その後でなら腹でも切る。……

こう考へてゐるとまた夜が明けた。考へてゐる途中でいつか寝たも

のと見えて、眼が覚めた時は、何にも考えていなかった。それからあ
とは、のそのそ下へ降りて行つて、顔を洗つて、南京米ナンキンまいを食う。万事
昨日きのうの通りだから、省はぶいてしまふ。九時の例刻を待ちかねて病院へ出
掛ける。病院は一昨日おととい山を登つて来る時に見た、青いペンキ塗の建物
と聞いているから道も家も間違えようがない。飯場はんばを出て二丁ばかり
行くと、すぐ道端みちばたにある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広
さもかなりだけに、獐猛組じょうもうぐみとはまるで不釣合である。野蛮人が病気を
するんでさえずでに不思議なくらいなのに、病気に罹かつたものを治療
してやるための器械と薬品と医者と建物を具そなえつけたんだから、世の
中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合つて、小
学校を建てて子弟を通学させてるようなもんだ。文明と蒙昧もうまいの両極端

がこのペンキ塗の青い家の中で出逢^{であ}つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますぴんぴん蒙昧になつてくる。下手^{へた}に食い違つた結果が起るもんだ。と考えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺^{なが}めている。せつかくの考えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩^{くず}れてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように獰猛の極致を尽している。あれじゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで思つた。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈^さいたような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受け、まだ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色^{けしき}

は晴れがましいうちに湿^{しつ}とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼^{まっさお}な色が笑^えみ割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。昨夕^{ゆうべ}と今朝とではほとんど十五度以上も違うようである。道傍^{みちばた}に、たった一つ蒲公英^{たんぽぽ}が咲いている。もったいないほど綺麗な色だ。これも獰猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土^{たたき}の廊下が地面と擦^すれ擦れに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸^かって、手前の右手に控所^{はい}と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切って、控所へ這入^{はい}ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子窓^{ガラスまじ}には受附と楷書で貼りつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙^{かみ}片^{きれ}を出すと、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片

を受取つて、ありもしない眉まみえへ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺ながめた上、

「こりや御前か」

と、さも横風おうふうに云つた。あまり好い心持ではなかった。何の必要があつて、こう自分を軽蔑けいべつするんだか不平に堪たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいきようのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶あいさつが足りないと云わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれっ切り口を結んで立っていたもんだから、

「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸ガラスどを締めて出て行つた。草履ぞうりの音がする。あんな

にばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思った。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰つて来ない。ぼんやりしていると、眼の前にジ・ヤン・ボーが出て来た。金^{きん}さんがよつしよいよつしよいと担^{かつ}がれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何のために薬を盛つて、患者を施^{せり}療するの^{よう}か、ほとんど意義をなさない。こんな体裁^{ていさい}のいい偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジ・ヤン・ボーは囃^{はや}したいだけ囃す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭重^{ていちょう}の至りである。

「おいあっちへ廻れ」

と突然受附の声がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高^{いたけだか}に突立つて、自分を眼下に睥睨^{へいげい}している。自分は控所を出た。右へ折れて、廊

下伝いに診察場へ上がったら、薬の臭がふんとした。この臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思い出した。死んでこの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命というんだろう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を知ってるだけで意味は分らなかった。意味は分つても、納得がむずかしかった。西洋人が筍を想像するように定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う実際と、人間の獣類たる坑夫の住んでいるシ・キとを結びつけて、二三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくな

る。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元来この椅子に腰を掛けている本人からしてが、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見えただけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当がつかない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、薬瓶と、窓と、窓の外の日とを見廻した。もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画と見えるだけで、その他には何物をも認める事ができなかった。

そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やつぱり坑夫の類型である。黒のモーニングに縞の洋袴を着て、襟の外へ顎を

突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云った。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内^{なか}で云うべきほどの敬意が籠^{こも}っていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業って別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄介^{やっかい}になっていました」

「親の厄介になっていた。親の厄介になって、ごろごろしていたの

か」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視^みた上、いきなり自分の鼻を撮^{つま}んだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今^{こん}度^だ口^{くち}を塞^{ふさ}ぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこか悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片^{かみきれ}へ、何か書いて抛^{ほう}り出すように自分に渡した。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の下地^{したじ}である。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭^{におい}を嗅^かいで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金^{きん}さんのようによっしよいよっしよいでジャン・ボー^{ジャン・ボー}を見せ

られて、そのあげくには自分がとうとうジャンボーになつて、それから思う存分はや嘸し立てられて、敲たたき立てられて、——もつとも新参だから嘸してくれるものも、敲いてくれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——どうなる事か自分にも分らない。それは分なくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界のべつ、のつぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢きたないものと感じていたが、かように万物を色の变化と見ると、穢ないも穢なくないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがい、自分が懷手ふところをしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けごんの瀑たきなどへ行くのは面倒に

なつた。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳^{せき}をせ
くうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に
吹き払われるまでは、ここにるのが、一番骨が折れなくつて、一番
便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、
死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知
れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英^{たんぽぽ}に出逢^{であ}つ
た。さつきはもつたいないほど美しい色だと思つたが、今見ると何と
もない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まつて、
見ていたが、やっぱり美しくない。それからまたあるき出した。だら
だら坂を登ると、自然と顔が仰向^{あおもむき}になる。すると例の通り長屋から、
坑夫^{ほおづえ}が頬杖を突いて、自分を見下^{みおろ}している。さつきまではあれほど厭^{いや}

に見えた顔がまるで土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎らしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来ただだの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいに行くような心持で、親方うちの家までやって来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがないんだから、平生へいぜいならはつと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械のように挨拶あいさつをすると、娘は片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父おとつさん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭はんばがしらの娘だなど合点がてんしたが、ただ合点したまでで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行つて来ました」

「健康診断を貰つて来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやつたろうかと、始めて気がついた。

「持つてるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持っていたから、皺しわを伸のして親方に渡した。

「気管支炎。病気じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりゃ困ったな。どうするい」

「やっぱ置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするったって、病気じゃ仕方がないじゃないか。困ったな。しかしせつかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになって、はんば飯場へ帰って来た。

その晩は平気でいろり囲炉裏の側そばにあぐら胡坐をかいていた。坑夫共が何と云っ

ても相手にしなかった。相手にする料簡りようけんも出なかった。いくら騒いでも、愚弄からかつても、よしんば踏んだり蹴けたりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団ふとは敷かなかった。やはり囲炉裏そばの傍に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝うたたねをした。囲炉裏へ炭を継つぐものがないので、火の気けがだんだん弱くなつて、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟えりの所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいつぱいあった。あの星は何しに、あんなに光つてるのだろうかと思つて、また内へ這入はいった。金きんさんは相変らず平たくなつて寝ている。金さんはいつジ・ヤン・ボーになるんだろう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだろう。安さんは六年このシ・キに這入つてると聞

いたが、この先何年鉾あらがねを敲たたくだろう。やっぱりしまいには金さんのように平たくなって、飯場の片隅かたすみに寝るんだろう。そうして死ぬだろう。——自分は火のない囲炉裏はたの傍に坐つて、夜明まで考えつづけていた。その考えはあとから、あとから、仕切りしきなしに出て来たが、いずれも干枯ひからびていた。涙も、情も、なさけなさけ、色も香かもなかった。怖い事こわも、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところがないんでね、——少し困つたんだが。とうとう旨うまい口を見附めつけた。飯場の帳附ちようつけだがね。こりや無ければ、なくつて

も済む。現に今までは婆さんがやってたくらいだが、せつかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができようと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋^{わらじ}だ、やや豆だ、ヒジキだって、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んで貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取ったと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。――なに力業^{ちからわざ}

じゃないから、誰でもできる仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合だからね。^{あい}君がやってくれるとこつちも大變便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御氣の毒だ。月に四円だが。――食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかった。ようやく安心したとまでは固^{もと}り行^{とよ}かなかつた。自分の鉾山における地位はこれでやつときまつた。

^{あくるひ}翌日から自分は台所の片隅に陣取つて、^{ちようつけ}かたのごとく帳附を始め

た。すると今まであのくらい人を軽蔑けいべつしていた坑夫の態度ががらりと変つて、かえつて向うから御世辞を取るようになった。自分もさつそく墮落けいこの稽古けいこを始めた。南京米ナンキンまいも食つた。南京虫ナンキンむしにも食われた。町からは毎日毎日ポン引びきが椋鳥むくどりを引張つて来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。しかしその後東京のちへ帰ろうと思つてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東京へ歸つた。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になつていないんでも分る。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
